

やまさきうえのはる

山崎上ノ原第2遺跡

やまさきしものはる

山崎下ノ原第1遺跡

主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79号
『山崎上ノ原第2遺跡 山崎下ノ原第1遺跡』正 説 明

ページ・図表号	14	正
1955-5行目	195-6号墳内	195-6号墳内

やまさきうえのはる

山崎上ノ原第2遺跡

やまさきしものはる

山崎下ノ原第1遺跡

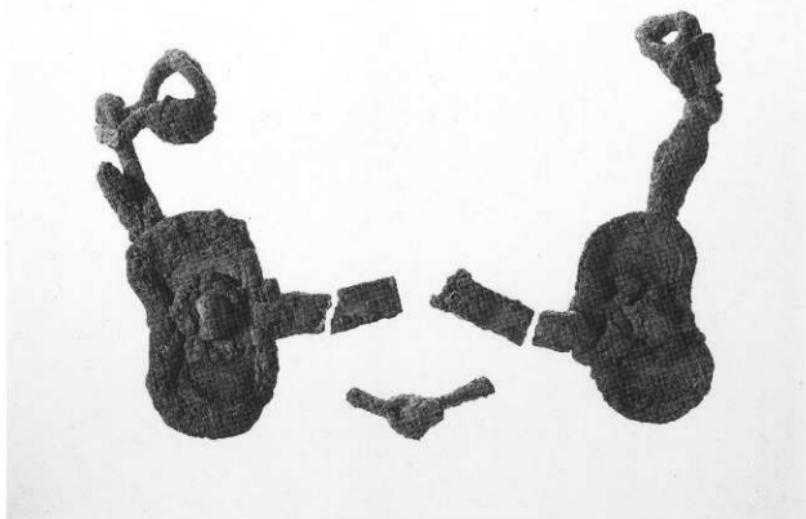
主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書!

2003

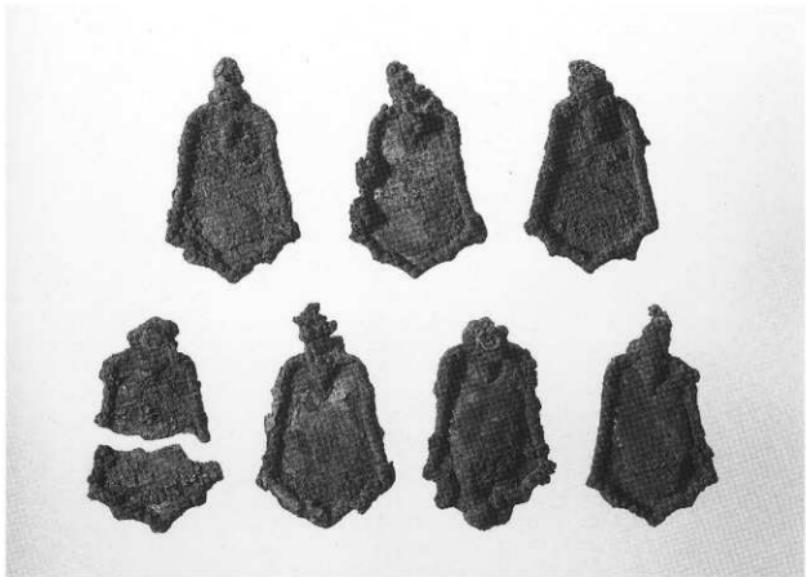
宮崎県埋蔵文化財センター



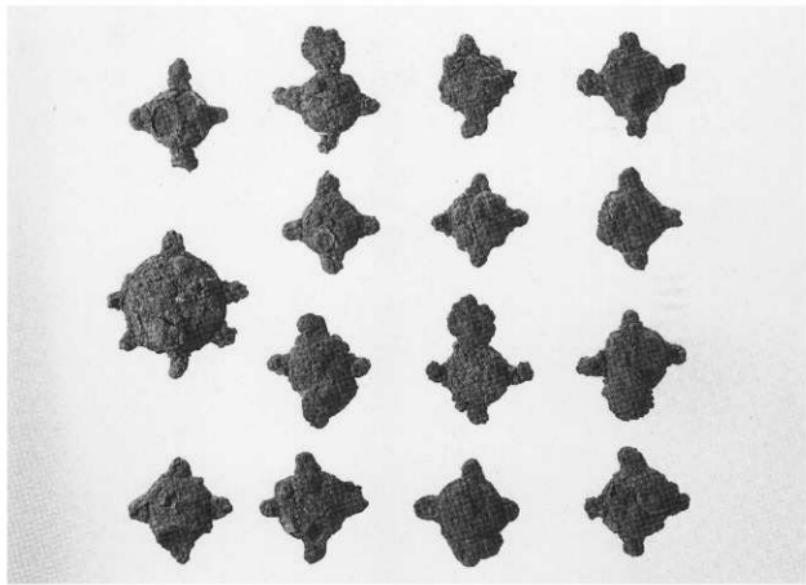
山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡調査区全景（南から）



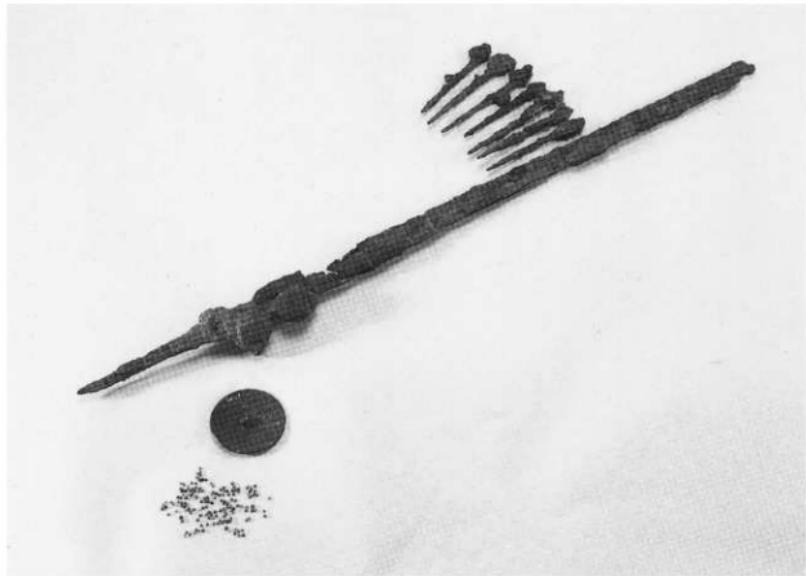
山崎下ノ原第1遺跡SC16出土馬具一



山崎下ノ原第1遺跡SC16出土馬具一



山崎下ノ原第1遺跡SC16出土馬具一3



山崎下ノ原第1遺跡第2号墳主体部出土大刀・鏡・ガラス小玉・鉄球

序

宮崎県教育委員会では、主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴い、平成13年度から山崎上ノ原第2遺跡および山崎下ノ原第1遺跡の発掘調査を実施しております。今回報告するものはそのうちの平成14年度第2次調査分までの記録です。

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡や古墳の周溝・土坑など貴重な遺構・遺物が多数検出されました。中でも、馬埋葬土坑から鉄地金銅張製馬具がセットで一括出土したことは特に注目されます。このような先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が多数得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言いただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より謝意を表します。

平成15年10月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例　　言

- 1 本書は、主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した「山崎上ノ原第2遺跡」「山崎下ノ原第1遺跡」の発掘調査報告書である。遺跡名は、当初「上ノ原第1遺跡」としていたが、調査中に遺跡名が正確でないことが判明し、文化課と宮崎市文化振興課を交えて協議した結果、県内に同名の遺跡が複数あることもあり、字名を頭に付けて北側を山崎上ノ原第2遺跡（A区からE区）、南側を山崎下ノ原第1遺跡（F区からI区）と、遺跡名を変更した。調査は、宮崎県土木部宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 発掘調査は、第1次調査を平成13年8月1日から平成14年2月28日、第2次調査を平成14年4月15日から平成14年5月24日まで2か年にわたって実施した。この2次調査分までの整理作業及び報告書作成は平成14・15年度で実施した。
- 3 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『宮崎市』を、遺跡の周辺地形図等については宮崎市都市計畫図の1万分の1図を基に作成した。
- 4 現地における実測図の作成は主として、南正覚雅士、丹俊詞が担当し、標5号墳の墳丘測量は甲斐貴充、古屋美樹がおこなった。なお、墳丘測量に当たっては、地権者である井野範男氏の協力を得た。
- 5 本書で使用した写真は南正覚、丹、今堀屋毅行が撮影し、空中写真については（有）スカイサーベイ九州に委託した。
- 6 本遺跡における自然科学分析は（株）古環境研究所、金属製品の応急処置は（株）京都科学に委託した。
- 7 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは、南正覚、丹が担当し、今堀屋、成相景子、森本征明、嶋田史子、小宇都あすさ、整理作業員の協力を得た。また、センター内の金属製品の応急処置は主として丹が行い、日高敬子、古屋、成相の協力を得た。
- 8 本書の執筆は、各調査員が分担して担当し、文責は目次に明記した。編集は南正覚・丹が担当した。
- 9 上層及び土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術會議事務局ほか監修）に掲った。
- 10 本書で使用した方位は、主に座標北（座標第II系）で、一部磁北（M. N）を用いている。レベルは海拔絶対高である。
- 11 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
堅穴住居跡（SA）　土坑（SC）　土壤基（SD）　溝状遺構（SE）　ピット（SH）
- 12 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。
- 13 独立行政法人奈良文化財研究所には、本遺跡出土の「馬具」及び「鏡」について応急処置前の調査を依頼したところ、数か月にわたって詳細な調査を行っていただいた。また、その後、調査結果並びに保存処理法等について指導・助言を賜った。このほか、調査及び報告書の作成にあたり多くの方々に指導や助言をいただいた。ここに厚く謝意を表する。
稻岡洋道（宮崎市文化振興課）　賀田雅昭（天理大学教授）　高妻洋成（独立行政法人奈良文化財研究所）
杉井　健（熊本大学助教授）　橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）
松井　章（独立行政法人奈良文化財研究所）　村上恭通（愛媛大学助教授）　柳沢一男（宮崎大学教授）

[五十音順 敬称略役職名は当時]

本文目次

第Ⅰ章はじめに

第1節 調査に至る経緯..... (飯田博之) 1

第2節 調査の組織..... (南正覚雅士) 1

第3節 遺跡の位置と環境..... (南正覚雅士) 2

第4節 調査の経過..... (南正覚雅士) 5

第5節 基本層序..... (南正覚雅士) 6

第Ⅱ章 山崎上ノ原第2遺跡の調査..... (南正覚雅士) 7

第1節 A区の調査

1 調査の概要..... 7

2 遺構と遺物..... 7

第2節 C区の調査

1 調査の概要..... 25

2 遺構と遺物..... 25

第3節 D区の調査

1 調査の概要..... 32

2 遺構と遺物..... 32

第4節 E区の調査

1 調査の概要..... 44

2 遺構と遺物..... 44

第5節 まとめ..... 52

第Ⅲ章 山崎下ノ原第1遺跡の調査..... (丹俊詞) 57

第1節 調査の概要..... 57

第2節 遺構と遺物..... 57

1 周濠の調査..... 57

2 滅失古墳の調査..... 62

3 土壌墓の調査..... 70

4 馬埋葬坑の調査..... 80

第3節 まとめ..... 96

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡周辺地形図.....	3
第3図 山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡グリッド配置図.....	4
第4図 山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡基本土層柱状図・確認トレンチ地層堆積状況図...	6

[山崎上ノ原第2遺跡]

A区

第5図 A区遺構分布図.....	7
第6図 SA1平面・遺物出土状況図.....	9
第7図 SA1出土関連遺物図.....	9
第8図 SA2・3平面図.....	10
第9図 SA4平面図.....	10
第10図 遺構平面図及び遺物出土状況図.....	10
第11図 溝状遺構断面図.....	10
第12図 SA1出土遺物実測図(1)	11
第13図 SA1出土遺物実測図(2)	12
第14図 SA1出土遺物実測図(3)	13
第15図 SA1出土遺物実測図(4)	14
第16図 SA1出土遺物実測図(5)	15
第17図 SA2出土遺物実測図.....	16
第18図 SA3出土遺物実測図.....	17
第19図 SA4出土遺物実測図.....	17
第20図 SE1・2出土遺物実測図.....	17
第21図 SA1出土遺物実測図及び包含層出土遺物実測図	18
第22図 SA5(?)出土遺物実測図.....	19

C区

第23図 C区遺構分布図.....	25
第24図 SA1・2平面図.....	26
第25図 SA3及びSD1平面図.....	26
第26図 SD2～4及びSC1平面図.....	26
第27図 SC1出土鉢石製品実測図.....	27
第28図 SD1～4出土錢貨拓影.....	29
第29図 SA1～3出土遺物実測図.....	30
第30図 SD2及び包含層出土遺物実測図	30

[山崎下ノ原第1遺跡]

第57図 山崎下ノ原第1遺跡遺構分布図 I	58
第58図 山崎下ノ原第1遺跡遺構分布図 II	59
第59図 榛5号墳墳丘測量図	60

D区

第31図 D区遺構分布図.....	32
第32図 SA1～3平面図.....	35
第33図 SA4～8平面図.....	36
第34図 SA9及びSD1平面図.....	37
第35図 SA9出土遺物実測図.....	37
第36図 SD1平面図及び土層断面図	37
第37図 SD1出土遺物実測図.....	37
第38図 SD2平面図・見透断面図	38
第39図 SA4・SD2出土遺物接合関係図	39
第40図 SD2出土遺物実測図(1)	39
第41図 SD2出土遺物実測図(2)	40
第42図 SA4出土遺物実測図(1)	40
第43図 SA4出土遺物実測図(2)	41
第44図 SA1出土遺物実測図.....	41
第45図 SA5出土遺物実測図.....	42

E区

第46図 E区遺構分布図.....	44
第47図 SA1・2平面図.....	45
第48図 SD1平面図及び土層断面図	45
第49図 SC1平面図.....	46
第50図 SA1出土遺物実測図.....	48
第51図 SA2出土遺物実測図.....	48
第52図 SD1及びSC1出土遺物実測図	48
第53図 SC1出土遺物実測図	49
第54図 SE1・2出土遺物実測図	49
第55図 包含層出土遺物実測図	49
第56図 山崎上ノ原第2遺跡出土上層実測図	50

第60図 榛5号墳周濠土層断面図	61
第61図 榛6号墳周濠平面図・土層断面図	61
第62図 第1号墳周濠平面図・断面図	62

第63図	第2号墳平面図・断面図	64
第64図	第2号墳周溝内遺物出土状況	64
第65図	第2号墳主体部平面図・断面図	65
第66図	第2号墳主体部出土遺物実測図Ⅰ	65
第67図	第2号墳主体部出土遺物実測図Ⅱ	66
第68図	第2号墳周溝出土遺物実測図	67
第69図	S D 1 平面図・土層断面図	71
第70図	S D 1 出土遺物実測図Ⅰ	71
第71図	S D 1 出土遺物実測図Ⅱ	72
第72図	S D 2 平面図・土層断面図	74
第73図	S D 2 出土遺物実測図	74
第74図	S D 3 平面図・土層断面図	75
第75図	S D 3 出土遺物実測図	75
第76図	S D 4 平面図・土層断面図	76
第77図	S D 4 出土遺物実測図	77
第78図	S D 5 平面図・土層断面図	78
第79図	S D 5 出土遺物実測図	79
第80図	S C 4 平面図	80
第81図	S C 5 平面図・断面図	81
第82図	S C 5 川土遺物実測図	81
第83図	S C 8 平面図・断面図	82
第84図	S C 8 出土遺物実測図Ⅰ	82
第85図	S C 8 出土遺物実測図Ⅱ	83
第86図	S C 15 平面図・土層断面図	84
第87図	S C 15 出土遺物実測図	84
第88図	S C 16 平面図・断面図	85
第89図	S C 16 出土遺物実測図Ⅰ	86
第90図	S C 16 出土遺物実測図Ⅱ	87
第91図	S C 16 出土遺物実測図Ⅲ	88
第92図	S C 16 出土遺物実測図Ⅳ	89
第93図	S C 16 出土遺物実測図Ⅴ	90
第94図	S C 19 平面図・断面図	92
第95図	S C 19 出土遺物実測図	92
第96図	山崎下ノ原第1遺跡出土遺物実測図Ⅰ	93
第97図	山崎下ノ原第1遺跡出土遺物実測図Ⅱ	94

目 次

【山崎上ノ原第2遺跡】

第1表	A区出土遺物観察表(1)	20
第2表	A区出土遺物観察表(2)	21
第3表	A区出土遺物観察表(3)	22
第4表	A区出土遺物観察表(4)	23
第5表	A区出土遺物観察表(5)	24
第6表	C区土壤墓出土錢貨計測表	28
第7表	C区土坑計測表	29
第8表	山崎上ノ原第2遺跡出土装飾具計測表	31
第9表	C区出土遺物観察表	31
第10表	D区土坑計測表	34
第11表	山崎上ノ原第2遺跡出土金属製品計測表	35
第12表	D区出土遺物観察表(1)	42
第13表	D区出土遺物観察表(2)	43
第14表	山崎上ノ原第2遺跡出土鍵計測表	47
第15表	E区出土遺物観察表(1)	50
第16表	E区出土遺物観察表(2)	51

【山崎下ノ原第1遺跡】

第17表 第2号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅰ	68
第18表 第2号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅱ	69
第19表 馬埋葬土坑計測表	80
第20表 SC16出土遺物計測表	91
第21表 山崎下ノ原第1遺跡土坑計測表	94
第22表 山崎下ノ原第1遺跡出土鐵器計測表	95
第23表 山崎下ノ原第1遺跡出土土器観察表(1)	99
第24表 山崎下ノ原第1遺跡出土土器観察表(2)	100
第25表 山崎下ノ原第1遺跡出土土器観察表(3)	101
報告書抄録	111

図版目次

図絵1 山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡調査区全図(南から)	
図絵2 山崎下ノ原第1遺跡SC16出土馬具-1・2	
図絵3 山崎下ノ原第1遺跡SC16出土馬具-3	
図絵3 山崎下ノ原第1遺跡第2号墳主体部出土大刀・鏡・ガラス小玉・鐵鎌	
図版1 A区完掘状況/C区完掘状況/C区S A1・2及びSC1完掘状況/C区S C1遺物出土状況/D区完掘状況/D 区SA4(手前:SD2)/D区SD 2検出状況/SD2検出状況	102
図版2 D区埋立出土状況/D区SA5遺物出土状況/D区SA9完掘状況及びSD 1遺物出土状況/E区SA2遺物出土状況/E区SD1遺物出土状況/E区 SC1遺物出土状況/F区完掘状況/ F区SD1遺物出土状況	103
図版3 F区SC5馬具出土状況/F区SC8 馬具出土状況/F区SC8馬具出土状況/G区完掘状況/G区櫛5号墳周溝 完掘状況/G区SD2完掘状況/G区 SD2遺物出土状況/G区SD3遺物 出土状況	104
図版4 G区SD4遺物出土状況/G区SC15 馬具出土状況/G区SC16馬具出土状況/G区SC16馬具出土状況/H区櫛 6号墳周溝完掘状況/H区完掘状況/ H区第2号墳完掘状況/H区第2号墳 主体部遺物出土状況	105
図版5 H区第2号墳主体部遺物出土状況/H 区第2号墳周溝内遺物出土状況/H区 SD1遺物出土状況/H区SD1遺物 出土状況/A区SA1出土土器/A区 SA2出土土器/A区SA5出土土器 /A区出土土器(1)	106
図版6 A区出土土器(2)・(3)・(4)/C 区SA1~3出土土器/D区SD2出土 土器/D区SA4出土土器/D区出土 土器/E区出土土器	107
図版7 E区出土墨書き器/E区出土土筆/F 区SD1出土土器/G区SD2出土土 器/G区SD3・4出土土器/H区S D5出土土器/H区第2号墳周溝内出 土土器/A区出土装飾具	108
図版8 A区出土鐵洋/A区出土粒状滓・鍛造 鋸片/A・D・E区出土鐵鎌・刀子/ F区SD1出土馬具・鐵鎌・刀子/F 区SC5出土馬具/F区SC8出土馬 具/G区SD2~4出土鐵器/G・H 区出土馬具	109
図版9 H区第2号墳主体部出土鏡/H区第2 号墳主体部出土鏡付着有機質物質(顯 微鏡写真)/G区SC16出土馬具付着 有機質物質(顯微鏡写真)	110

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業が実施される県道宮崎島之内は、海岸線に沿って幾重にも連なる砂丘列の上にある。周辺には宮崎市教育委員会が実施した石神遺跡など多くの遺跡が所在することを知られている。

本事業に伴い、平成4年度から宮崎土木事務所と文化課で協議を開始し、まず平成5年に発掘調査を実施している。その後も本事業と遺跡の取扱いについての協議が継続され、今回報告する地点については、平成9年度に宮崎土木事務所から照会があり、文化課が平成10年2月に現地踏査、翌年12月には確認調査を実施している。用地買収が平成12年度内に終了する予定となり、本発掘調査について具体的な協議を行い、平成13年8月から調査を開始するに至っている。

第2節 調査の組織

山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡の発掘調査は下記の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

発掘調査（平成13・14年度）

所長	矢野 隆
副所長兼総務課長	菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第三係長	脅付 和樹
同 主査（調査担当）	南正覚雅士
同 調査員（調査担当）	丹 俊詞

整理（平成14年度）

所長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大薗 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	野邊 文博
調査第二課調査第三係長	脅付 和樹
同 主査（調査担当）	南正覚雅士
同 調査員（調査担当）	丹 俊詞

整理・報告書作成（平成15年度）

所長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大薗 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 忠史
調査第二課調査第三係長	脅付 和樹
同 主査（調査担当）	南正覚雅士
同 調査員（調査担当）	丹 俊詞

第3節 遺跡の位置と環境(第1図)

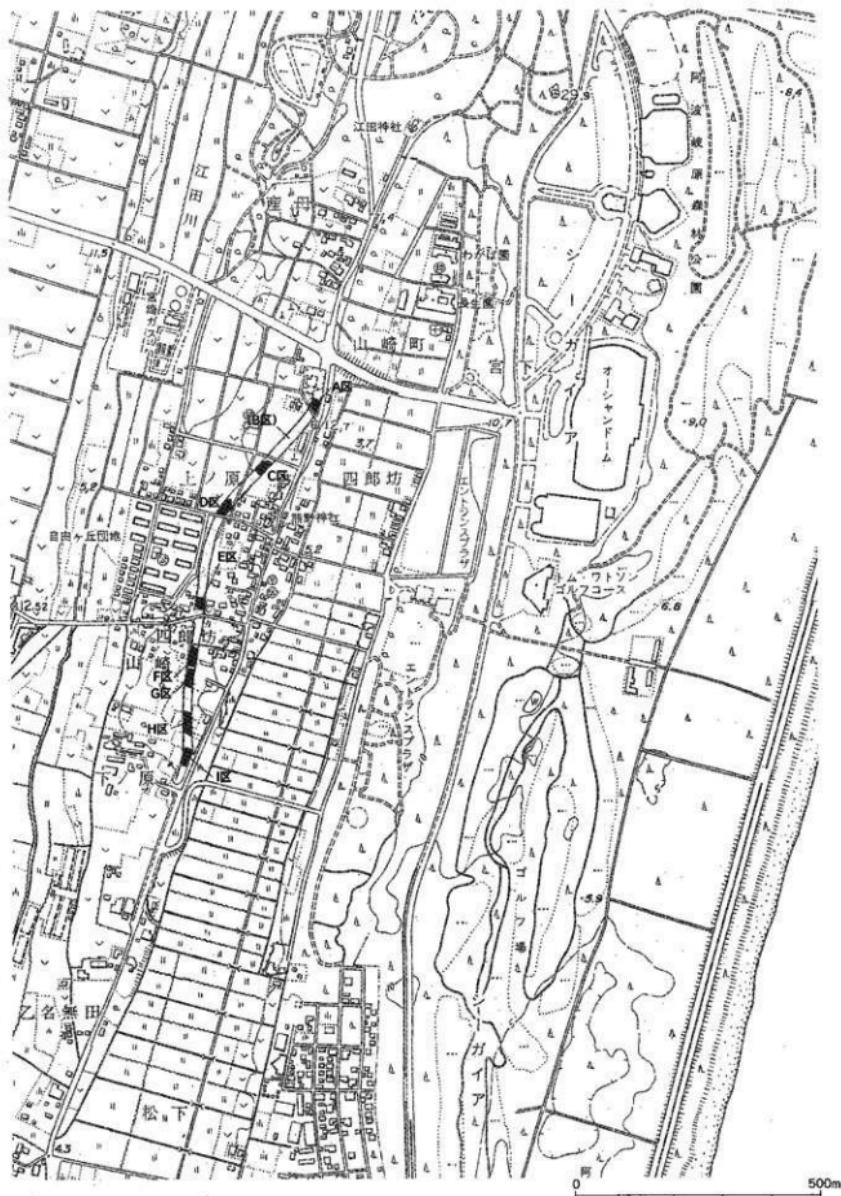
山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡(第1図-1)は宮崎(沖積)平野の北西部、宮崎市山崎町字上ノ原から字下ノ原にかけて所在する。東流して日向灘に注ぐ大淀川左岸から北へ約6km、日向灘より西へ約1.4km、標高約8~12mの砂丘上に位置する。この砂丘は第2砂丘と呼称され海岸線に沿って形成された4列の砂丘列(海岸線から内陸へ第1~第4砂丘)の一つである。当該地は住宅地及び耕作地として利用されていた。

本遺跡の周辺遺跡について時代別に概略を述べる。弥生時代の遺跡としては橈遺跡(第1図-2)や石神遺跡(第1図-3)がある。橈遺跡では甕棺墓、積石墓、さらに県内では最古と言われる弥生土器が確認されている。石神遺跡では、壺棺墓、甕棺墓、竪穴住居跡が検出されている。古墳時代の遺跡としては、橈1号墳(第1図-4)、猿野遺跡(第1図-5)、浄土江遺跡(第1図-6)、さらに国指定の史跡蓮ヶ池横穴墓群(第1図-7)がある。橈1号墳では国内最大級の「木椁」の発見が報告されている(2002)。猿野遺跡では竪穴住居跡や布留式土器に並行する土器が確認されている。浄土江遺跡では竪穴住居跡、溝状造構が検出されている。また、本遺跡の隣接地には2基の円墳が存在し、北から「橈5号墳」(第1図-8)・「橈6号墳」(第1図-9)と呼称されている。遺跡の北側には『喜喜式』に記載されている式内社である江田神社(第1図-10)が鎮座している他、遺跡周辺は日向十六駅の一つ江田(石田)駅に推定される地でもある。

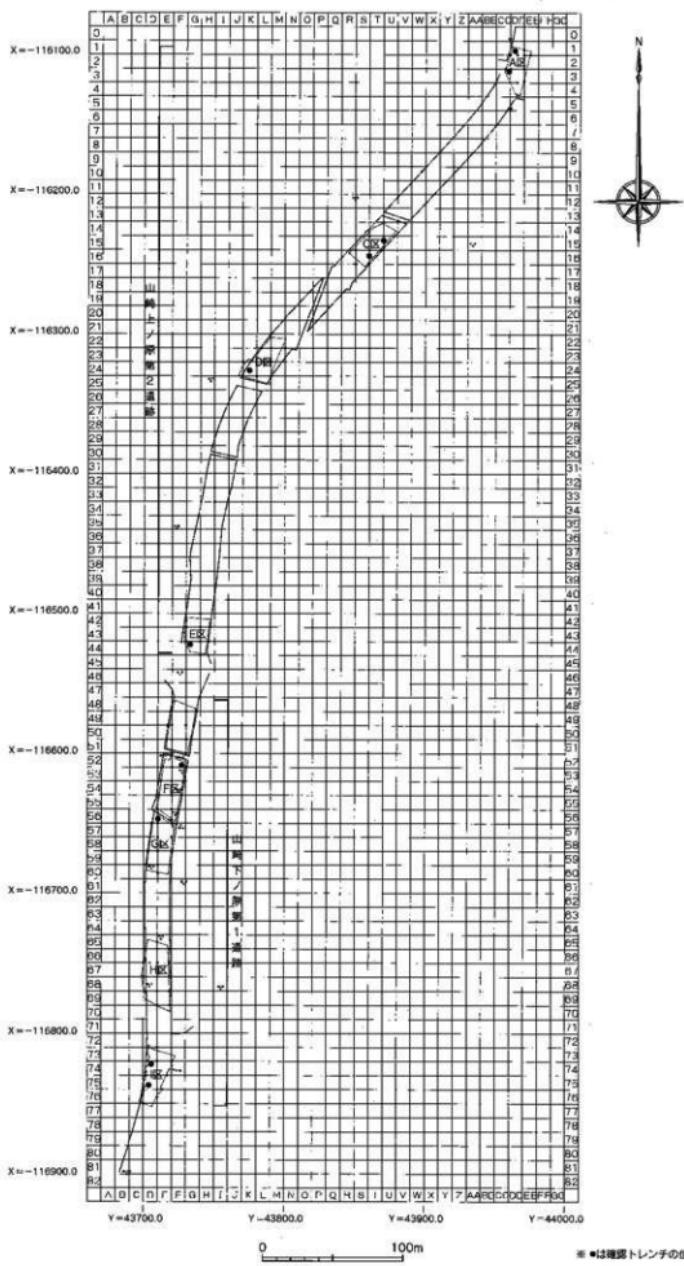


- 1 山崎上ノ原第2遺跡(北)・山崎下ノ原第1遺跡(南) 2 橈遺跡 3 石神遺跡 4 橈1号墳
5 猿野遺跡 6 浄土江遺跡 7 蓮ヶ池横穴墓群 8 橈5号墳 9 橈6号墳 10 江田神社

第1図 遺跡位置図 (S=1/100,000)



第2図 山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡周辺地形図 (S=1/10,000)



第3図 山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡グリッド配置図 (S=1/3,500)

*は確認トレンドの位置を示す

第4節 調査の経過

山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡の調査対象面積は13,000m²である。

主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴って平成13年8月1日より調査を開始した。まず調査範囲が道路予定路線内にあり、全長約900m・幅約20m前後と細長い形を呈するため、調査の便宜上、9区に分割し北側からA～I区とした(但し、B区は木買取地のため今回の調査から除く)。F区から調査を開始するが、調査区の遺構及び遺物包含層の詳細な確認を行うため試掘を行った。その結果、遺構・遺物が確認できなかった5,300m²を調査対象面積から除外し、残り7,700m²について調査を実施することとした。調査では、バックホーによって第Ⅰ・Ⅱ層を剥ぎとったのち、第Ⅲ層上面から人力で掘り下げを行った。なお、調査期間は平成13年8月1日から平成14年2月28日(第1次調査)、平成14年4月15日から平成14年5月24日(第2次調査)と2か年にわたっている。

各調査区の位置関係を把握し測量実測の基準とするため、国土地標に合わせた10mグリッドを設定した。以下、作業日誌によって概要を記す。

H13 8／1 1次調査開始。

8／22 F区：土師器・須恵器が出土し始める。南端で古墳の周溝を確認。

8／28 F区の調査を中断して、調査区全域の詳細な確認調査を行う。

9／19 F区：調査再開。周溝及び土坑の掘り下げ。土塙墓(1基)・馬具を伴った馬埋葬土坑(3基)を確認。

11／6 D区：堅穴住居跡(6軒)を検出。1軒の住居の床面から十畳床(仮称)を施した土塙墓(1基)を検出。

11／20 D区：さらに堅穴住居跡(3軒)、土塙墓(1基)を確認。

12／5 C区：堅穴住居跡(3軒)、土塙墓(4基)、溝状遺構(1条)を確認。土塙墓からはいずれも洪武通宝が出土。中世の土塙墓と思われる。

12／14 A区：堅穴住居跡(4軒)を確認。住居内より多量の土師器・須恵器が出土。

E区：堅穴住居跡(3軒)、土塙墓(1基)、溝状遺構(2条)を確認。

H14 1／5 H区：土塙墓(2基)、馬埋葬土坑(1基)等を検出。櫛6号墳の周濠の一部の掘り下げを行う。

1／7 I区：調査区中央南側でピット15基を確認、出土遺物はない。

2／19 H区：調査区に東西方向のトレンチを2本いれる。南側に設定したトレンチの中央から大刀(1振)・鏡(1枚)・ガラス小玉(150数個)が出土する。

2／21 H区：北側で滅失古墳の周溝が確認された。大刀等が出土した土塙墓は滅失古墳の主体部であることが判明した。

2／28 1次調査終了。

4／15 2次調査開始。

4／24 G区：周溝(F区で確認された周溝の続きである)、土塙墓(4基)、馬埋葬土坑(1基)を確認する。

5／16 G区：櫛5号墳の周濠の一部の掘り下げを行う。

5／17 G区：周溝縁辺馬埋葬土坑を確認。鉄地金銅張製馬具を含む馬具一式が出土。

5／24 2次調査終了。

第5節 基本層序 (第4回)

本遺跡は、調査前まで住宅地もしくは耕作地として利用されていたため、調査区内の殆どの部分が平坦に造成された上に盛土を施され、上層においては本来の層序をとどめていない箇所もある。しかし、下層の堆積状況は良く、基本層序は大きく第Ⅰ層～V層の5層とした。ここでは基本層序と本調査に先立って行った確認調査の結果も併せて記載する。

基本層序

第Ⅰ層	褐色～黒褐色層。平均20cm程度の厚さ(最大で80cm近く)で堆積する。砂質が低く、ブロック状の褐色～黒褐色土を含む。擾乱のためか遺物(土器片)を多く含む。造成土・耕作土と考えられる。
第Ⅱ層	黒褐色砂質土層。厚さ20～60cm程度の厚さで堆積する。他の砂質土に比べて砂粒が細かく、土の混入割合が高い。色調はチョコレート色に似ている。
第Ⅲ層	褐色砂質土層。厚さ20～60cm程度の厚さで堆積する。第Ⅱ層と似ているが、色調が明るく、砂粒が少し粗くなっている。
第Ⅳ層	青灰砂層。かなり厚く堆積している。砂粒は粗く、砂のみで構成されている層である。
第Ⅴ層	暗青灰砂層(基盤層)

《確認調査の結果》

A区

- ①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。宅地跡。
- ②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。
- ③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。
- ④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。

D区

- ①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。
- ②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。
- ③青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。

F区

- ①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。
- ②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。
- ③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。
- ④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。

C区

① 20cm	① 黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。
② 40cm	② 黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。
③ 20cm	③ 褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。
④ 60cm	④ 青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。

E区

- ①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。宅地跡。
- ②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。
- ③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。
- ④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。

① 20cm
② 10cm
③ 40cm
④ 60cm

G・I区

- ①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。
- ②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。
- ③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。
- ④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。

① 80cm
② 35cm
③ 30cm
④ 30cm

* A区～I区の試掘地点については、第3岡山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡グリッド配置図を参照。

第4回 山崎上ノ原第2遺跡及び山崎下ノ原第1遺跡基本土層柱状図・確認トレンチ地層堆積状況図

第Ⅱ章 山崎上ノ原第2遺跡の調査

第1節 A区の調査 (第5図)

1 調査の概要

調査面積は260m²である。標高は約12.0mで本調査区の中で一番高く、地形は平坦である。

古墳時代の竪穴住居跡4軒、時期不明の溝状遺構2条、土坑3基、ピット8基が確認された。検出面は第III層の褐色砂質土層である。竪穴住居跡は北端部で1軒、調査区中央北側では3軒が切り合った状態で確認されている。遺物は殆どが住居跡から出土し、土師器、須恵器、勾玉の滑石製模造品(1点)、管玉(1点)、ガラス小玉(3点)、滑石製小玉(5点)、金属製品(4点)、土錐(1点)等が出土している。さらに縄の羽口やまとまった量の鉄滓が出土している。

2 遺構と遺物

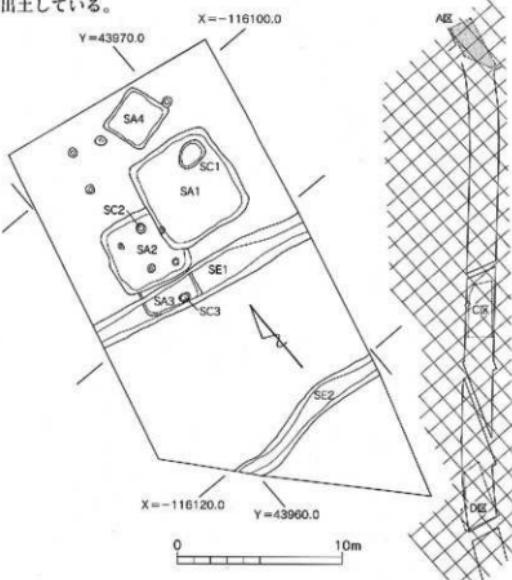
(1) 竪穴住居跡(SA)

SA1 (第6図)

調査区北側のやや東側に位置し、SA2を切っている。長軸約6.0m、短軸約5.8mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約50~60cm、床面積は約29.4m²を測る。長軸方向はN-28°-Eを指す。なお、住居跡に伴う主柱穴は検出されていない。また、北東隅には土坑(SC1)が掘り込まれており、規模は長軸約180cm・短軸約130cm・深さ約37cmの楕円形プランで、出土遺物はない。住居跡内からは土師器、須恵器など約500点余りが検出面から床面の間で出土し、90%が土師器、5%が

須恵器である。さらに、検出面や埋土中から鉄滓が検出されたため、住居跡内の覆土を篠にかけたところ鉄滓に混じって、粒状滓や鍛造片も確認された。さらに勾玉の滑石製模造品(1点)、管玉(1点)、ガラス小玉(3点)、滑石製小玉(5点)、金属製品(4点)、縄の羽口も出土している。なお、勾玉の滑石製模造品・管玉・ガラス小玉・滑石製小玉については第8表「山崎上ノ原第2遺跡出土装飾貝具計測表」を、金属製品については第11表「山崎上ノ原第2遺跡出土金属製品計測表」を参照いただきたい。

【出土遺物】第12~16図 SA1出土遺物実測図(1)~(5) 第21図 SA1出土遺物実測図及び包含層遺物実測図 1~68(A区出土遺物観察表)



第5図 A区 遺構分布図(S=1/300)

SA2 (第8図)

SA3の北側を3分の1程を切り、SA1により住居跡の北東部を切られている。長軸約4.9m、短軸約4.5mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約60cm、床面積約18.4m²を測る。長軸方向は

N-32°-Eを指す。住居跡内で土坑(SC2)、ピット3基を検出したが中から遺物は出土していない。

なお、主柱穴は確認できなかった。遺物は殆どが上師器で検出面から床面の間で約230点が出土している。

【出土遺物】第17図SA2出土遺物実測図 76~92(A区出土遺物観察表)

SA3(第8図)

SA2により住居跡の北側部分を切られ、さらに南側もSE2によって切られている。長軸約3.5m、短軸約3.0mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約60cm、床面積は約10.2m²である。長軸方向はN-32°-Eを指す。SA2とSA3の床面はレベル差がありSA3が10cm程低い。南東隅の壁際で土坑(SC3)、北側でピット2基を検出したが、中から遺物は出土していない。なお主柱穴は確認されていない。遺物はほぼ床面で土師器、須恵器等が約60点出土している。

【出土遺物】第18図SA3出土遺物実測図 93~99(A区出土遺物観察表)

SA4(第9図)

SA1の北側に位置する。規模は長軸約3.0m、短軸約2.8m、床面積約7.6m²を測る。平面プランは隅丸方形を呈し、検出面からの深さはSA1~3に比べて浅く約20cmを測る。長軸方向はN-6°-Wを指す。主柱穴は確認されていない。遺物は上師器、須恵器等が約50点が出土し、検出面から床面の間で確認されている。

【出土遺物】第19図SA4出土遺物実測図 100~104(A区出土遺物観察表) 105(第14表「山崎上ノ原第2遺跡出土土錐計測表」)

(2)溝状遺構(SE)

SE1(第10・11図)

長さ約14.4m、溝幅約1.6~2.2m、検出面からの深さは約20~40cmを測る。溝の断面形態はU字状を呈する。調査区外に延びるため走行については不明である。

【出土遺物】第20図SE1・2出土遺物実測図 106・7(A区出土遺物観察表)

SE2(第10・11図)

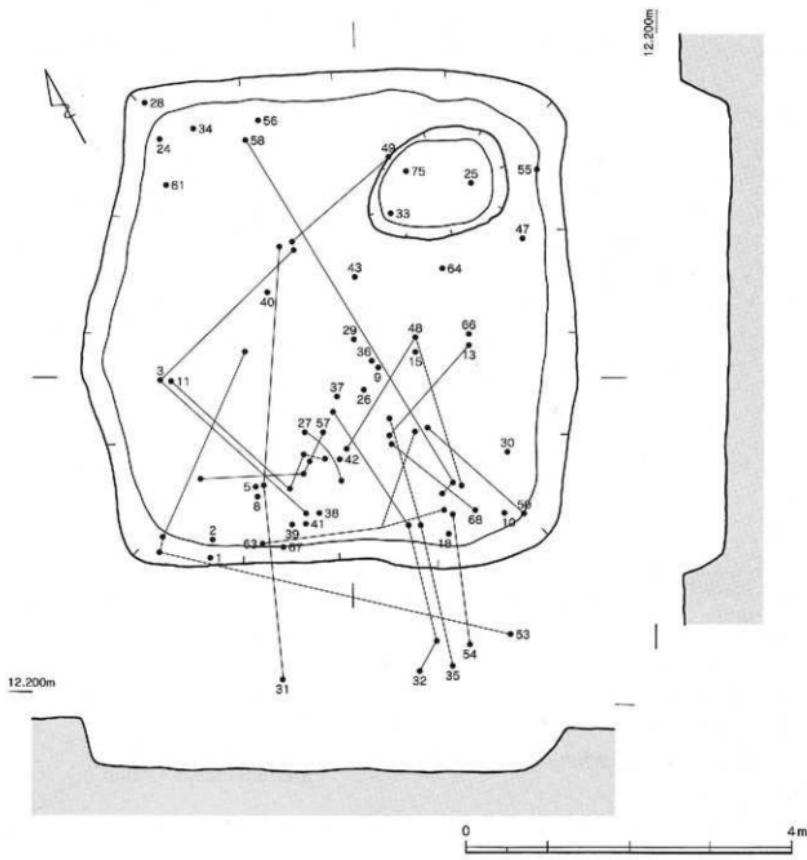
長さ約11m、溝幅約1.7m、検出面からの深さは約45~60cmを測る。溝の断面形態はU字状を呈している。調査区外に延びるため走行については不明である。なお、SE1・2とともに古墳時代の遺物が出土しているが、これらは流れ込みによるものと思われ、SE1・2の構築時期については不明である。

【出土遺物】第20図SE1・2出土遺物実測図 108・9(A区出土遺物観察表)

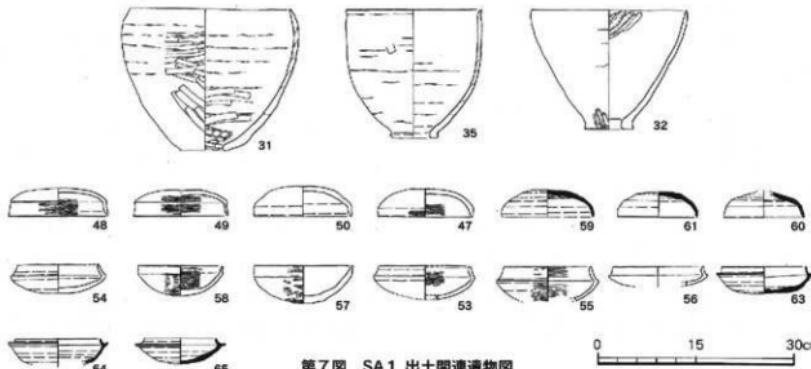
(3)包含層(第10図)

包含層出土遺物は、須恵器の壺身・蓋、高壺、土師器の壺身・蓋、ミニチュア土器等の祭祀儀礼に関連した遺物が出土している。詳細は「第21図SA1出土遺物実測図及び包含層出土遺物実測図」及び「A区出土遺物観察表」の110~132を参照いただきたい。

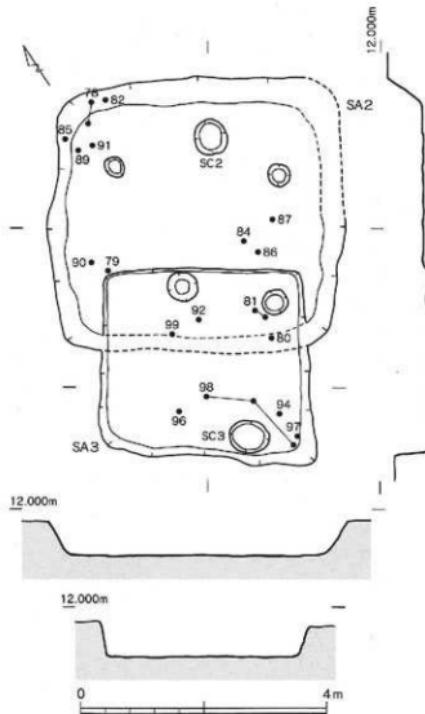
なお、調査区南側の西壁付近では完形品に近い土器が数点出土している。これらはおそらく調査区外に広がる竪穴住居跡(遺構の一部を調査区土層断面にて確認)に伴う遺物と思われたため、第22図に参考資料として掲載した。



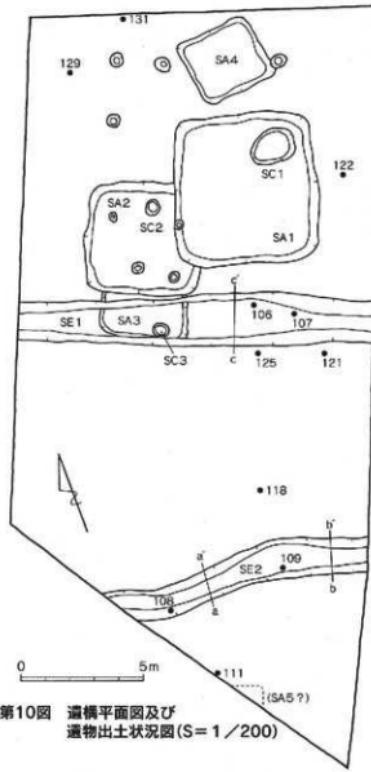
第6図 SA 1平面・遺物出土状況図(S=1/60)



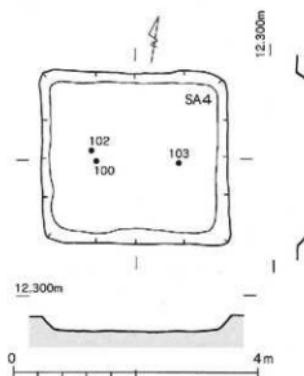
第7図 SA 1 出土箇所遺物図



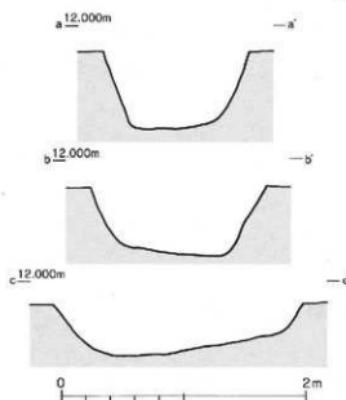
第8図 SA2・3平面図($S = 1/80$)



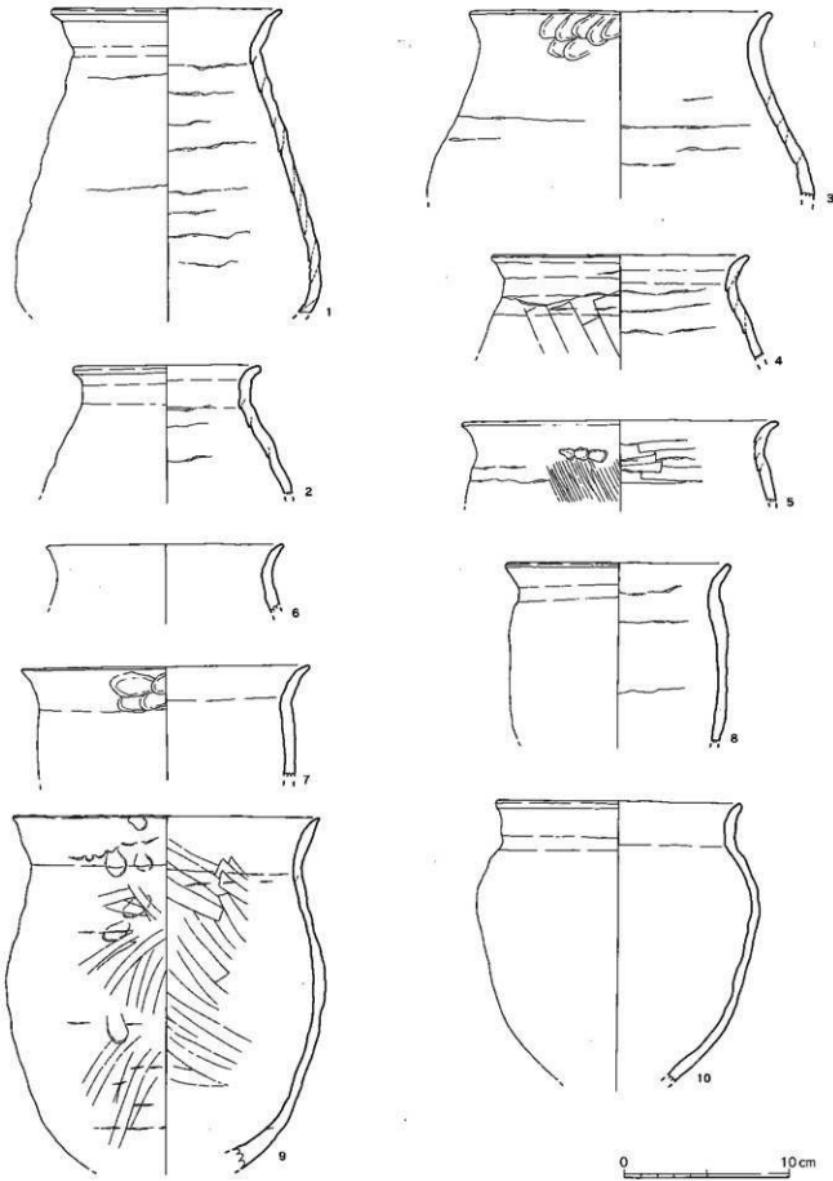
第10図 遺構平面図及び
遺物出土状況図($S = 1/200$)



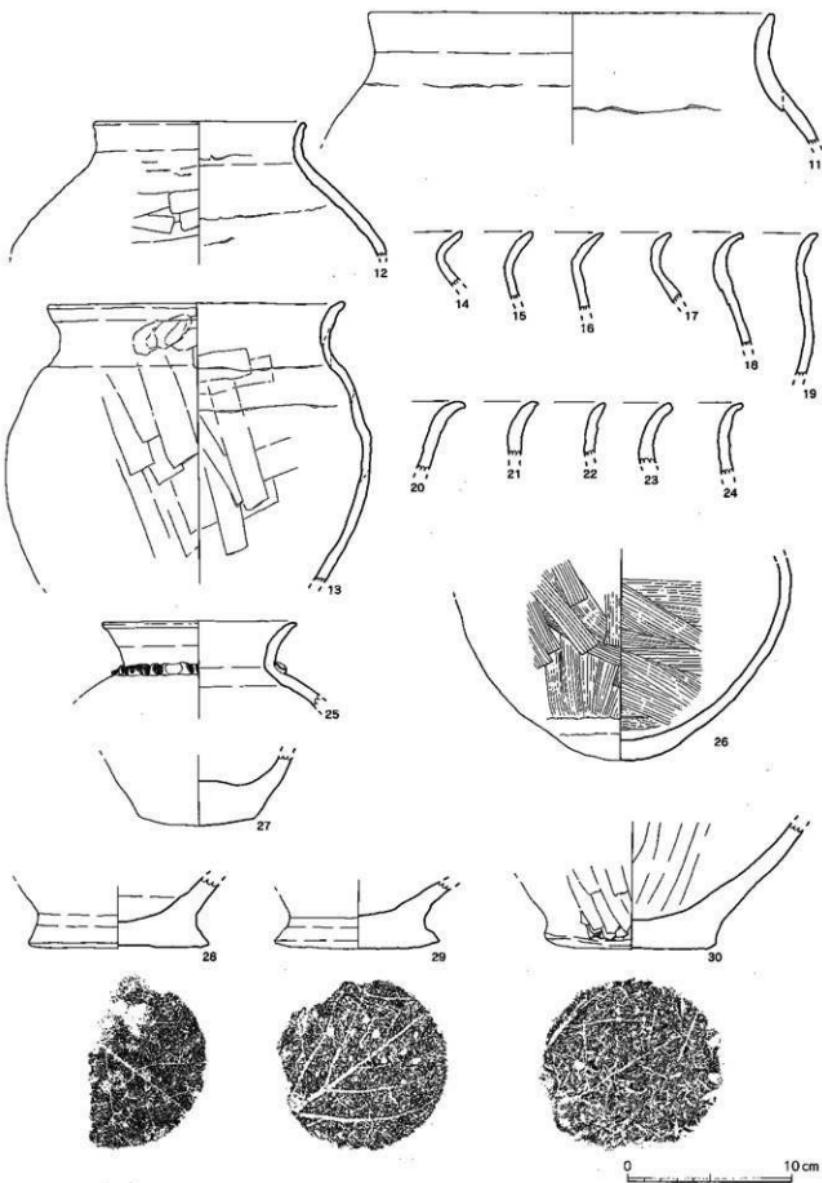
第9図 SA4平面図($S = 1/80$)



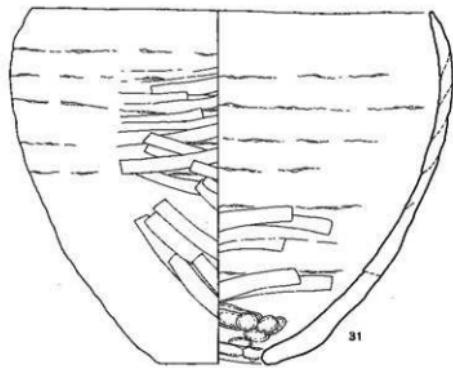
第11図 溝状遺構断面図($S = 1/40$)



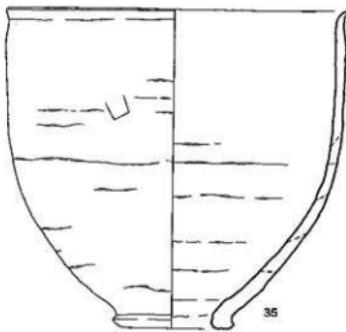
第12図 SA1出土遺物実測図(1)(S=1/3)



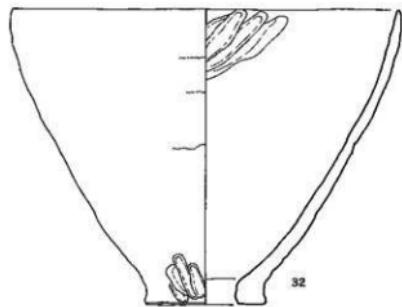
第13図 SA1出土遺物実測図(2) (S=1/3)



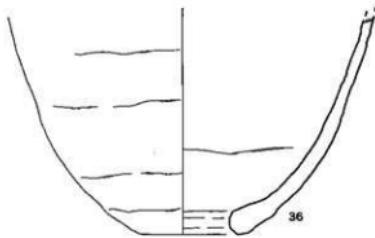
31



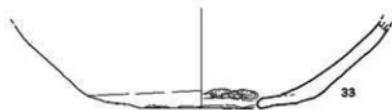
35



32



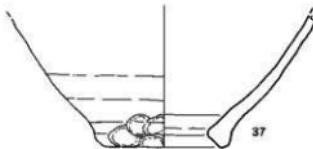
36



33



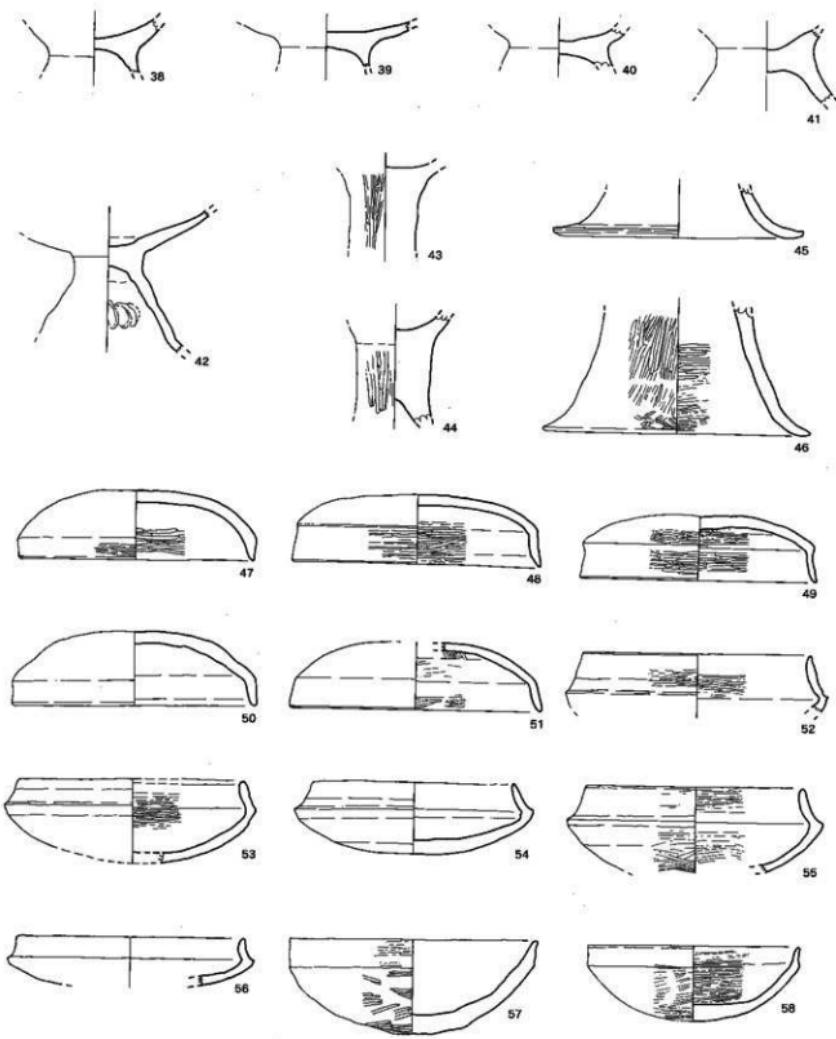
34



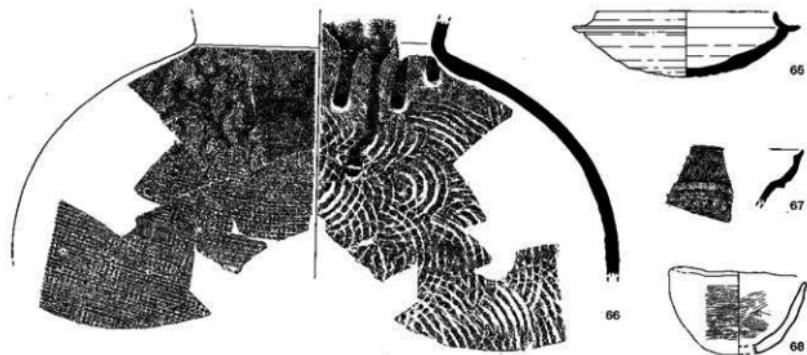
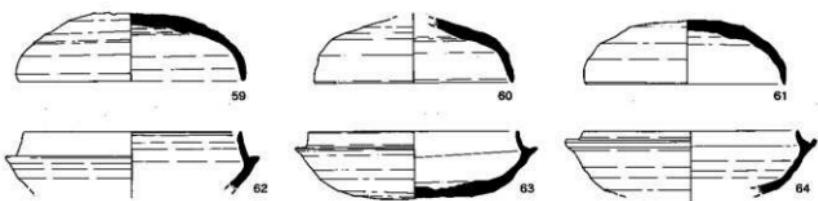
37

A scale bar indicating a length of 10 cm.

第14図 SA1出土遺物実測図(3)(S=1/3)

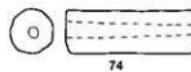
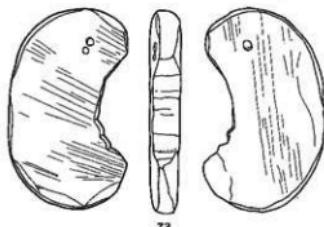


第15図 SA1出土遺物実測図(4) (S=1/3)



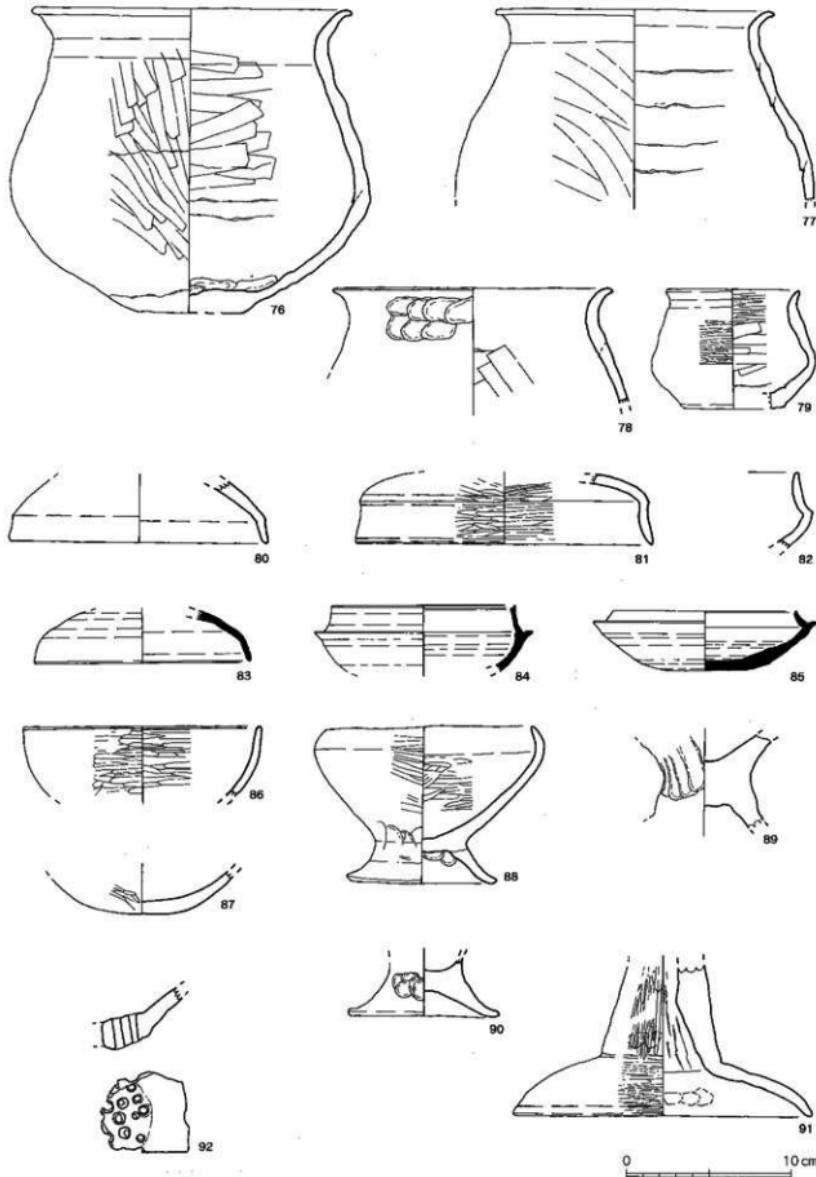
0 10 cm

0 10 cm

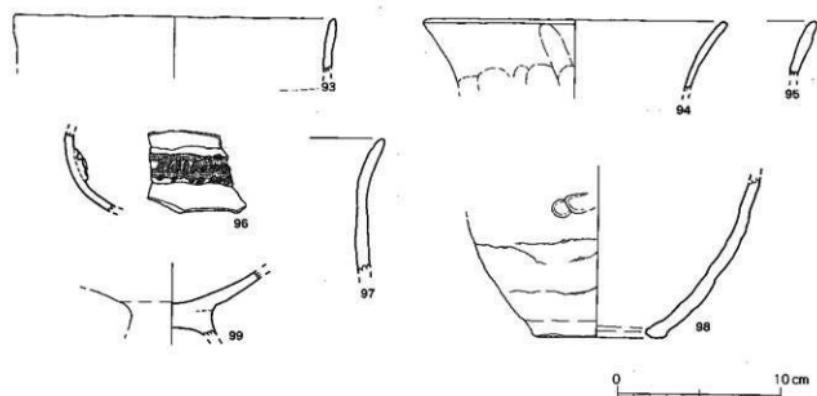


0 5 cm

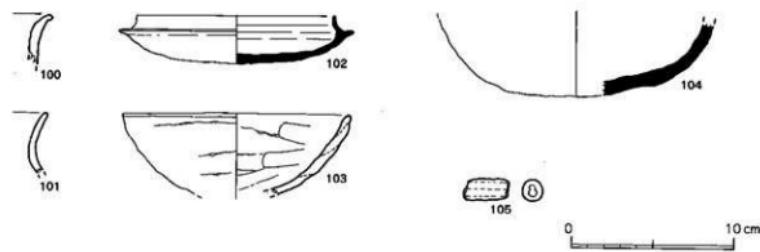
第16図 SA1出土遺物実測図(5)(59~68・75 S=1/3 69~72 S=1/2 73-74 S=1/1)



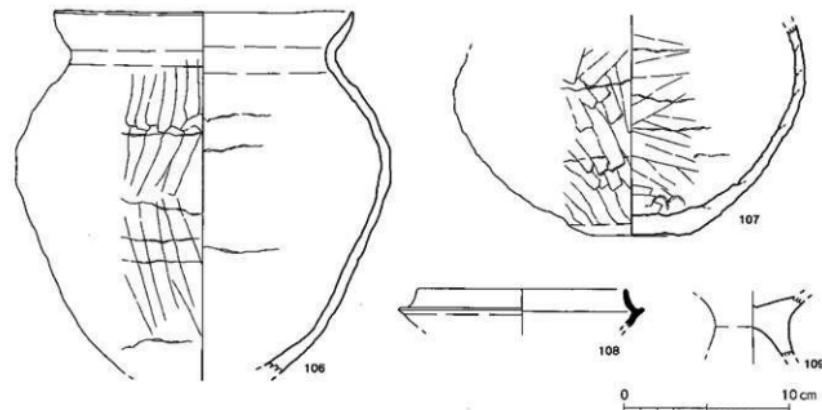
第17図 SA2出土遺物実測図(S=1/3)



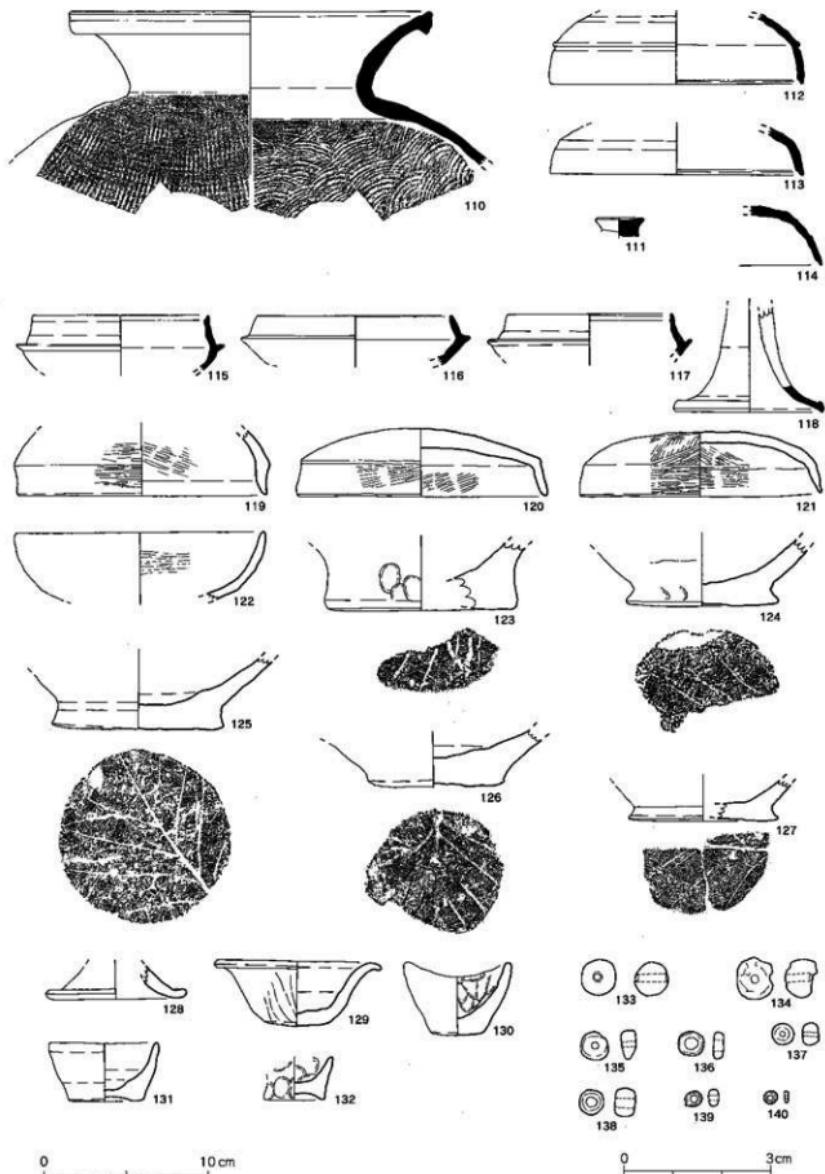
第18図 SA3出土遺物実測図(S=1/3)



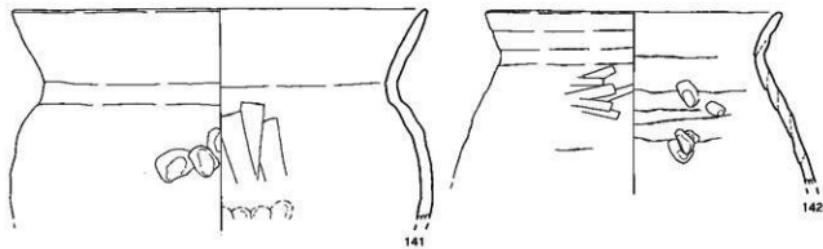
第19図 SA4出土遺物実測図(S=1/3)



第20図 SE 1・2出土遺物実測図(S=1/3)

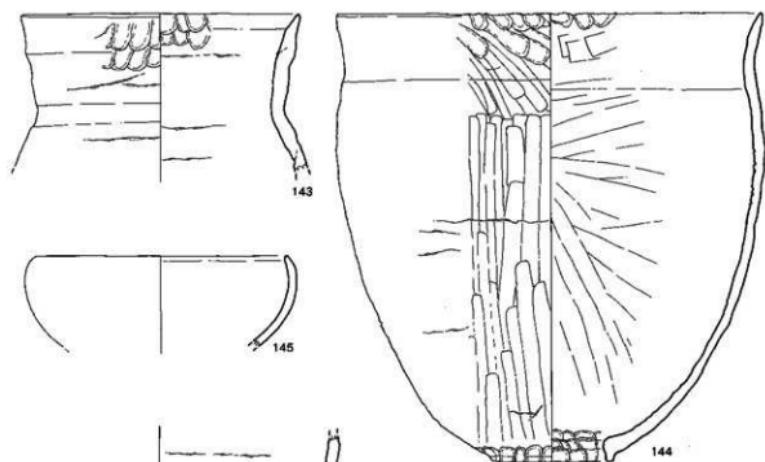


第21図 SA 1出土遺物実測図及び包含層出土遺物実測図(110~132 S=1/3 133~140 S=1/1)



141

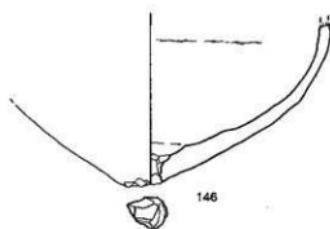
142



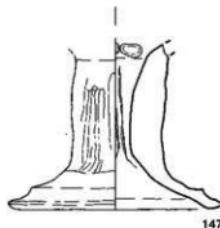
143

144

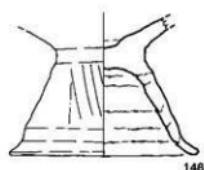
145



146



147



148

0 10 cm

第22図 SA5(?)出土遺物実測図(S=1/3)

第1表 A区出土遺物觀察表(1)

番号	出土地 遺物	種類	基盤	部位	測定(mm) 口径× 高さ	測定等		粘 土 (還原材・還元物)	焼成	色調		備 考
						内 面	外 面			内 面	外 面	
1	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		15.8	上位:ナデの痕跡 下位:焼成不規	上位:暗茶褐色-灰褐色-灰白色 下位:工芸による ナデの痕跡	1~5mmの暗褐色-灰褐色-灰白色	良好	灰 に赤い黄褐色	灰 に赤い黄褐色	内面:黒化気味
2	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		11.3	ナデ 焼成方向の工芸痕	調度がいくつも凹凸がある ナデの痕跡	1~4mmの薄-無色透光性灰	良好	灰	灰	
3	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		18.3	上位:焼成方向のナデ 下位:焼成方向の工芸痕	ナデの痕跡	1.5~7.5mmの赤褐色-灰白色-灰白色	良好	灰	灰	外観: 黒化気味
4	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		15.6	上位:焼成方向のナデ 下位:ナデ	ナデの痕跡	2~5mmの暗灰色鉛	良好	灰	灰	
5	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		20.0	焼成方向のナデ	ナデの痕跡	1~10mmの黒褐色-灰褐色-黑色化	良好	灰	灰	
6	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		14.2	焼成方向のナデ 裏面にスス付着	焼成方向のナデ 裏面にスス付着	1~8mmの黒-灰-褐色鉛	良好	灰 に赤い橙	灰	
7	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		17.4	上位:焼成方向のナデ 下位:ナデ	ナデの痕跡	1.5~8mmの暗褐色-灰褐色	良好	灰	灰	
8	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		13.4	上位:工芸による焼 成方向のナデ 下位:ナデ+端部 黒化	ナデの痕跡 裏面にスス付着	1.5~5mmの赤褐色鉛	良好	灰 に赤い橙	灰 に赤い橙	外観: 黑化気味
9	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		18.8	T.真によるナデ	ナデの痕跡による凹凸 が観察	1~5mmの黒褐色-灰褐色-黑色化	良好	灰	灰	
10	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		14.8	上位:焼成方向のナデ 下位:焼成方向のナデ 下位:ナデ	ナデの痕跡	2mm以下の暗褐色鉛 3~5mmの暗褐色鉛	良好	灰	灰	に赤い橙 黒化
11	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		25.2	上位:焼成方向のナデ 下位:ナデ(全体に 黒い斑駁)黒化	ナデの痕跡	3mm以下の黒-灰-褐色鉛	良好	灰	灰	
12	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		12.6	ナデ	焼成方向のナデ	5mm以下の暗褐色鉛 3mm以下の無色鉛	良好	灰	灰	
13	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		17.4	ナデ	全体的にスス付着	2~5mmの暗褐色鉛	良好	灰	灰	に赤い褐色
14	SAI	土 灰	口縁～ 脚部			上位:焼成方向のナデ 下位:焼成方向のナデ	ナデの痕跡	2~3mmの暗褐色鉛	良好	灰	灰	
15	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		15.0	上位:焼成方向のナデ 下位:ナデ	ナデの痕跡	1~4mmの暗褐色-灰褐色-赤褐色	良好	灰 に赤い橙	灰 に赤い橙	
16	SAI	土 灰	口縁～ 脚部			ナデ	ナデの痕跡	2~6mmの暗褐色-灰褐色-赤褐色	良好	灰	灰	
17	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		13.5	ナデ	ナデ	3mm以下の暗褐色鉛	良好	灰 に赤い褐色	灰 に赤い褐色	
18	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		12.5	上位:焼成不規 下位:ナデ	ナデの痕跡	3mm以下の暗褐色-灰褐色-赤褐色	良好	灰	灰 に赤い褐色	内面: 黒化気味
19	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		33.8	上位:焼成方向のナデ 下位:焼成方向の工 芸によるナデ	ナデの痕跡	1~4mmの黒-灰色-黑色化 スス付着	良好	灰 に赤い橙	灰 に赤い橙	
20	SAI	土 灰	口縁			上位:焼成方向のナデ 下位:ナデ	焼成方向によるナデ ナデ	0.5~5mmの赤褐色-黑色化状鉛	良好	灰	灰	
21	SAI	土 灰	口縁			焼成方向の崩れ目	焼成方向の崩れ目	5mm以下の赤-黑色化鉛 黒化無	良好	灰 黒化	灰 黒化	
22	SAI	土 灰	口縁			ナデ	ナデ 裏面にスス付着	4mm以下の赤褐色-暗褐色鉛	良好	灰	灰	
23	SAI	土 灰	口縁～ 脚部			焼成方向のナデ	焼成方向のナデ	2~5mmの赤褐色-暗褐色鉛	良好	灰	灰	
24	SAI	土 灰	口縁			上位:焼成方向のナデ 下位:焼成方向のナデ	焼成方向のナデ	6mm以下の暗褐色鉛 黒化無	良好	灰 に赤い橙	灰 に赤い橙	
25	SAI	土 灰	口縁～ 脚部		11.6	ナデ(無い箇所)	上位:焼成方向の焼 成不規	2~5mmの褐色鉛	良好	灰 に赤い橙	灰 に赤い橙	
26	SAI	土 灰	脚部～ 底部			上位:焼成方向の焼 成不規	ナデ	5mm以下の黒-灰-褐色鉛 1mm以下の褐色鉛	良好	灰 に赤い橙	灰	
27	SAI	土 灰	脚部下 底部		8.8	ナデ	ナデ	2~5mmの赤褐色-暗褐色鉛 1~5mmの暗褐色鉛	良好	灰	灰	に赤い橙

第2表 A区出土遺物観察表(2)

番号	出土場 遺構	種類	部位	位置(cm)			調査等 内面	外面	地 土(透視材・生入物)	地成 内面	色調 外面	備 考	
				口径	高径	高さ							
28	SA1	土 壁	底部		10.5		ナテ -根付ナテ -根皿	ナテ	1mm~1.2mmの凹凸感・黒・赤灰・灰・灰 白・黒にぶい褐色	良好	にぶい黄緑 青	木の葉底	
29	SA1	土 壁	底部		10.5		壁・傾め方向のナテ -根皿	ナテ	3~6mmの凹凸感・赤褐色 鏡面な透視光沢	良好	にぶい青 青	木の葉底	
30	SA1	土 壁	底部		10.5		工具によるナテの 後、倍々ナテ(トーア)	ナテ	2~3mmの底白色 2~3mmの褐色 2~4mmの灰色	良好	にぶい青 青	にぶい青 木の葉底	
31	SA1	土 壁	口縁~底部	24.4	21.7		ナテ -凹凸根皿 -底	ナテ	6mm以下の凹凸感・赤褐色 3mm以下の白色	良好	青 青緑	青緑 青緑孔径:2.7cm	
32	SA1	土 壁	口縁~底部	23.6	9.4		ナテ -底付(裏走)	ナテ 底付:輪郭 ナテ	5mm以下の底・にぶい・青・黒・灰 白・黒にぶい褐色	良好	にぶい青		
33	SA1	土 壁	側面下~底部		7.1		上位:傾め方向のナテ 下位:工具によるナ テ	ナテ ナテ:工具によるナ テ	1~4mmのにぶい・黒褐色 2~3mmの灰色	良好	にぶい青	にぶい青 黒灰孔径:3.4cm	
34	SA1	土 壁	側面下~底部		6.6		ナテ:底の内面 のT真に上るナテ -底付	ナテ ナテ付着	1~5mmの赤褐色 -褐色	良好	青	にぶい青	
35	SA1	土 壁	口縁~底部	20.9	7.4	19.5	丁寧なナテ -底付	丁寧なナテ -底付:ナテ 一部 ナテ付着	4mm以下の赤褐・灰・灰白・灰色	良好	青 青緑	青灰孔径:2.4cm	
36	SA1	土 壁	側面下~底部				ナテ(黒褐色有り)	ナテ(黒褐色有り) ナテ:丁寧なナテで四 方を走らせる	1~4mmの赤褐・灰・灰白・灰色	良好	青 青	青灰孔径:1.8cm	
37	SA1	土 壁	側面中~底部		6.8		工具によるやわらか み方向のナテ	工具底 ナテ(トーア) 底付:ナテ	1~3mmの下透明・灰・黒・褐色	良好	にぶい青 青	にぶい青 透視孔径:5.0cm	
38	SA1	土 壁	所定部~側面				ナテ	ナテ	黒褐色~1.5mmの赤褐・黒・灰色 無色透明感	良好	青	青	
39	SA1	土 壁	所定部~側面				ミガキ(单位不明)	調査不明	0.5~4.5mmの赤褐・灰・黒・褐色 灰	良好	にぶい青	内外面:風化著しい	
40	SA1	土 壁	所定部~側面				調整不明	ナテ	黒褐色~1mmの赤褐・灰・黒・赤褐色 無色透明 2mm以上の褐色角状光沢	良好	にぶい青	内面:風化著しい	
41	SA1	土 壁	所定部~側面				ナテ -根皿	ナテ?	複雑な半透明無色 2mm以下の灰・褐色	良好	明赤青 明赤青	青 青	外表面:風化気味
42	SA1	土 壁	所定部~側面				上位:ミガキ 下位:ナテ -根皿	上位:ナテ -傾め方向のナ テ	1.5cm以下の黒色透明光沢・黒褐色 灰・白色半透明光沢	良好	青	青	
43	SA1	土 壁	側面				ミガキ	傾方向のナテ	複雑な透視光沢 5mm以下の赤褐色 2mm以下の灰・黒・褐色	良好	青	青	
44	SA1	土 壁	所定部~側面				ミガキ(单位不明)	ミガキ(单位不明)	無色	良好	青	青	内外面:風化著しい
45	SA1	土 壁	側面		14.9		ナテ -傾め方向に走る工具 のナテ	ミガキ(单位不明)	無色	良好	青	明赤青	外表面:風化気味
46	SA1	土 壁	所定部~側面		16.5		ミガキ	ミガキ	1mm以下の灰・にぶい・青・灰色	良好	明赤青 明赤青	明赤青 明赤青	
47	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	14.2	4.3		ミガキ	ミガキ	3.5mm以下の赤褐色	良好	青	青	内側面ともに赤色 透明感をもす 風化気味
48	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	15.0	4.3		ミガキ	ミガキ	1mm以下の赤褐色	良好	明赤青 明赤青	明赤青 明赤青	内側面ともに赤色 透明感をもす 外表面:風化気味
49	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	14.5	3.0		ミガキ(单位不明)	ミガキ -根皿	無色	良好	にぶい青	にぶい青	内側面ともに赤色 透明感をもす 内面:風化著しい
50	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	14.7	4.7		上位:調査不明 下位:傾め方向のナテ	傾め方向のナ テ -底付:ス付青	2~3mmの赤褐色	良好	青	青	風化著しい
51	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	15.4			ミガキ(单位不明)	ミガキ(单位不明) -根皿:ナテ	無色	良好	青	赤褐色	内外面:風化気味
52	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	14.0			傾め方向のミガキ	傾め方向のミガキ	3mm以下の灰・褐色を少量	良好	にぶい青	赤褐色	内外面ともに赤色 透明感をもす
53	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	13.7	5.2		ミガキ(单位不明)	ミガキ(单位不明)	黒褐色な赤褐色透視光沢・黒色光沢	良好	青	青	内側面ともに赤色 透明感をもす 外表面:風化著しい
54	SA1	土 壁	口縁~ 天井部	12.3	4.4		傾め方向のミガキ ミガキ(ミガキの単位 不明)	ミガキ(ミガキの単位 不明)	1mm以下の赤褐色 黒褐色な赤褐色透視光沢・黒色性状光沢	良好	青	青	内側面ともに赤色 透明感をもす

第3表 A区出土遺物観察表(3)

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	測量 (mm)	調査等	施土 (調和材・埴入物)	焼成	赤鉄 内面 外面		備考		
									内 面	外 面			
55	SA1	土	灰身	口縁～体部	13.2	上位：側方尚ヘラミ 下位：側・斜め方向 のミガキ	上位：側方尚ヘラミ 下位：側・斜め方向 のヘラミガキ	1mm以下の茶褐色	良好	焼			
56	SA1	土	灰身	口縁～体部	14.0		ナデ	ナデ	1mm以下の茶褐色 2mm～4mmの暗赤色	良好	明赤褐	明赤褐	
57	SA1	土	灰身	口縁～底部	15.3	5.8	上位：側方尚のナデ 下位：側・斜め方向	上位：側方尚のナデ 下位：ミガキ	1～3mmの暗赤褐	良好	浅黄褐	浅黄褐 内面：風化化し、 外側：風化化し、	
58	SA1	土	灰身	口縁～底部	13.0		側・斜め方向のミガキ	ミガキ(単位不明)	1～3mmの暗・白色	良好	明赤褐	明赤褐 外側：風化化味	
59	SA1	灰	灰身	口縁～火葬壺	13.8		ナデ	上位：ヘラ削り 下位：側・斜め方向のナデ	3mm以下の茶褐色	良好	灰	外側には自然塗	
60	SA1	灰	灰身	口縁～体部	12.0		側方尚のナデ	上位：側方尚のナデ 下位：側方尚	焼	良好	灰		
61	SA1	灰	灰身	口縁～火葬壺	12.2		圓板ナデ	上位：側方削り 下位：ナデ	1.5mmの無色透明光沢・灰白色	良好	灰	灰 灰白	
62	SA1	灰	灰身	口縁～体部	13.3		圓板ナデ	圓板ナデ	1mm以下の茶褐色	良好	灰褐	灰オリーブ	
63	SA1	灰	灰身	口縁～底部	12.8	4.2	ナデ	上位：ナデ 下位：ナデ、ヘラ削り	3mm以下の白色	良好	灰		
64	SA1	灰	灰身	口縁～体部	13.1		側方尚のナデ	側方尚のナデ	燒	良好	灰	外側に自然塗	
65	SA1	灰	灰身	口縁～底部	11.0	4.0	圓板ナデ	圓板ナデ・ヘラ削り	燒	良好	灰	灰白	
66	SA1	灰	灰	腰部～腰部		上位：側方尚のナデ 下位：側心円形のあ れ痕跡	側方尚のカスケード	2mm以下の灰白・淡褐色	良好	灰白	灰白	外側に自然塗	
67	SA1	灰	ハツツ	口縁			ナデ	側面削状(側に丁 度による連続削突 き)	燒	良好	灰オリーブ	オリーブ灰	
68	SA1	土	土上 火葬壺	口縁～底部	8.3	3.9	5.2	側・斜め・側方尚のミガ キ	側・斜め・側方尚のミガ キ	燒	良好	に赤い に青い	内面とともに赤色 側面とともに青色
76	SA2	土	雨	口縁～底部	21.0	16.8	6.6	上位：側方尚のナデ 下位：側心円形のあ れ痕跡	6mm以下の茶褐色 2mm以下の白色	良好	灰褐	灰褐	に赤い に青い
77	SA2	土	雨	口縁～脚部	16.6		側方尚のナデ	上位：側方尚のナデ 下位：側心円形のナ デ	1.5～6mmの茶褐色・灰白色・黒色光沢	良好	焼	焼	
78	SA2	L	雨	口縁～腰部	16.6		上位：側方尚のナデ 下位：側心円形のナ デ	上位：側方尚のナデ 下位：側心円形のナ デ	1.5～5mmの暗・灰白色	良好	に赤い に青い	に赤い に青い	
79	SA2	土	土上 火葬壺	口縁～底部	8.2	7.3	上位：ナデの他、側 方尚のミガキ	上位：側・斜め・側 方尚のミガキ 下位：ナデ ミガキ 痕跡	4mm以下の茶褐色・茶色光沢	良好	に赤い に青い	に赤い に青い	
80	SA2	土	灰蓋	口縁～体部	16.8		ミガキ(単位不明)	ミガキ(単位不明) スス付	燒	良好	焼	焼 内面：風化化し、	
81	SA2	土	身蓋	口縁～体部	17.3		上位：やや斜め方尚 下位：側方尚のミガ キ	上位：側方尚のミガ キ 下位：やや斜め方尚 のミガキ	燒	良好	明赤褐	明赤褐 外面：風化化味	
82	SA2	土	灰身	口縁～体部			ヘラミガキ	ヘラミガキ	燒	良好	明赤褐	明赤褐	
83	SA2	灰	灰身	口縁～体部	13.2		圓板ナデ	圓板ナデ	1～2mmの白・灰褐色	良好	灰		
84	SA2	灰	灰身	口縁～体部			圓板ナデ	上位：圓板ナデ 下位：ヘラ削り	燒	良好	灰	外側に自然塗	
85	SA2	灰	灰身	口縁～底部	11.3		圓板ナデ	圓板ナデ	1～4mmの白色	良好	灰		
86	SA2	土	堆	口縁～体部	14.5		ミガキ	ミガキ	燒	良好	燒	燒	
87	SA2	土	灰身	底部			ミガキ(単位不明)	ミガキ(単位不明) スス付	1～3mmの無色薄青色(淡緑) 1mm以下の透明灰白色	良好	焼	焼	
88	SA2	L	高身	宝瓶	12.6	8.5	9.9	上位：コナデ 中位：側・斜め 方向尚のミガキ	上位：側・斜・斜 方向尚のミガキ 下位：スス付	無色無光澤 無色光澤状光沢	良好	焼	焼

第4表 A区出土遺物観察表(4)

番号	出土場 遺構	種類	基層	部位	位置(cm)	調査等		地土(造和材・埴入物)	集成	色調		備考	
						口徑	高さ	内面	外面	内面	外面		
89	SA2	上	墓床	井戸底～側壁				ナゲ	ナゲ	1~4mmの茶褐色・碧・白色粒	良好	碧	
90	SA2	上	墓床	底面～側壁	9.1	ナゲ	上位:ナゲ・鉛錆さ 下位:側方向のナゲ		1mm以下の茶褐色を少量	良好	明褐色 明赤褐色	碧褐色	
91	SA2	土	西坪	側壁～底部	18.1	側方向のナゲ	一箇又スズ 上位:側方向のミガキ 下位:ミガキ(半径不明)	無色		良好	碧	碧 内面:風化気味	
92	SA2	上	側	底部				ナゲ	ナゲ	1mm以下の浅黄褐色粒	良好	に赤い青緑	に赤い青緑 穿孔(5個)
93	SA3	土	西	口縁	10.5			ト位:T柱による横 方向のナゲ 下位:ナゲ	スズ付附 上位:側方向のナゲ 下位:ナゲ	4mm以下の褐色・黒色状状光沢粒	良好	に赤い青	に赤い青
94	SA3	土	西	口縁	10.5			ナゲ	ナゲ 無色 スズ付附	2mm以下の茶褐色 1mm以下の黑色透明光沢・無色光沢 粒	良好	暗紅褐色	に赤い青 褐色
95	SA3	土	西	口縁				側方向のナゲ	側方向のナゲ 一箇又スズ付附	2.5mm以下の茶褐色 1mm以下の無色透明	良好	に赤い青	に赤い青
96	SA3	土	壁	口縁				ナゲ	丁寧なナゲ	無色			
97	SA3	土	西	底部				ナゲ	側斜斜性尖端	2mm以下の茶褐色 1mm以下の無色透明光沢粒	良好	碧	碧
98	SA3	上	側	側壁～底部	7.8	T柱による横・斜め 方向のナゲ	ナゲ ナゲ押さえ板 スズ付附		1~3mmの茶褐色粒	良好	黄緑	碧	
99	SA3	土	墓床	井戸底～側壁				ナゲ	無色透明光沢 1mm以下の灰・褐色粒	良好	碧		
100	SA4	土	側	口縁				ナゲ		2mm以下の浅青・褐色粒	良好	碧	に赤い青
101	SA4	上	壁	口縁	13.3			ナゲ		2mm板の赤褐色・白・褐色粒	良好	に赤い青緑	複合
102	SA4	土	側	口縁～底部	12.1	3.0		ナゲ	ナゲ	無色	良好	灰	灰
103	SA4	上	外	口縁～底部	14.0			ナゲ	ナゲ	無色な褐色・に赤い青緑・灰褐色・ 灰・褐色光沢粒	良好	に赤い青緑	に赤い青緑
104	SA4	上	側	側壁下～底部				ナゲ	側方向のナゲ 下位:ナゲ	3mm以下の灰白色	良好	灰白	灰白
105	SG1	土	側	口縁～底部				ナゲ	ナゲ ナゲ:スズ付附	5mm以下の灰・褐色粒	良好	に赤い黄緑	に赤い黄緑
107	SR1	土	西	側壁～底部	9.7	ナゲ 削め万葉の跡毛目 (半径不明)		ナゲ 削め万葉の跡毛目 (半径不明)	3.5mm以下の白灰・灰褐色粒	良好	黑	暗灰黑色	
106	SR2	土	側	口縁～底部	12.8			同軸ナゲ	同軸ナゲ	2mm以下の白色粒	良好	オリーブ灰	オリーブ灰 外側:自然釉
109	SR2	土	墓床	井戸底～側壁				ナゲ	ナゲ	無色透明粒	良好	碧	碧
110	包含層	酒	蓋	口縁～側壁	22.2			上位:ナゲ 中位:トロ:14.6cm円錐 下位:トロ:14.6cm円錐 の跡毛目	上位:ナゲ 中位:トロ:14.6cm円錐 下位:トロ:14.6cm円錐 の跡毛目	無色	良好	灰 オリーブ灰	灰
111	包含層	酒	底盤	つまみ				—	上位:口板ナゲ 側面部:ナゲ	無色	良好	灰	灰 複合形状つまみ
112	包含層	酒	底盤	口縁～側壁	11.4			圓板ナゲ	圓板ナゲ	1mm以下の白色粒	良好	灰	灰
113	包含層	酒	底盤	口縁～側壁	15.5			圓板ナゲ	圓板ナゲ	無色	良好	灰オリーブ	灰オリーブ
114	包含層	灰	底盤	口縁～大井形				圓板ナゲ 上位:ヘラ割り	圓板ナゲ	無色	良好	灰	外側:自然釉
115	包含層	灰	底盤	口縁～底部	10.8			圓板ナゲ	圓板ナゲ	無色	良好	オリーブ	灰
116	包含層	灰	底盤	口縁～側壁	11.8			圓板ナゲ	圓板ナゲ	無色	良好	灰オリーブ	に赤い灰

第5表 A区出土遺物観察表(5)

番号	出土地 遺物	種類	器種	部位	法面(cm) 口径 底径 高さ			内面	外面	施土(漆和材・埋入物)	焼成	色調 内面 外面		備考	
					内	外	面					内	外		
117	包含層	素	环形	口縁一 体部	10.0			白板ナテ	白板ナテ	1mm以下の白色粒	良好	オリーブ	オリーブ		
118	包含層	素	环形	口縁一 體部		9.2		白板ナテ	白板ナテ	颗粒	良好	黄	黄	外因:自然風化	
119	包含層	土	环形	口縁一 体部	15.2			斜め方向のヘラミ ガキ	横方向のヘラミガ キ	2mm以下の赤褐色・灰白色粒	良好	棕	棕	内因:風化著しい	
120	包含層	土	环形	口縁一 大井形	15.5			上位:ミガキ 下位:横方向のミガ キ・一部黒光	上位:ミガキ 下位:横方向のミガ キ・一部黒光	颗粒	良好	棕	棕		
121	包含層	素	环形	口縁一 大井形	14.7	4.0		ミガキ(単位不明)	横・斜め方向のミガ キ	颗粒	良好	オリーブ灰	オリーブ灰	内外因ともに赤色 陶器を含む	
122	包含層	土	环形	口縁一 体部	10.5			ミガキ(単位不明)	丁寧なナテ	1mm以下の茶褐色・灰色板	良好	に赤い斑模	に赤い斑模		
123	包含層	土	素	底面			10.7		ナテ ス付壁	1.5~5mmの薄・灰・灰白・灰赤・暗褐色 微細な透明光沢板	良好	灰	棕	木の裏底	
124	包含層	土	素	底面			9.0	ナテ	ス付壁 上位:ナテ 下位:鉛灰	1.5~4mmの薄・灰・灰白色板	良好	浅黄	棕	木の裏底	
125	包含層	土	素	底面			10.4	ナテ 炭化物付壁	ナテ ス付壁	1~3mmの灰白・暗褐色・灰黑色板	良好	に赤い黄緑	に赤い黄緑	木の裏底	
126	包含層	土	素	底面			8.3	ナテ	ナテ ス付壁	1~7mmの豊・灰・灰白・灰赤・暗褐色 微細な透明光沢板	良好	に赤い棕	に赤い黄緑	木の裏底	
127	包含層	土	素	底面			9.3	ナテ	上位:横方向の工持 下位:ナテ	1~4mmの褐色・黑色光沢板	良好	棕	棕	木の裏底	
128	包含層	土	素	底面			8.2	ナテ	上位:横方向のナテ 下位:ナテ	2mm以下の褐色板	良好	棕	棕	外因:風化気味	
129	包含層	土	ミニ ユア ム	口縁一 底面	10.4	4.0	3.6	ナテ	上位:横方向のナテ 下位:鉛板ナテ	4.5mmの深褐色板 3mm以下の灰褐・青褐色板・無色透明 板	良好	に赤い棕	灰		
130	包含層	土	ミニ ユア ム	口縁一 底面			4.5	3.0	ナテ による鉛板	ナテ	颗粒	良好	に赤い黄緑	に赤い黄緑	外因:風化気味
131	SAS?	土	素	口縁一 底面	8.4	4.0	4.2	ナテア後、工具跡 のナテ 口縫部は詰まつ	ナテ ス付壁	颗粒	良好	に赤い黄緑	に赤い黄緑		
132	包含層	土	ミニ ユア ム	口縁一 底面			2.7	3.6	ナテア	ナテア	1~3mmの茶褐色板	良好	棕	棕	
141	SAS?	土	素	口縁一 底面	25.3			ナテ 僅かに炭化物付壁	ナテ ス付壁	1.5~4mmの褐色板 微細な黑色透明光沢・茶褐色光沢板	良好	棕	棕	内因:風化気味	
142	SAS?	土	素	口縁一 底面	18.1			ナテ	ス付壁 上位:横方向のナテ 下位:斜め方向のナ テ	3mm以下の薄・黑色板・黑色透明光 沢板	良好	棕	明赤褐	内因:炭化物付壁	
143	SAS?	土	素	口縁一 底面	17.1			ナテ 鉛引きえ	ナテ	1.5mm以下の灰褐色板 2mm以下の茶褐色板	良好	に赤い黄緑	に赤い黄緑		
144	SAS?	土	素	口縁一 底面	26.1	27.7	7.3	上位:鉛引きえ 下位:ナテ	上位:鉛引きえ 下位:ナテ ス付壁	2mm以下の薄・茶褐色板	良好	に赤い棕 鐵斑	鐵斑	蒸氣孔径:6cm	
145	SAS?	土	素	口縁一 底面	15.2			ナテ	横・斜め方向のナ テ ス付壁	颗粒	良好	棕	棕	内因:ス付壁	
146	SAS?	土	素	口縁一 底面				斜め方向のナテ	ナテ	2mm以下の灰褐色・赤褐色板	良好	浅黄	浅黄	底面に穿孔	
147	SAS?	土	素	鉛引き 底面				ナテ	ナテ 中位:横方向のヘラ ミガキ 下位:ナテ・ジガ キ	颗粒	良好	棕	棕		
148	SAS?	土	素	鉛引き 底面				調整不明	ナテ	上位:調整不明 下位:ミガキ (単位不明)	颗粒	良好	棕	内因:風化気味	

第2節 C区の調査 (第23図)

1 調査の概要

調査面積は550m²である。北東から南西方向に緩く傾斜しており、標高は10.0~12.0mを測る。古墳時代の竪穴住居跡3軒、中世の土壙墓4基、時期不明の溝状造構1条・土坑5基・ピット5基が確認されている。検出面はすべて第Ⅲ層の褐色砂質土層である。調査区東側で検出された竪穴住居跡3軒は調査区東側に設定したトレンチを掘り下げた際にいずれもプランの東側を失っている。

出土遺物は、土師器、須恵器、洪武通宝、人骨の一部、玉、軽石製品、鉄製品(?)の破片である。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡(SA)

SA1 (第24図)

SA2に北側を切られている。平面プランは約4m×約4mの隅丸方形を呈するものと推定される。検出面からの深さ約15cmを測る。遺構に伴う主柱穴は確認できていない。遺物は土師器、須恵器等が約300点が検出面から床面の間で出土しており、北東部分で遺物の集中域が確認された。

【出土遺物】第29図 SA 1~3出土遺物実測図 1~4 (C区出土遺物観察表)

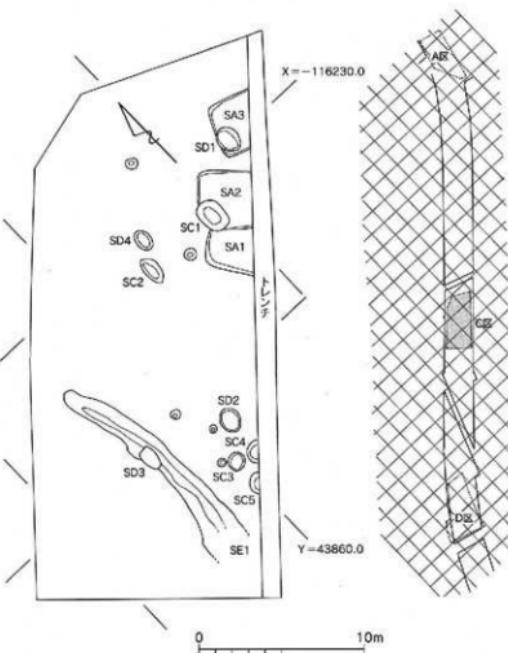
SA2 (第24図)

SA1の北側に位置する。SC1によって西南部を切られている。規模は約3.5m×約3.5mの隅丸方形プランになると推定される。検出面からの深さは約15~20cmである。遺構に伴う主柱穴は確認されていない。遺物は土師器、須恵器を中心にして約70点で検出面から床面の間で出土している。

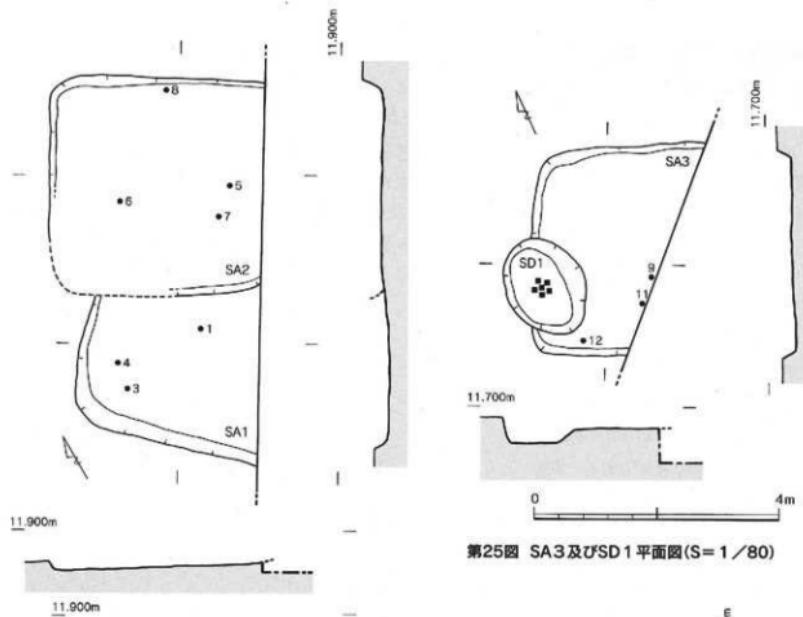
【出土遺物】第29図 SA 1~3出土遺物実測図 5~8 (C区出土遺物観察表)

SA3 (第25図)

SA2の1m北側に位置する。中世の土壙墓(SD1)により西壁の一部を切られている。推定で約3.5m×約3.5mの隅丸方形プランになると思われる。検出面からの深さ約10cmを測る。住居跡中央で甕が

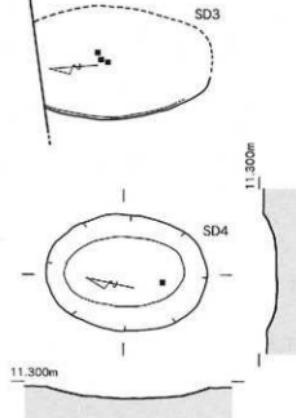
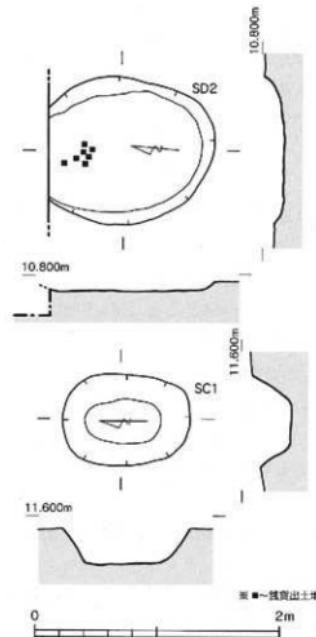


第23図 C区 遺構分布図(S=1/300)



第24図 SA1・2平面図(S=1/80)

第25図 SA3及びSD1平面図(S=1/80)



第26図 SD2～4及びSC1平面図(S=1/40)

埋設されているのが確認されている。出土遺物は40点程で検出面から床面の間で確認されている。

【出土遺物】第29図 S A 1～3出土遺物実測図 9～13(C区出土遺物観察表)

(3) 土壙墓(SD)

SD 1 (第25図)

S A 3の西壁を切るかたちで検出した。長軸約1.7m、短軸約1.3m、検出面からの深さ約30cmの梢円形プランを呈する。長軸の方向はN-7°-Eを指し、床面から約15cmの所で洪武通宝6枚、土師器4点、頭蓋骨の破片と足の骨の一部が出土している。

SD 2 (第26図)

長軸約1.3+ α m、短軸約1.2m、検出面からの深さ約15cmの梢円形プランを呈する。長軸の方向はN-9°-Eを指し、遺物は床面から10cm程の所で洪武通宝7枚、鉄製品(?)の破片1点、玉1点が出土している。玉については第30図「SD 2及び包含層出土遺物実測図」及び第8表「山崎上ノ原第2遺跡出土装飾具計測表」を参照いただきたい。

SD 3 (第26図)

S E 1により削平を受けていたため床面のみの検出となった。長軸約1.4+ α m、短軸約0.9+ α mの梢円形プランを呈すると思われる。検出面からの深さは約10cm(残存部)を測る。遺物は洪武通宝5枚、鉄製品(?)の破片5点、人間の歯数本が出土している。

SD 4 (第26図)

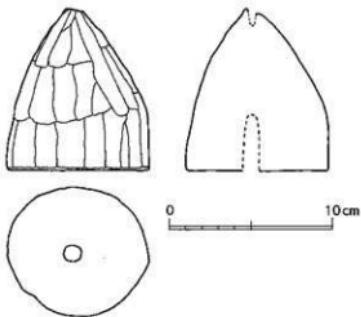
長軸約1.3m、短軸約0.95m、検出面からの深さ約20cmを測り、梢円形プランを呈する。長軸の方向はN-14°-Eを指し、ほぼ床面で銭貨、鉄製品(?)の破片4点、人骨の一部(?)が出土した。銭貨は銅により著しく銹着したうえに纖維質と木質が固着した状態で確認されている。また、纖維には布目が明瞭に残っていることから頭陀袋と思われる。銭貨は6～8枚と推定され、SD 1～3と同じように洪武通宝ではないかと考える。

なお、SD 1～SD 4内から出土した銭貨についての詳細は第6表「C区土壙墓内出土銭貨計測表」を参照いただきたい。

(4) 土坑(SC)

SC 1 (第26図)

S A 2の南西隅で検出され、S A 2の南西壁の一部を切っている。長軸約2.1m、短軸約1.5m、検出面からの深さ約60cmを測る、梢円形プランである。長軸の方向はN-2°-Wを指す。埋土は4層に分けられ、レンズ状に堆積している。床面から約40cmの所で円錐状の輕石製品が出土している。底径8.7cm、高さ9.9cm、穿孔径4.5mm(上位)・10.5mm(下位)を測る。



第27図 SC 1出土輕石製品実測図(S=1/3)

周囲が削られ、上部及び底面の中心には末貫通の穿孔が施されているが、その用途等については不明である。出土遺物については、第27図「SC1出土軽石製品実測図」を参照いただきたい。

なお、SC2～5については第7表「C区土坑計測表」を参照いただきたい。

(5)溝状造構(SE)

SE1(第23図)

調査区中央から調査区外の南東方向へ走行している。残存部は長さは約14.0m、幅は約1.2～2.6mを測る。溝の断面形態はU字状を呈している。構築時期については、中世の土壤墓(SD3)を切っており、中世の所産と思われるが、出土遺物がなく詳細な時期については不明である。

(6)包含層

包含層からは少量の土師器が出土している。詳細は、第30図「SD2及び包含層出土遺物実測図」及び「C区出土遺物観察表」の15・16を参照いただきたい。

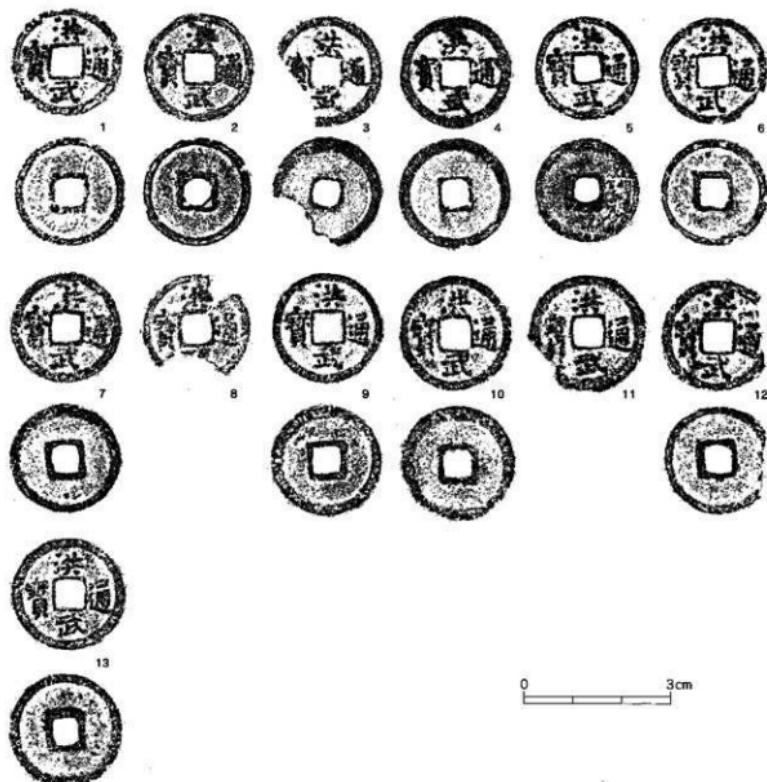
第6表 C区土壤墓出土銭貨計測表

出土遺構	探査番号	銭貨名	王朝	初鑄年	外形(mm)	内形(mm)	重量(g)	備考
SD1	1	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.2	
SD1		洪武通宝	明	1368年	—	—	2.0	一部欠損 ヒビのため折影なし
SD1	2	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.0	一部欠損
SD1	3	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	1.7	4分の1欠損
SD1	4	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.8	2.1	
SD1		洪武通宝	明	1368年	—	—	0.9	4分の3欠損 折影なし
SD2	5	洪武通宝	明	1368年	2.1	1.8	2.1	
SD2	6	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.0	一部欠損
SD2	7	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.8	1.9	一部欠損
SD2		洪武通宝	明	1368年	—	—	2.0	ヒビのため折影なし
SD2	8	洪武通宝	明	1368年	2.1	1.9	0.9	3分の1欠損 折影(表のみ)
SD2		洪武通宝	明	1368年	—	—	0.6	4分の3欠損 折影なし
SD2	9	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.1	
SD3	10	洪武通宝	明	1368年	2.3	2.0	2.2	
SD3	11	洪武通宝	明	1368年	2.3	1.9	1.7	8分の1欠損 折影(表のみ)
SD3		洪武通宝	明	1368年	—	—	1.9	8分の1欠損 ヒビのため折影なし
SD3	12	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	1.9	8分の1欠損
SD3	13	洪武通宝	明	1368年	2.3	1.9	2.1	
SD4		(洪武通宝)	(明)	(1368年)	—	—	—	特にによる傷害が著しい (8～8枚?)

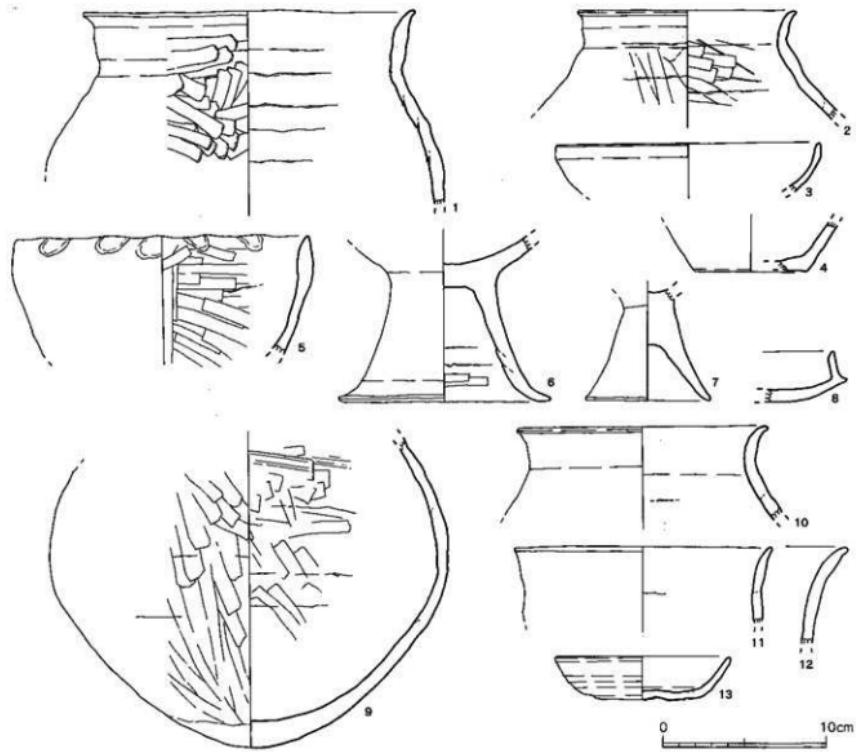
第7表 C区土坑計測表

土坑番号	主軸方位	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土状況	遺物の有無
SC2	N-10°-E	橢円形	1.80	1.00	0.56	4層	無
SC3	N-47°-E	橢円形	1.20	1.05	0.30	-	無
SC4	N-38°-E	橢円形	1.35	(0.6)	0.09	-	無
SC5	N-40°-E	橢円形	1.30	(0.6)	0.13	-	無

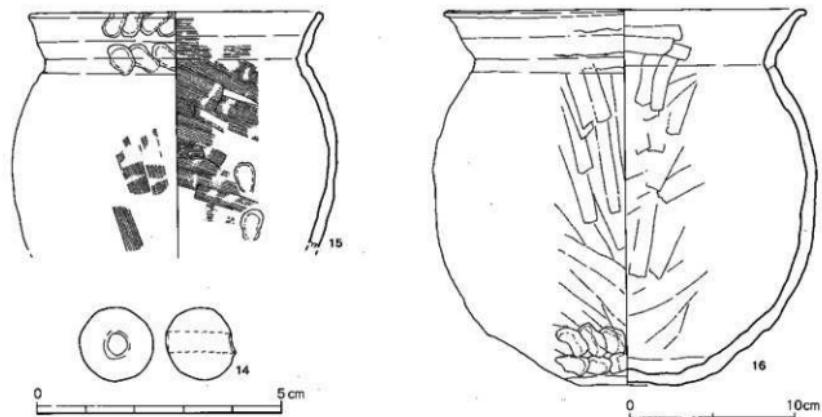
* () は現存の長さを示す。



第28図 SD 1~4出土銭貨拓影(S=1/1)



第29図 SA1～3出土遺物実測図 (S=1/3)



第30図 SD2及び包含層出土遺物実測図 (14 S=1/1 15・16 S=1/3)

第8表 山崎上ノ原第2遺跡出土装飾品計測表

調査区	遺物番号	径(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
A区	73	41.00	5.20	1.50	10.30	滑石製
A区	74	26.00(長さ)	13.02	3.83	3.95	滑石製 緑色
A区	133	7.40	6.92	1.50	0.83	滑石製
A区	134	8.32	4.93	1.66	0.31	滑石製
A区	135	6.11	3.04	1.76	0.16	滑石製
A区	136	4.95	2.16	2.10	0.07	滑石製
A区	137	4.60	3.05	1.27	0.08	ガラス製 紺色
A区	138	5.14	3.59	2.05	0.31	滑石製
A区	139	3.38	2.03	1.20	0.03	ガラス製 青色
A区	140	2.74	0.90	1.12	0.01	ガラス製 赤色
C区	14	15.37	13.02	3.83	3.95	滑石製 増鉢灰色

第9表 C区出土遺物観察表

番号	出土場 遺構	種類	面積	部位	法面(m) 口座 基底 高さ	調査等 内面 外面	地 土(埋和材・混入物)	地底 内面 外面	色調 内面 外面		備考
									横方向のナデ	横方向のナデ	
1	SA1	土 壁	山根～ 削部		25.5		横方向のナデ	横方向のナデ	1~6mmの暗赤褐色・墨色斑状	良好 に赤い偏 に赤い偏	
2	SA1	土 壁	口壁～ 底部	13.5		上位:ナデ 下位:削め方向のナ ナデ(下→上) 上位:スス付	横方向のナデ	1~4mmのに赤い 黒褐色・墨色 暗褐色板	良好 に赤い偏 に赤い偏		
3	SA1	土 底部	山根～ 削部		16.5		ミガキ	横方向のナデ	微細な褐色斑	良好 明黄色 暗褐色	
4	SA1	土 壁	山根		6.2	丁寧なナデ	削め方向のナデ	暗		良好 良 良	
5	SA2	土 壁	山根～ 削部			ナデ	ナデ スス付	1~5mmの黄・灰褐色	良好 良 良		
6	SA2	土 底部	山根～ 削部		12.6	ミガキ 横方向のナデ	ミガキ(半位不規)	1mmの暗褐色	良好 に赤い偏 偏		外回:風化灰
7	SA2	土 底部	山根～ 削部		7.8	横方向の削ナデ	ナデ	1~2mmの白・灰白色板 1mmの削泥灰板	良好 良 良		
8	SA2	土 底部	口壁～ 底部			ナデ	ナデ	1.5mm以下の暗赤褐色 微細な透明白色斑	良好 良 良		
9	SA3	土 壁	山根～ 削部		15.5	工馬による横方向 のナデ 一部荒毛	ナデ(一側) 下位:削くスス付 削毛	2~6mmの黄・白褐色	良好 明黄色 明黄色		
10	SA3	土 壁	口壁～ 削部		15.5	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	2.5mm以下の浅黄・水褐色 3mm程の水褐色光沢	良好 に赤い偏 明黄色		
11	SA3	土 壁	山根		15.8	横方向のナデ	ナデ	3.5mm以下の白灰・灰褐色	良好		外回:風化灰
12	SA3	土 壁	口壁～ 削部			上位:横方向のナデ 下位:削め方向の削 毛(半位不規)	上位:被削肉の綿毛 下位:削くスス付	3mm以下の中灰・灰褐色	良好 灰褐色 良		に赤い偏
13	SA3	土 壁	山根～ 削部		11.7	2.7	横方向のナデ	横方向のナデ	微細な赤褐色	良好 に赤い偏 に赤い偏	切り離し技法:ハラ 切り
14	佐倉層	土 壁	口壁～ 削部		17.6		上位:横方向の削毛 下位:削め方向の削 毛口	上位:削毛させ 下位:削め方向の削 毛口	1~3mmの赤褐色・灰褐色 3mm程の赤褐色	良好 良 良	
15	佐倉層	土 壁	口壁～ 削部		21.7	23.0	上位:削ナデ 下位:ナデ	ナデ 一部荒毛	2~5mmの暗褐色	良好 良 良	

第3節 D区の調査 (第31図)

1 調査の概要

調査面積は720m²である。標高約9.0mの平坦な地形である。

古墳時代の竪穴住居跡9軒・土壙墓2基、時期不明の溝状遺構2条・土坑5基・ピット7基が確認されている。検出面はすべて第III層の褐色砂質土層面である。竪穴住居跡9軒は調査区中央から西側で検出されている。何れからも遺構に伴う主柱穴は確認されていない。土壙墓は住居の床面を掘り込むかたちで1基、住居の床面と壁を切るかたちで1基が確認されている。

主な出土遺物は土師器、須恵器、刀子(2点)である。

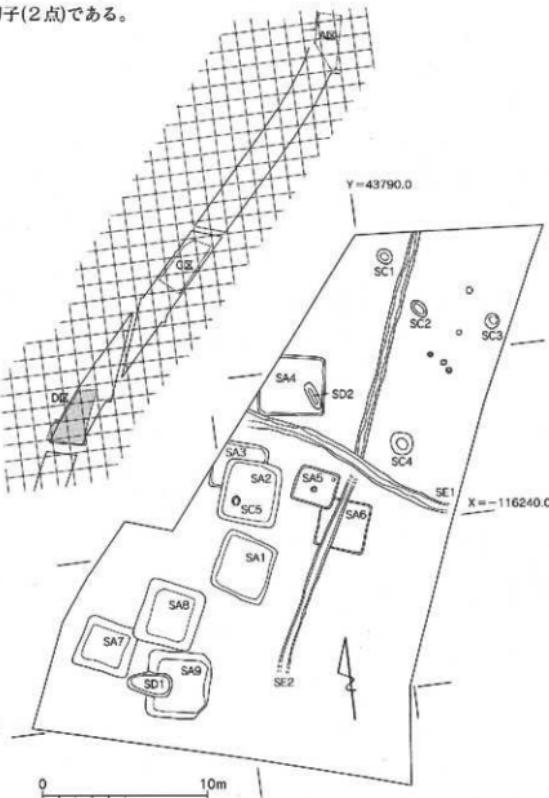
2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡(SA)

SA1 (第32図)

調査区ほぼ中央で検出した。長軸約3.6m、短軸約3.3mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約40cmを測る。床面積は約10.6m²である。長軸方向はN-17°-Eを指す。出土遺物は土師器が殆どで検出面から床面の間で約60点が出土している。

【出土遺物】第44図 SA 1出土遺物実測図 23~25(D区出土遺物観察表)



第31図 D区 遺構分布図(S = 1/300)

SA2 (第32図)

SA 2により住居の南東部は切られており、北西側は調査区外に延びている。現存の形状から判断すると約2.9m×約3.2mの隅丸方プランを呈するものと思われ、床面積は約7.2m²である。検出面から床

面までの深さ約40cmを測り、長軸方向はN—74°—Wを指す。出土遺物はない。

SA4(第33図)

長軸約4.0m、短軸約3.6mの隅丸方形プランを呈し、北西側は調査区外に延びる。検出面からの深さは約40cm、床面積は約13.4m²を測る。長軸方向はN—78°—Wを指す。造構に伴う主柱穴等は検出できなかった。なお、南東隅では土壙墓(S D 2)が確認されており、S D 2については(2)土壙墓で述べている。また、南西隅には完形の壺が立位の状態で出土しており、別の壺の底部が口縁部にはめられており蓋として用いられていたものと思われるが、調査時点では破損しており、壺の中には土砂が流入していた。なお、壺の中の土を箒にかけたところ刀子1本が出土している。遺物は土師器を中心にはほぼ床面で約300点が出土地している。

【出土遺物】第40・41図 S D 2 出土遺物実測図(1)(2) 第42・43図 S A 4 出土遺物実測図(1)(2) 6・8・9・14・16~22(D区出土遺物観察表) 刀子(15);(第11表「山崎上ノ原第2遺跡出土金属製品計測表」)

SA5(第33図)

S A 6の北西端部を切ったかたちで検出された。長軸約2.5m、短軸約2.2mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約40cm、床面積約4.8m²を測る。長軸方向はN—63°—Wを指す。C区で検出された住居では最小である。中央と北東部でピット2基を確認している。北東隅では床面で押しつぶされた状態の壺1個体分と須恵器の环身が2個出土している。

【出土遺物】第45図 S A 5 出土遺物実測図 26~29(D区出土遺物観察表)

SA6(第33図)

長軸約3m、短軸約2.9mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約15cm、床面積約7.6m²を測る。長軸方向はN—14°—Wを指す。住居の北端部をS A 5に切られ、さらに北から南に走行する溝(S E 2)により中央から西側を幅約40~60cmにわたり切られている。出土遺物はない。

SA7(第33図)

北東端部がS A 8により切られている。長軸約3.2m、短軸約3.0mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約60cm、床面積約7.8m²を測る。長軸方向はN—60°—Wを指す。出土遺物はない。

SA8(第33図)

長軸約3.7m、短軸約3.6cmの隅丸方形プランで、床面積約12.0m²を測り、検出面からの深さは約60cmである。長軸方向はN—30°—Eを指す。S A 7の北隅部を切っている。出土遺物はない。

SA9(第34図)

北端部はS A 8と接し、長軸約4.0m、短軸約3.8cmの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さは約45cm、床面積約14.2m²を測る。長軸方向はN—11°—Eを指す。住居の床面と西壁は土壙墓(S D 1)により切られている。また、南東端部は現代の攪乱を受けている。S D 1については(2)土壙墓で述べている。

【出土遺物】第35図 S A 9 出土遺物実測図 30(D区出土遺物観察表)

(2) 土壙墓 (SD)

SD 1 (第34・36図)

調査区南端で検出された S A 9 の中央から西側の壁を切るようなかたちで検出されている。長軸約2.7m、短軸約1.4mの楕円形プランを呈し、長軸の方位はN-78°-Wである。壙底は最大長約2.1m、幅約1.1~0.6mの東側が膨らむ卵形を呈し、砂に黄褐色粘土を混ぜた土を用いて整地し平らにしている。さらに、東側は須恵器の坏身と土師器の坏身を伏せて並べ高くしている。また、東側と西側は砂に黄褐色粘土が混ざった上で壙底より約10cm程高くなっている。人骨は消滅していたが、刀子1点がちょうど腰にあたる部分で出土している。東側が広く造ってあることから推測すると東側が頭になると考える。

【出土遺物】第37図 S D 1 出土遺物実測図 31・32(D区出土遺物観察表) 刀子(33); (第8表 『山崎上ノ原第2遺跡出土金属製品計測表』)

SD 2 (第38図)

調査区の東端に位置する S A 4 の南東隅で確認されている。長軸の方位はN-8°-Wを指す。規模は長軸約1.7m、短軸約0.6mの楕円形プランである。床面を砂で平らにし、その上に主軸から左右約10cm程空け土師器の壺の口部と胴部のみを使い、外器面を上にした状態で並行にならべ約1mの上器列を形成している。県内では例を見ないものであろう。壺の破片の組み合わせについては第39図『S A 4・SD 2出土遺物接合関係図』を参照されたい。また、北側には須恵器の壺蓋と土師器の坏身が伏せて置かれ、両脇は土師器の片口鉢の一部を使って押さえがしてある。埋葬者の頭を乗せる「枕」として用いられたのではないかと推察される。さらに、枕の上に伏せて置かれている土師器の坏身と須恵器のハソウは、当初は頭の横に置かれていたが、横転したものと思われる。足元にあたる南側には、副葬品として土師器の高壺と須恵器の高壺と壺が置かれていた。遺構の規模から成人が埋葬されていたと推測される。

なお、この土壙墓の土壤については自然科学分析を実施している。内容は、内部床面(3地点)、土器直下(12地点)、遺構外(16地点)の計31点の試料を採取し、リン酸・カルシウム分析を行うものである。その結果、内部の床面でリン酸・カルシウム含量が比較的高い値が観測され、生物遺体が存在していた可能性が考えられる。しかし、地表面から比較的浅いことや、遺構埋土の上位層についての分析が行われていないことから、後世の農耕に伴う施肥などの影響が否定できないという結果であった。

【出土遺物参照】第40・41図 S D 2 出土遺物実測図(1)(2) 1~13(D区出土遺物観察表)

(3) 土坑(SC)

調査区内で S C 1~5 の5基の土坑が確認されている。規模等については下記の第10表『D区土坑計測表』を参照いただきたい。

第10表 D区土坑計測表

土坑番号	主軸方位	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土状況	遺物の有無
SC 1	N-63°-W	正円形	0.90	0.90	0.36	3層	無
SC 2	N-42°-W	楕円形	1.20	0.75	0.28	3層	無
SC 3	N-37°-W	楕円形	1.00	0.85	0.28	3層	無
SC 4	N-50°-W	楕円形	1.50	1.40	0.24	3層	無
SC 5	N-32°-E	楕円形	0.59	0.48	0.25	-	無

(4) 溝状遺構(SE)

SE1 (第31図)

調査区中央部を西から東へ走行し、途中でSE2を切っている。両端は調査区外に延びるため不明である。規模は幅は約50~70cm、深さは約30cmを測る。溝の断面形態はU字状を呈し、西から東へ緩やかに傾斜している。埋土は3層に分層できる。出土遺物はなく構築時期等については不明である。

SE2 (第31図)

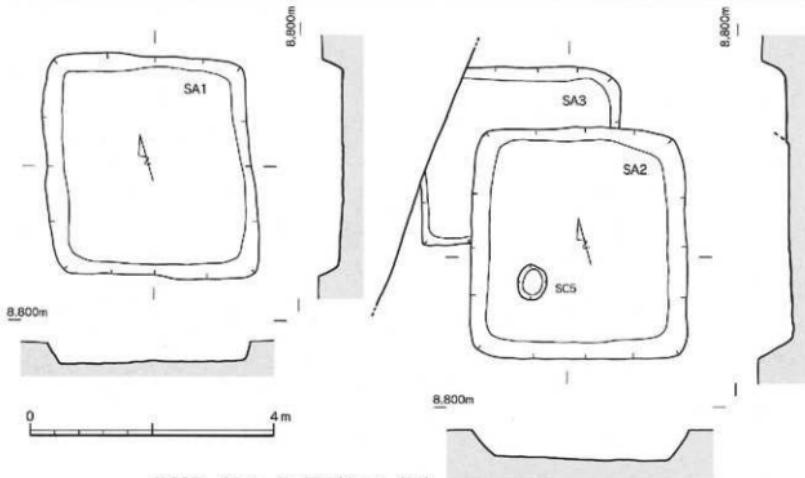
調査区北から南へ向かって走行する。北側は調査区外に延び南側は約40mの地点から不明である。幅は約60~75cm、深さは約30~40cmを測る。溝の断面形態はU字を呈している。北東から南西へ向かって緩やかに傾斜しながら調査区のほぼ中央を縦断する。埋土は2、3層に分層できる。出土遺物はなく構築時期等については不明である。

(4) 包含層

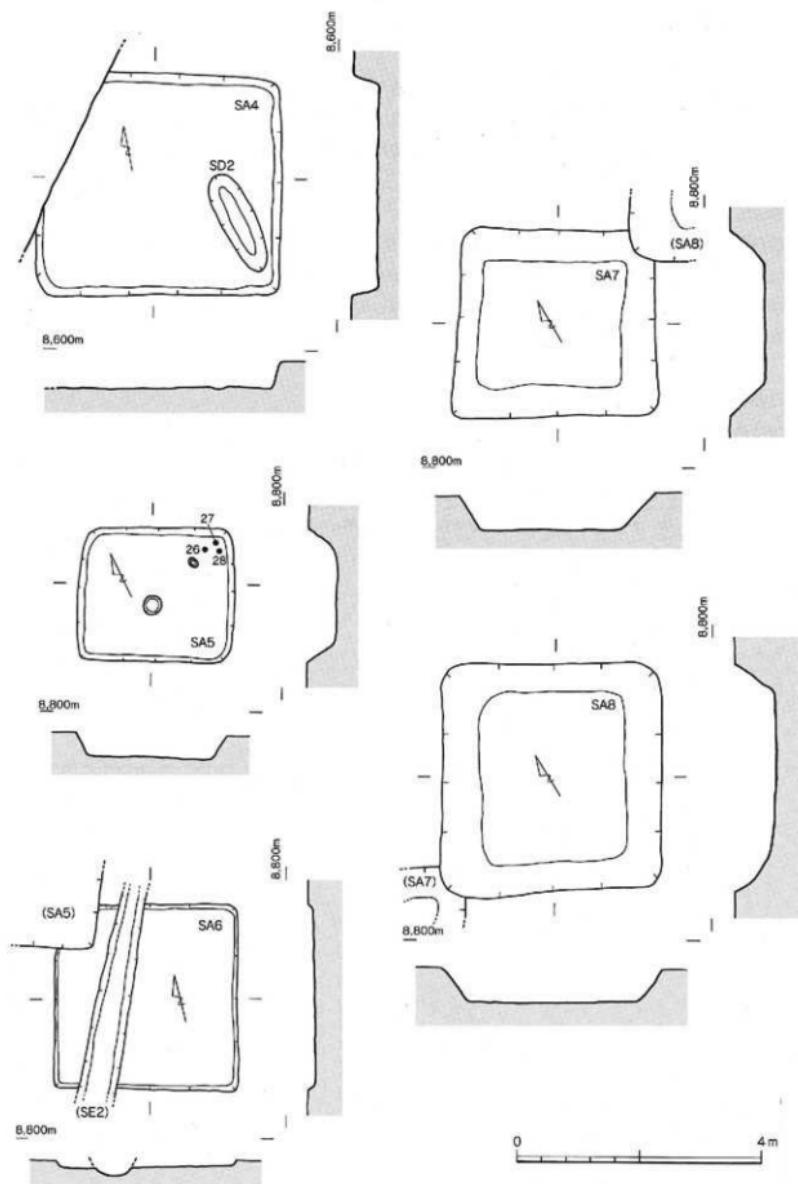
包含層出土遺物は土師器、須恵器の小破片のみであったため、図化は行っていない。

第11表 山崎上ノ原第2遺跡出土金属製品計測表

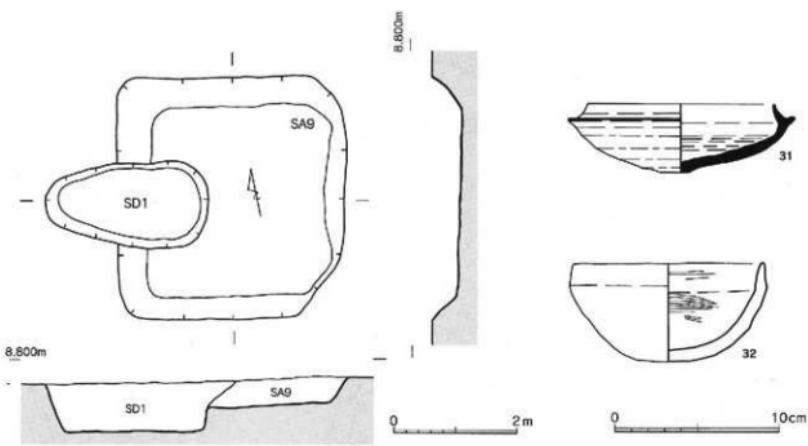
遺物番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	備考
A区-69	刀子	包含層	4.3	0.80	0.3	-
A区-70	圭頭鏡	包含層	4.8	2.00	0.4	-
A区-71	刀子	包含層	5.8	1.20	0.2	-
A区-72	刀子	包含層	6.9	0.70	0.4	-
D区-15	刀子	S△4出土塚(I4)	12.7	1.20	0.2	-
D区-33	刀子	SD1	17.2	1.15	0.2	調査品
E区-16	刀子	SD1	7.0	1.25	0.2	調査品



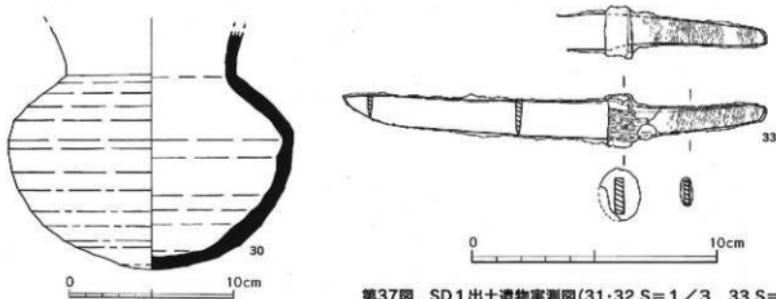
第32図 SA1~3平面図(S=1/80)



第33図 SA4～8平面図($S = 1/80$)

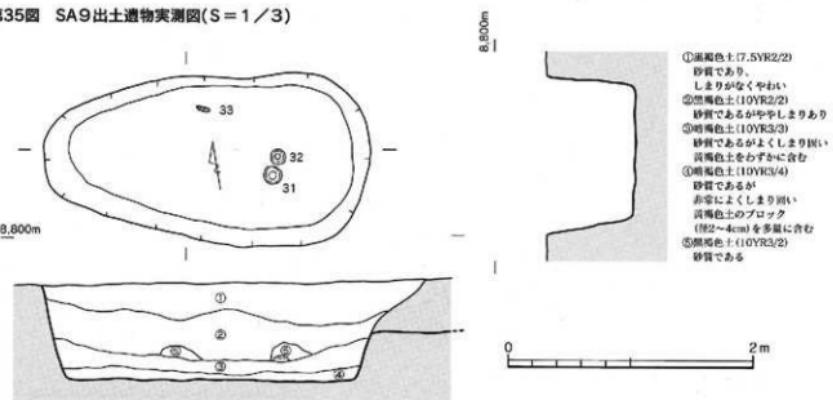


第34図 SA9及びSD 1平面図(S = 1/80)



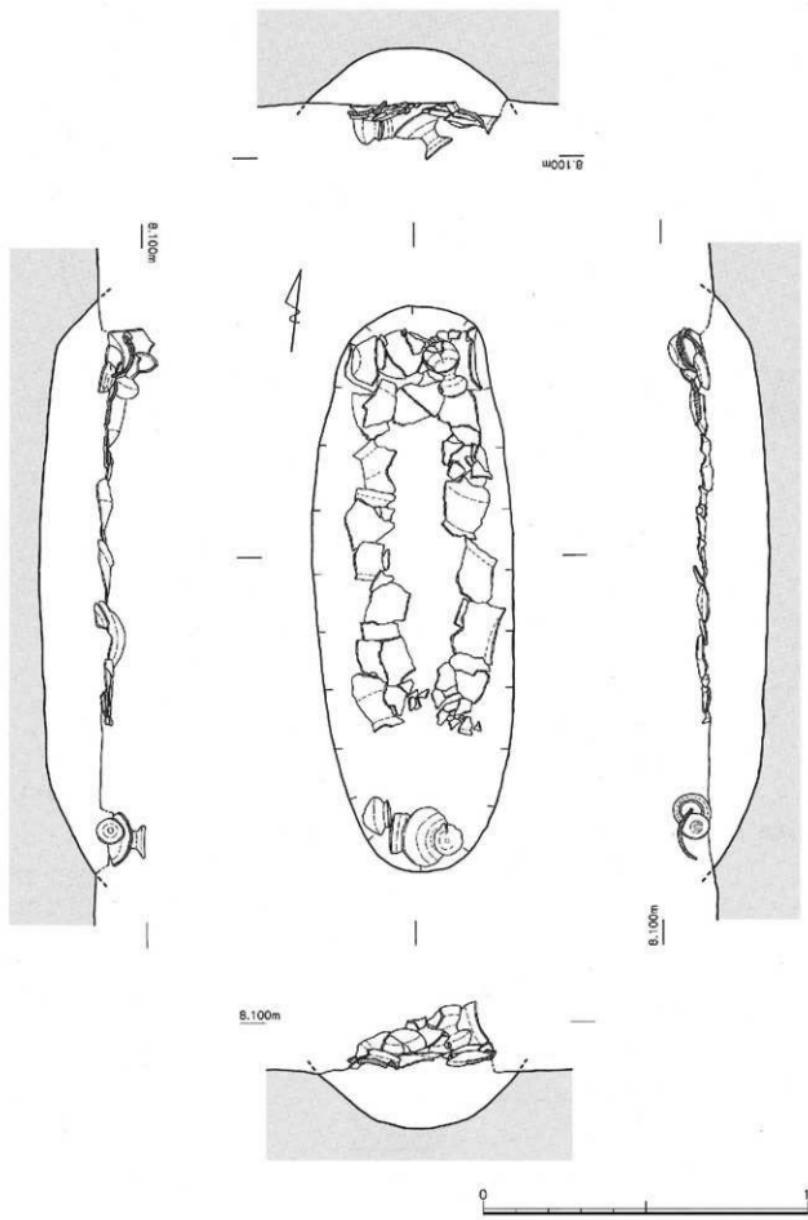
第35図 SA9出土遺物実測図(31・32 S = 1/3 33 S = 1/2)

第36図 SD 1平面図及び土層断面図(S = 1/40)

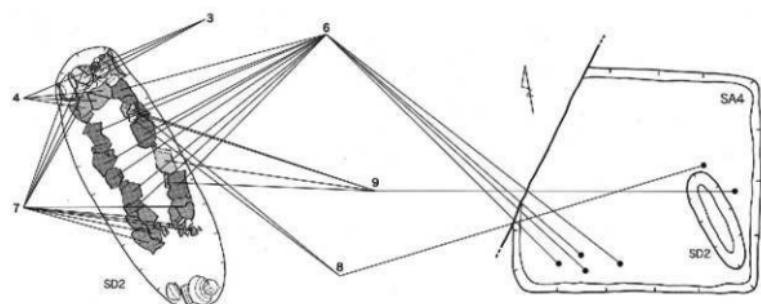


- ①赤褐色土(7.SVR2/2)
砂質であり、
しまりがなくやわい。
- ②灰褐色土(10VR2/2)
砂質であるかやしらしまりあり。
- ③暗褐色土(10YR2/3)
砂質であるかよくしまりはない。
黄褐色土をわずかに含む。
- ④暗褐色土(10YR2/3/4)
砂質であるが、
非常ににくしまり無い。
黄褐色土のブロック
(厚2~4cm)を多量に含む。
- ⑤灰褐色土(10YR2/2)
砂質である。

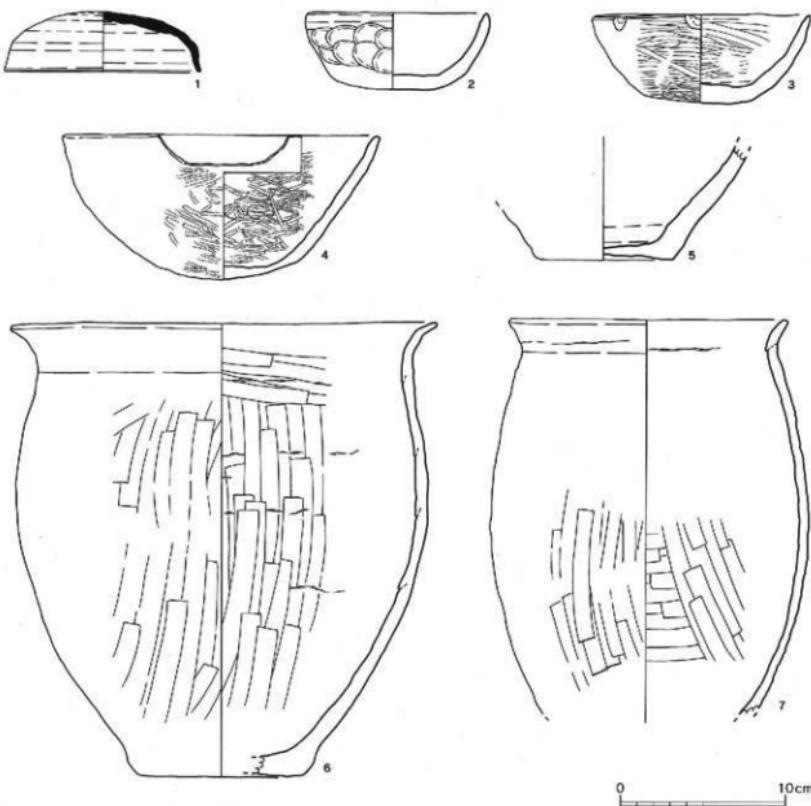
第36図 SD 1平面図及び土層断面図(S = 1/40)



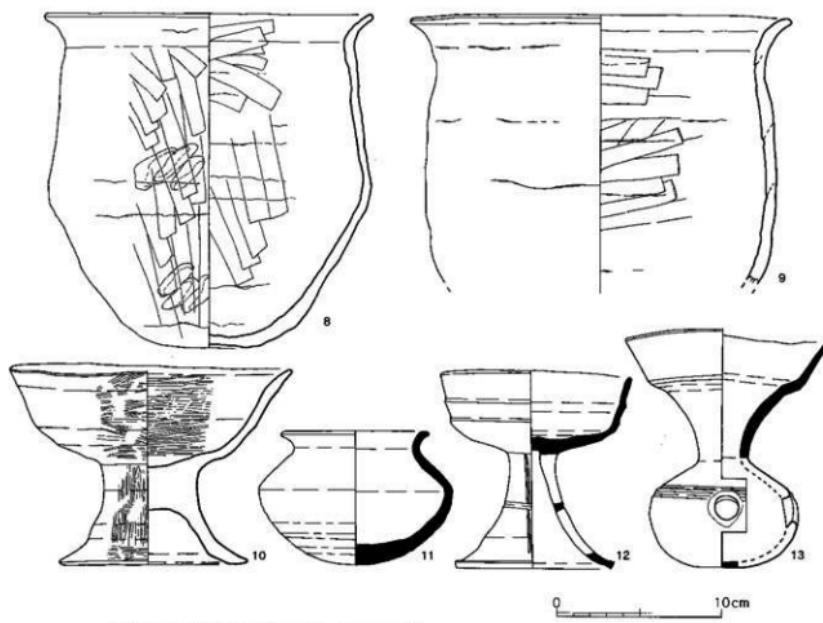
第38図 SD2 平面図・見透断面図(S = 1/15)



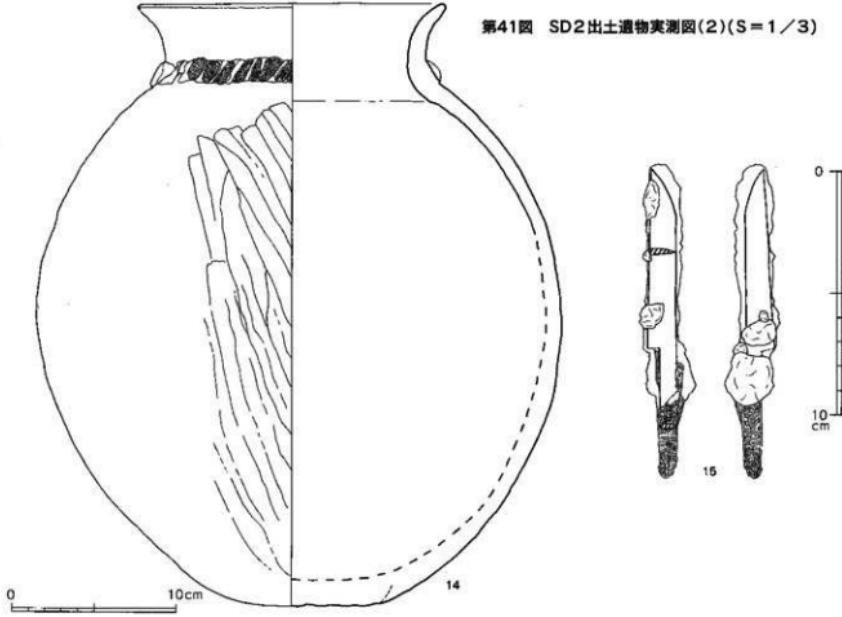
第39図 SA4・SD2出土遺物接合関係図



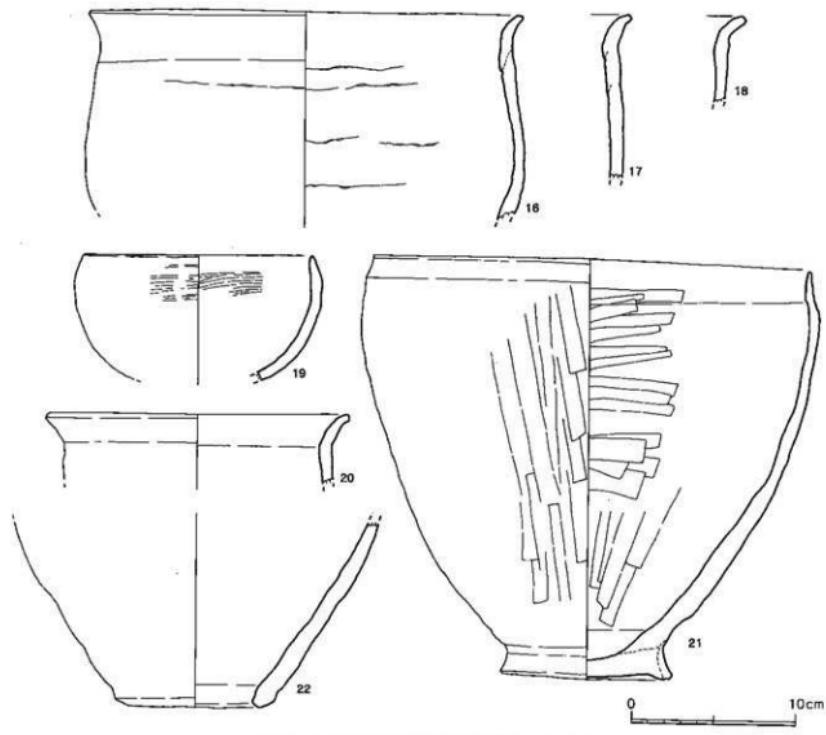
第40図 SD2出土遺物実測図(1)(S=1/3)



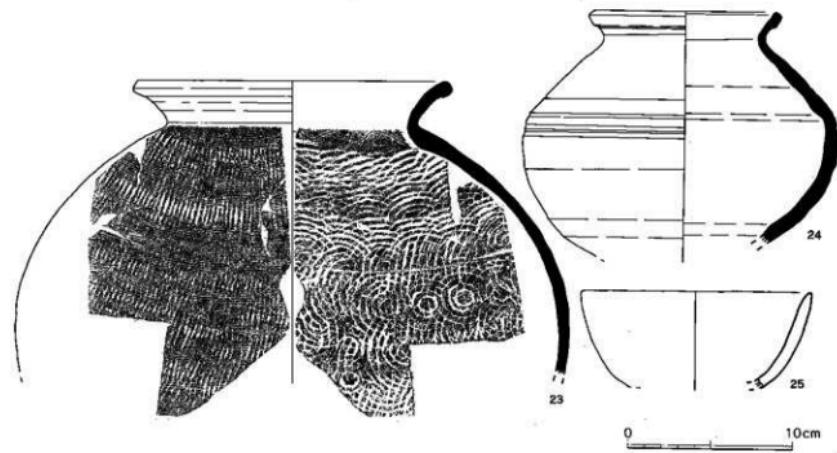
第41図 SD2出土遺物実測図(2)(S=1/3)



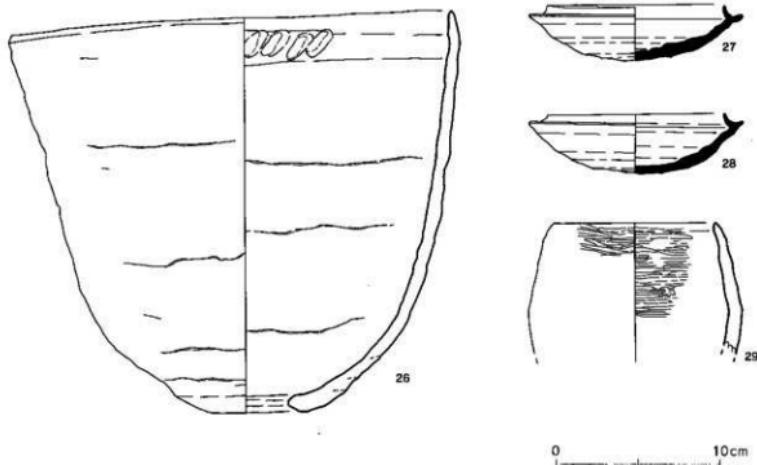
第42図 SA4出土遺物実測図(1)(14 S=1/3 15 S=1/2)



第43図 SA4出土遺物実測図(2)(S=1/3)



第44図 SA1出土遺物実測図(S=1/3)



第45図 SA5出土遺物実測図(S = 1/3)

第12表 D区出土遺物観察表(1)

番号	出土場 遺物	種類	器種	部位	法面(mm) 口幅 壁厚 高さ	質理等		粘 土(葉材・流入物)	焼成	色調		備考
						内 面	外 面			内 面	外 面	
1	SD2	酒	杯底	完形	12.1	上位:ヘラ削り 下位:凹削ナデ	上位:白色 下位:同前ナデ	1~2mmの白色 1mm以下の黑色	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	
2	SD2	土	坪身	完形	10.9 11.2 4.7	丁寧なナデ	丁寧なナデ 削面痕 底部:ナデ	2mm以下の白色	良好	に近い黄褐	浅灰	
3	SD2	土	坪身	完形	13.2 4.0 5.4	上位:ミガキ 下位:ナデ	ヘラミガキ	精良	良好	暗	暗	口縁部に3か所、II も欠け痕
4	SD2	土	片口部	完形	19.4	8.8	ヘラミガキ 削痕	ミガキ	Seal以下:茶褐色 0.5mm以下:白色透明白光沢	良好	暗	に近い黄褐 に近い暗
5	SD2	土	裏	底部	8.2	上位:工具による横 方向の削痕 下位:斜め方向の工 具ナデ	工具ナデ 端部付箋	2~7mmの黒褐・灰灰色	良好	に近い黄褐	に近い黄褐	
6	SD2 SA4	土	壳	山脚~底部	26.1 10.1 28.5	上位:ナデ (山脚 (中段不規) 中~下位:ナデ 下位:ナデ 底部	上位:壁内面のナデ 中位:工具 (壁位 小切) 下位:ナデ 底部:ナデ 底部	3~5mmの深褐色 半透明 下位:ナデ 底部	良好	暗	SD2と接合	
7	SD2	土	壳	口縁~底部下	17.1	質方向のナデ	上位:質方向のナデ 中~下位:ナデ	3.5mm以下の灰褐色・茶褐色	良好	に近い暗 灰褐色	に近い黄褐	
8	SD2 SA4	土	裏	完形	19.5	上位:質方向のナデ 中~下位:斜め・質 方向のナデ	上~下位:質方向の ナデ 中位:斜め方向のナ デ 底部:スズ付箋	2~7mmの褐色	良好	別側面	別側面	
9	SD2 SA4	土	裏	口縁~ 調節下	23.3	上位:質方向のナデ 下位:工具によるナ デ	ナデ	2~7mmの黒褐・灰灰色	良好	暗	外壁:黒化らしい	
10	SD2	土	壳	口縁~ 底部	17.2 10.5 12.3	ミガキ	上位:ミガキ (壁位 不規) 下位:ヘラ削り (壁 位不規)	5mm以下の灰白色	良好	暗	暗	
11	SD2	灰	裏	口縁~ 底部	9.1	8.3 ナデ	上位:凹削ナデ 下位:ヘラ削り	1~2mmの灰白色	良好	灰	灰	
12	SD2	灰	裏	口縁~ 底部	11.5 11.4 12.3	同軸ナデ	同軸ナデ	1~2mmの灰・白色	良好	灰	灰	内外面ともに角擦痕

第13表 D区出土遺物観察表(2)

番号	出土場 遺構	種類	部位	重量(g)			調査番		地 土 (埋蔵材・埋入物)	造成 内 面	地 調 外 面	備考		
				口径	高径	高さ	内 面	外 面						
13	SD2	灰	ハサク	口縁～底部	12.4	14.8	刮削ナテ	刮削ナテ	2mm以下の灰白色粘 膜状な褐色粙	良好	灰白	灰	内外面ともに赤褐色 の引き裂き法へア 切り	
14	SA4	土	土	口縁～底部	18.5		上位:ナテ 中～下位:工具によるナテ	側面:刮削粙 中～下位:工具によるナテ	5mm以下の赤褐色;幾何に並い;硬;墨;灰 F1:赤褐色粙;透明白沢粙	良好	に並い;黄褐色 灰度	に並い;黄褐色 灰度		
16	SA4	ヒ	灰	口縁～底部	26.5		ナテ	ナテ	2～5mmの孔;灰褐色粙 1.5～2mmの褐色粙	良好	明確	滑		
17	SA4	ヒ	灰	口縁～底部			上位:側方に屈曲状 付属;中位:板状 ナテ;下位:斜め 方向のナテ	上位:側方のナテ 中位:板状付属 ナテ;下位:斜め 方向のナテ	2～8mmの暗褐色;灰褐色粙	良好	明確	滑		
18	SA4	土	土	口縁～底部			上位:側方のナテ 下位:ナテ	上位:側方のナテ 下位:斜め方向の強 いナテ	1.5～8mmの灰褐色粙	良好	に並い;黄褐色 F1:に並い	に並い;黄褐色		
19	SA4	土	灰	口縁～底部	13.9		側・斜め方向のヘラ ミガキ トロ:半位不規	側・斜め方向のヘラ ミガキ トロ:半位不規	2mm以下の赤褐色粙	良好	滑	滑		
20	SA4	土	灰	口縁	18.3		ナテ	側方のナテ	5mm以下に於て赤褐色粙; 2～8mmの暗褐色粙	良好	に並い;黄褐色	滑		
21	SA4	土	灰	口縁～底部	20.8	7.3	20.6	上位:彫目口 中～下位:黒度	上位:彫目口 中～下位:黒度 ナテ	2mm以下の白色粙; 4mm以下の赤褐色粙	良好	黄褐色 滑	滑	
22	SA4	土	灰	側面～底部		7.9	ナテ	ナテ 薄・スリット状	1.5～6mmの茶褐色;黑;白色粙	良好	明確	に並い;滑		
23	SA1	灰	灰	口縁～底部	18.6		上位:ナテ 中～下位:あて筋 (同心円)	上位:ナテ 中～下位:平行叩打 性;カキ付	滑	良好	灰	滑		
24	SA1	灰	灰	口縁～底部	11.5		側方のナテ	側方のナテ	1～4mmの灰白色粙	良好	灰	灰		
25	SA1	上	灰	口縁～底部	14.2		ナテ	ナテ	滑	良好	灰褐色	滑	内部:風化著しい	
26	SAS	土	灰	口縁～底部	27.1	8.8	24.6	上位:側方のナテ (半位不規) 下位:ナテ	ナテ	1～7mmの白・灰白・灰・橙・赤褐色 墨跡	良好	滑	滑	外観:風化気味 表面:孔隙:6% 内部:風化
27	SAS	灰	灰	口縁～底部	10.8	3.4	上位:凹輪ナテ 下位:ナテ	上位:凹輪ナテ 下位:ヘラ削り	1～5mmの白色粙	良好	灰	滑	内外面ともに赤色 顔料を施す	
28	SAS	灰	灰	口縁～底部	10.8	3.8	上位:凹輪ナテ 下位:ナテ	上位:凹輪ナテ 下位:ヘラ削り	2.5mm以下の白色粙	良好	灰	滑		
29	SAS	土	灰	口縁～底部	9.7		側・斜め方向のヘラ ミガキ	上位:指揮3段後 ミガキ 下位:斜め方向のヘ ラミガキ;スリット	1～3mmの赤褐色粙	良好	滑	滑		
30	SAB	灰	灰	側面～底部			上位:凹輪ナテ 下位:ナテ	上位:凹輪ナテ 下位:ヘラ削り	滑	良好	オリーブ灰	灰白		
31	SD1	灰	灰	口縁～底部	11.5	4.2	凹輪ナテ 下位:斜め方向のナ テ	上位:凹輪ナテ 下位:ヘラ削り	1～2mmの灰白色粙	良好	灰	灰		
32	SD1	土	灰	口縁～底部	11.6	6.1	ミガキ 黒度	上位:ミガキ 下位:ミガキ(半位 不規)	2mm以下の茶・淡褐色粙	良好	に並い;黄褐色 F1:に並い	に並い;黄褐色 F1:に並い	内部:風化著しい 部分的に赤色顔料 のあと	

第4節 E区の調査 (第46図)

1 調査の概要

調査面積は420m²である。北から南に傾斜する傾斜地に位置し、標高約9.0~10.5mを測る。

古墳時代の土壙墓1基、古代の竪穴住居跡2軒・土坑1基、時期不明の土坑3基・溝状遺構3条が確認されている。検出面はすべて第Ⅲ層の褐色砂質土層面である。住居に伴う主柱穴は確認されていない。

遺物は土師器(墨書き器5点を含む)、須恵器、刀子1点、土錐20点が出上している。

なお、土錐については第14表『山崎上ノ原第1遺跡出土土錐計測表』及び第56図『山崎上ノ原第2遺跡出土土錐実測図』を参照いただきたい。

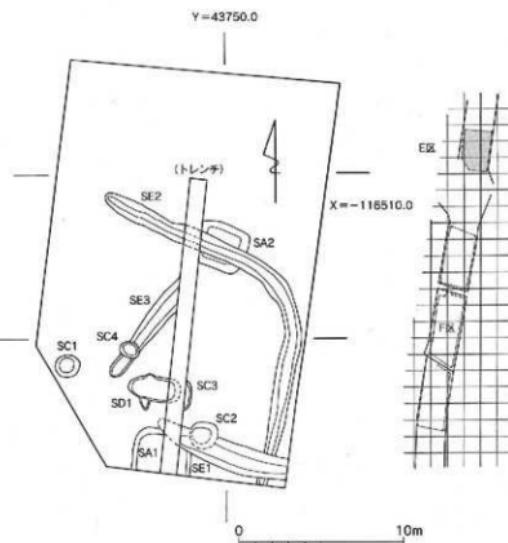
2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡(SA)

SA1 (第47図)

調査区の南端に位置し、南側は調査区外に延びる。さらに、北東部もSE1により幅約1mにわたり切られている。南北に約 $2 + \alpha$ m、東西は約3.7m、検出面からの深さ約40cmを測り、隅丸方形プランになるとと思われる。遺物は土師器を中心に約50点が検出面から床面の間で出土している。

【出土遺物】第50図 SA1 出土遺物実測図 1~7 (E区出土遺物観察表)



第46図 E区 遺構分布図(S = 1/300)

SA2 (第47図)

調査区のほぼ中央で検出され、南北に約 $2.8 + \alpha$ m、東西は約 $2.8 + \alpha$ m、検出面からの深さ約45~55cmを測り、隅丸方形プランになるとと思われる。住居のほぼ中央を東西に縱断する溝状遺構(SE2)により幅約90cm、深さ約30cmにわたって切られている。出土遺物は殆どが土師器で約40点が検出面から床面の間で出土している。

【出土遺物】第51図 SA2 出土遺物実測図 8~14 (E区出土遺物観察表)

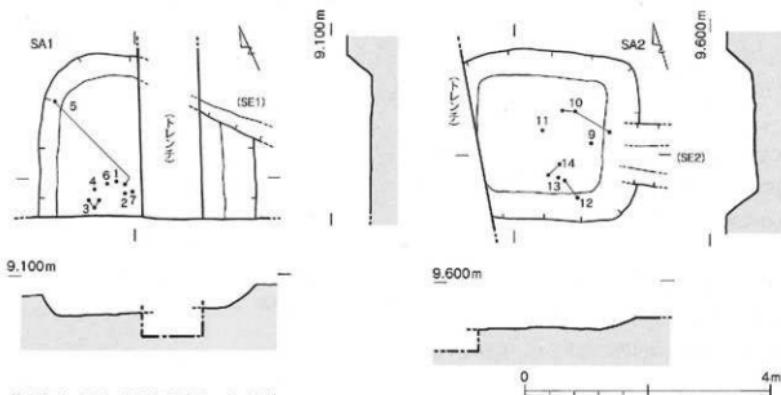
(2) 土壙墓(SD)

SD1 (第48図)

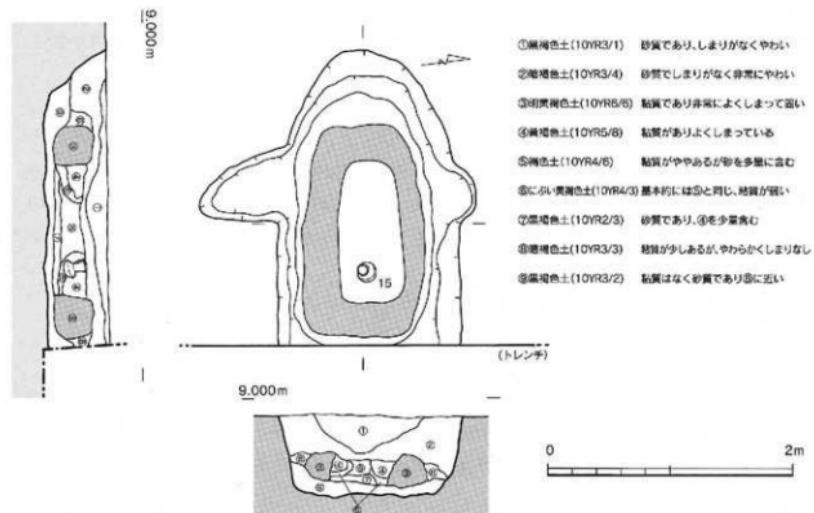
SA1の北側で検出した。平面プランは梢円形であり、長軸約 $2.4 + \alpha$ m、短軸約1.5m、検出面からの深さ約50cmを測る。長軸方向はN-80°-Wを指す。床面も梢円形(長径約2.1m、短径約1.2m)を

呈し、僅かに粘質土を混ぜた砂で平坦化した後、中央に約1.1m×約0.5mのスペースを残し、周辺を開こうように幅約20~30cm、厚さ約30cmの規模で砂を混ぜた黄褐色粘土を積み上げていた。さらに、積み上げられた黄褐色粘土の内外面は丁寧に成形がなされていた。構築時は、中に木棺を納めその上を粘土で被覆していたものと想定される。副葬品として、刀子1本、土師器の長頸壺1個が出土している。なお、内部の土を篠にかけたが、人骨、釘等は発見できなかった。

【出土遺物】長頸壺(15)刀子(16); 第52図 S D 1 及び S C 1 出土遺物実測図
15(E区出土遺物観察表) 16(第11表「山崎上ノ原第2遺跡出土金属製品計測表」)



第47図 SA1・2平面図(S=1/80)



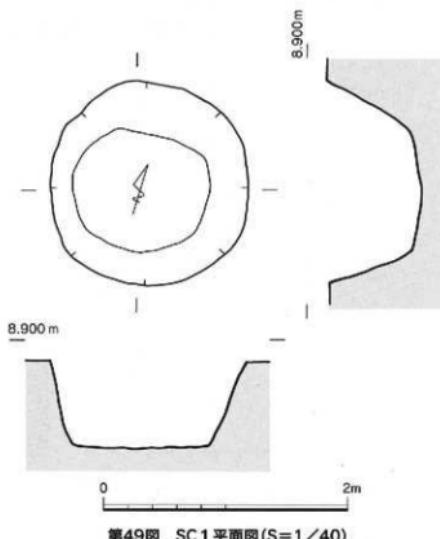
第48図 SD 1 平面図及び土層断面図(S=1/40)

(3) 土坑(SC)

SC 1 (第49図)

調査区西側で検出した。長軸約1.7m、短軸約1.6mの正円形プランで、検出面からの深さは約70cmを測る。長軸方向はN-10°-Eを指す。壁面は摺り鉢状に斜めに掘り込まれ、底面は中央部を僅かに凹ませている。出土遺物は、土師器(墨書き器2点を含む)が折り重なる様に約50点出土している。

【出土遺物】第52図 S D 1 及び S C 1 出土遺物実測図 第53図 S C 1 出土遺物実測図 17~19(E区出土遺物観察表)



SC 2 (第46図)

調査区南側に位置し、S E 1 により南側半分を切られており、規模は不明である。検出面からの深さは約50cmを測る。遺物は出土していない。

SC 3 (第46図)

S C 2 の北側1.3m付近で検出した。規模は不明であり、出土遺物はない。

SC 4 (第46図)

S D 1 の北西に1mに位置し、S E 3 を切っている。長軸約1.25m、短軸約1.0mの楕円形プランで、検出面からの深さは約10~20cmを測る。長軸方向はN-50°-Wを指す。遺物は確認されていない。

(4) 溝状遺構(SE)

SE 1 (第46図)

調査区南側中央から東へ直線的に走行しており、調査区ほぼ中央で集束している。幅約1.3~1.8m、検出面からの深さ約40~60cmを測る。溝は西から東へ緩やかに傾斜し、断面形態はU字状を呈している。埋土は5層に分類できる。出土遺物は、土師器の环数点であったが、いずれも流れ込みによるものと思われる。構築時期については不明である。

【出土遺物】第54図 S E 1・2 出土遺物実測図 20~22(E区出土遺物観察表)

SE 2 (第46図)

調査区西側から南側へ「コ」の字状に走行し、さらに調査区外に延びる。幅約75~100cm、検出面からの深さ約20~40cmを測る。溝の断面形態は箱形を呈し、北から南へ向かって緩やかに傾斜する。埋土は3層に分類できる。出土遺物については、S E 1 と同様に流れ込みによるものと思われる。構築時期については不明である。

【出土遺物】第54図 S E 1・2 出土遺物実測図 23(E区出土遺物観察表)

SE3(第46図)

調査区北西から南東方向へ走行する。溝の両端は集束しており、北側は走行不明である。幅は約0.9~1.3m、検出面からの深さは約10cmを測る。溝の断面形態はU字状を呈し、北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。埋土は2層に分類できる。遺物の出土はなく、構築時期については不明である。

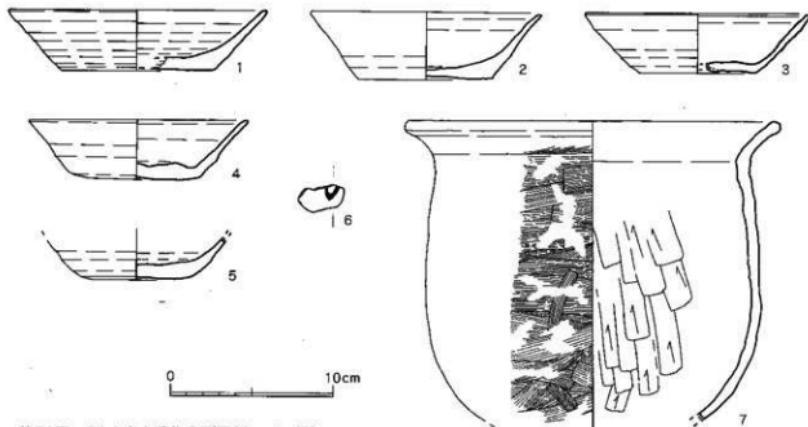
(4) 包含層

出土遺物は土師器の壺・壇・小型の羽釜、布痕土器、墨書き土器等である。詳細については、第55図『包含層出土遺物実測図』及び第16表『E区出土遺物観察表』の24~36を参照いただきたい。

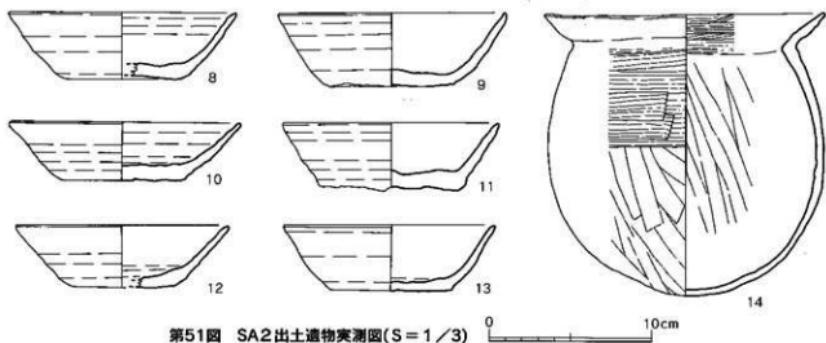
第14表 山崎上ノ原第2遺跡出土土錐計測表

遺物番号	区	出土地(遺構)	最大長	最大幅(徑)	最小径	最大厚	穿孔径	重量
A区-105	A区	S A 4	2.7	1.6	1.5	—	0.3	6.3
1	E区	S E 2	5.9	2.7	1.1	—	0.8	29.2
2	E区	表探	5.7	2.5	1.3	—	0.8	26.5
3	E区	表探	5.2	2.7	1.3	—	0.8	31.1
4	E区	表探	6.6	2.4	1.4	—	0.8	24.0
5	E区	表探	5.3	2.2	1.1	—	0.8	23.6
6	E区	表探	(5.3)	2.0	0.9	—	0.5	10.9
7	E区	S E 2	5.1	2.1	1.0	—	0.7	19.5
8	E区	表探	5.2	2.7	1.3	—	0.8	25.3
9	E区	表探	(4.5)	2.3	1.3	—	0.5	20.0
10	E区	表探	5.4	2.0	1.4	—	0.8	12.1
11	E区	S A 1	4.0	1.9	1.3	—	0.9	10.6
12	E区	表探	(3.9)	2.1	1.0	—	0.5	16.4
13	E区	S A 1	3.1	2.6	1.2	—	0.7	15.7
14	E区	表探	8.6	5.8	—	3.3	1.1	149.9
15	E区	表探	8.8	5.5	—	2.4	1.0	139.4
16	E区	表探	(8.2)	(5.4)	—	2.7	1.2	144.7
17	E区	表探	7.4	5.2	—	1.9	1.2	77.8
18	E区	表探	(6.9)	(5.2)	—	(2.0)	0.8	76.3
19	E区	表探	(5.9)	4.9	—	1.9	1.0	63.4
20	E区	表探	(7.0)	4.6	—	2.3	1.0	76.6

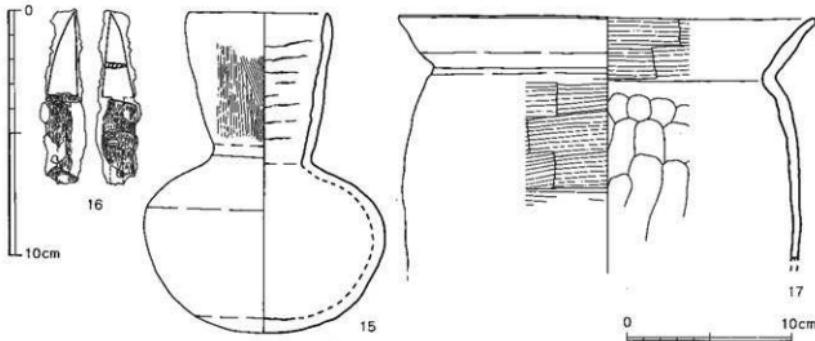
(単位:cm·g)



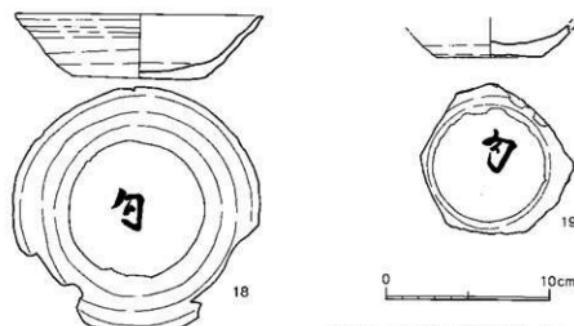
第50図 SA1出土遺物実測図($S = 1/3$)



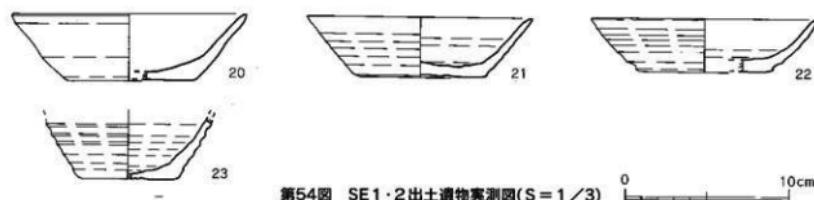
第51図 SA2出土遺物実測図($S = 1/3$)



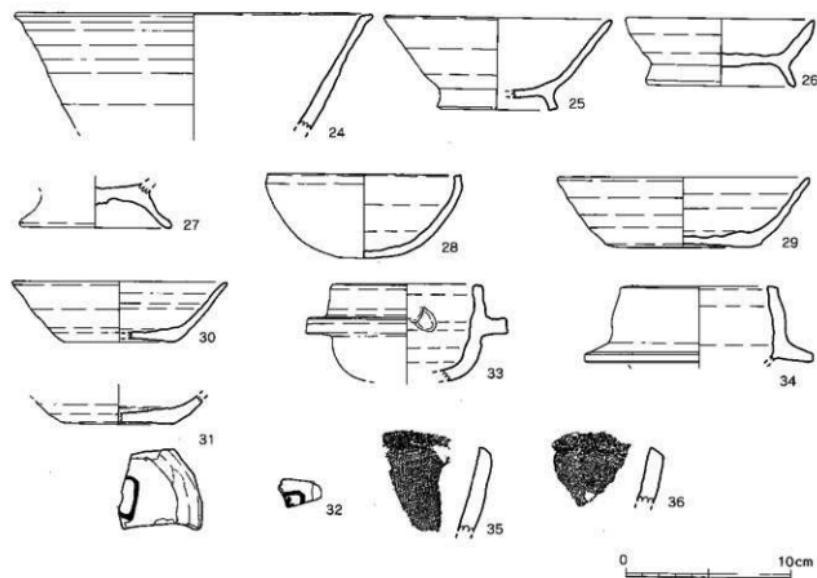
第52図 SD1及びSC1出土遺物実測図(15・17 $S = 1/3$ 16 $S = 1/2$)



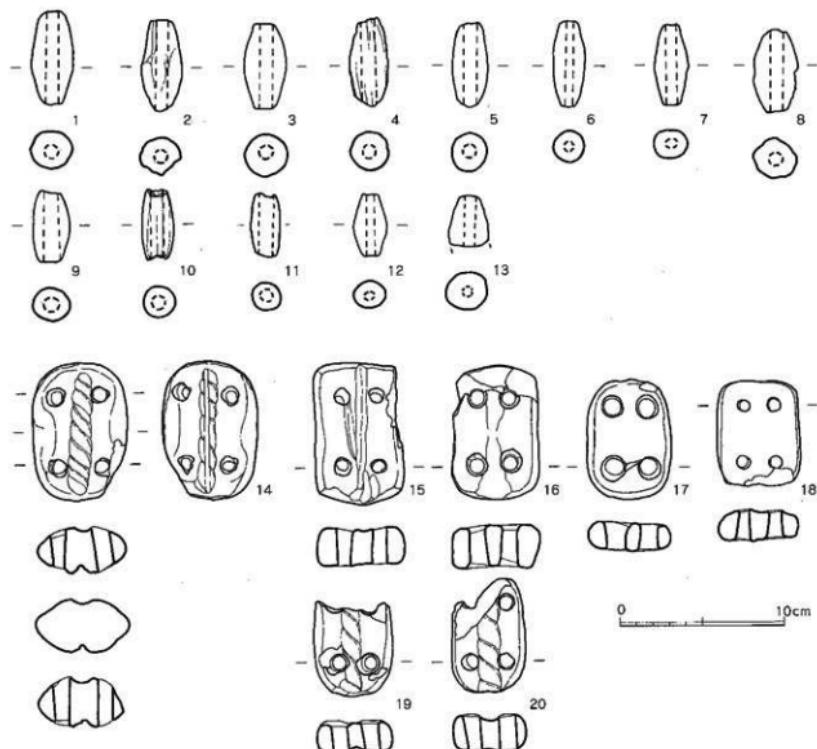
第53図 SC1 出土遺物実測図(S=1/3)



第54図 SE1・2 出土遺物実測図(S=1/3)



第55図 包含層出土遺物実測図(S=1/3)



第56図 山崎上ノ原第2遺跡出土土器実測図(S=1/3)

第15表 E区出土遺物観察表(1)

番号	出土地 遺物	種類	器種	部位	法量(mm) 口径 高さ	内面	外面	胎土(泥和材・混入物)	焼成		色調 内面 外面	備考	
									内面	外面			
1	SA1	上	杯	口縁～底盤	15.8 9.4 3.7	凹板ナメ	凹板ナメ	1mm以下の褐色鉄	良好	滑	滑	切り墨し技術:ヘラ切り	
2	SA1	上	杯	口縁～底盤	13.5 8.1 4.2	凹板ナメ 漆生地	凹板ナメ	3.5mm以下の朱色鉄 2mm以下の褐色鉄 1mm以下の白色鉄	良好	被食	灰白	切り墨し技術:ヘラ切り	
3	SA1	下	杯	口縁～底盤	13.6 7.2 3.6	凹板ナメ	凹板ナメ	褐色	良好	に赤い滑	に赤い滑	切り墨し技術:ヘラ切り	
4	SA1	下	杯	口縁～底盤	13.3 7.8 3.6	凹板ナメ	凹板ナメ	褐色な朱・赤色・白色を透明白光沢	良好	に赤い滑	に赤い滑	切り墨し技術:ヘラ切り	
5	SA1	土	杯	体部～底盤	6.8	凹板ナメ	凹板ナメ	褐色な透明光沢	良好	滑	滑	切り墨し技術:ヘラ切り	
6	SA1	土	杯	口縁部付近			—	—	微暗な朱・褐色・半透明・黑色光沢	良好	に赤い滑	に赤い滑	墨書きの一部
7	SA1	上	瓶	口縁～瓶底下	22.9	上段:ナメ 中段:ヘラ削り(下 一上)	上段:内面のナメ 中段:下部:漆毛打 スズ付型	微暗な朱・半透明・褐色光沢 See以下:赤・灰・褐色光沢	良好	滑	滑		
8	SA2	上	杯	口縁～底盤	14.0 7.5 4.1	凹板ナメ	凹板ナメ	微暗な朱・黑・褐色鉄	良好	滑	滑	切り墨し技術:ヘラ切り	
9	SA2	土	杯	口縁～底盤	13.9 7.5 4.3	凹板ナメ	凹板ナメ	1mm以下の灰鉄・褐色鉄	良好	に赤い滑 灰青	に赤い滑 灰青	切り墨し技術:ヘラ切り	

第16表 E区出土遺物観察表(2)

番号	出土地 遺構	種類	基盤	法量(mm)			調査番 内面	外面	基土(漆和材・塗入物)	構成	色調		備考
				口径	高径	高さ					内面	外面	
10	SA2	上 杯	口縁～底部	14.1	7.6	3.6	回転ナテ	回転ナテ	黒艶な灰・褐色板	良好	板	板	切り離し技法:ヘラ 切り
11	SA2	土 杯	口縁～底部	13.3	8.9	4.1	回転ナテ	回転ナテ	4mm以下の漆荷・灰・褐色板	良好	板	切削面	切り離し技法:ヘラ 切り
12	SA2	土 杯	口縁～底部	13.0	6.4	3.9	回転ナテ	回転ナテ	1mm以下の漆荷・墨色板	良好	板 に赤い板	板 に赤い板	切り離し技法:ヘラ 切り
13	SA2	土 杯	口縁～底部	13.0	7.5	4.0	回転ナテ	回転ナテ	黒艶な半透明光沢板・灰・灰白・褐色板	良好	板	板	切り離し技法:ヘラ 切り
14	SA2	土 杯	口縁～底部	17.3		17.4	上位:横方向のナテ 下位:ナテ	上位:横方向の刷毛 下位:Sスクリュー	5mm以下の灰・灰白色板 黒艶な黒色光沢・透明光沢板	良好	板	板	
15	SD1	土 杯	口縁～底部	8.5		19.7	ナテ 一落きガキ	ナテ 一部墨度	2mm以下の灰・黑色板 3mm以下の漆黒色板	良好	切削面	漆 切削面	内面墨化(?)漆 外面墨化漆を施す
17	SC1	上 貝	口縁～脚部	26.3			上位:横方向の刷毛 下位:ナテ	トロ・トロ 下位:横方向の刷毛	2~4cmの茶褐色板 2mmの白色板	良好	に赤い板	に赤い板	
18	SC1	土 杯	口縁～底部	15.1	8.3	4.0	ナテ	回転ナテ	1.5mm以下の灰白・明赤板 1mm以下の無色透明光沢・黒色光沢板・良好 灰(?)・赤・墨色板	良好	板	板	切り離し技法:ヘラ 切り サク(?)
19	SC1	土 杯	底部			6.9	回転ナテ	回転ナテ	1mm程の黑色板 1mm以下の灰白・明赤板・黒色板 透明光沢・灰・白・褐色板	良好	板	板 に赤い板	墨書「匂」の一部
20	SE1	土 杯	口縁～底部	14.4	8.2	4.1	回転ナテ	回転ナテ	4mm以下の茶褐・灰色板	良好	板	板	切り離し技法:ヘラ 切り
21	SRI	土 杯	口縁～底部	13.7	8.0	3.7	ナテ	ナテ	3mm以下の褐色板 2mm以下の灰・白・褐色板	良好	板 に赤い板	板	切り離し技法:ヘラ 切り
22	SRI	土 杯	口縁～底部	13.9	8.4	3.3	ナテ 一部墨度	ナテ 全体的に墨	黒艶な灰・灰白色板	良好	板 切削面	漆 切削面	切り離し技法:ヘラ 切り
23	SE2	土 杯	脚部			6.4	横方向のナテ	横方向のナテ	1mm以下の漆黒色板	良好	に赤い板	に赤い板	切り離し技法:ヘラ 切り
24	台舟席	土 鉢	口縁～脚部上	22.0			回転ナテ	回転ナテ	4mm以下の黒色板 3mm以下の漆黒色板	良好	吹葉	吹葉	
25	台舟席	土 鉢	口縁～付近 脚部	14.0	7.4	5.6	回転ナテ	回転ナテ	1.5mm以下の灰・黑色板 1mm以下の漆荷・墨・漆黒色板	良好	漆 切削面	漆 切削面	切り離し技法:ヘラ 切り
26	台舟席	土 鉢	口縁～付近 脚部	11.4	9.2		ナテ	ナテ	3mm以下の灰・漆荷・墨・漆黒色板 1.5mm以下の漆荷・墨・白・褐色板	良好	板	板	切り離し技法:ヘラ 切り
27	台舟席	土 鉢	脚部			9.3	ナテ	回転ナテ	3mm以下の灰・漆荷・墨・漆黒色板 2mm以下の漆黒色板	良好	に赤い板	に赤い板	切り離し技法:ヘラ 切り
28	台舟席	土 鉢	口縁～脚部	11.8		5.2	ト位:丁寧なナテ ト位:ナテ?	(筆者不明)	1mm位の白・灰・褐色板 1mm以下の中濃・墨・白・褐色板	良好	墨 に赤い板	墨 切削面	
29	台舟席	土 杯	口縁～底部	15.5	9.6	3.6	横方向のナテ	横方向のナテ	1mm以下の漆荷・墨・漆黒色板	良好	板	板	
30	台舟席	土 杯	口縁～底部	13.2	7.0	3.6	横方向のナテ	横方向のナテ	黒艶な灰・灰色板	良好	に赤い板	板	
31	台舟席	土 杯	底部			6.8	丁寧なナテ	ナテ	1mm以下の灰・白・明赤褐色板 黒艶な墨・白・褐色板	良好	板	板	
32	台舟席	土 杯	口縁 付近				回転ナテ	回転ナテ	黒艶な灰白・に赤い板・褐色板・無色透明光沢板	良好	板	板	墨書「匂」の一部
33	台舟席	土 刀型	口縁～病部	9.4	4.9	5.9	横方向のナテ	横方向のナテ	黒艶な灰・褐色板	良好	切削面	切削面	
34	台舟席	土 瓶	口縁～脚部			9.6	回転ナテの後	ナテ	横方向のナテ	良好	に赤い板	に赤い板	
35	台舟席	土 鉢	口縁～脚部				手白痕	ナテ	5mm以下の褐色板 黒艶な灰白・白色板	良好	に赤い板	に赤い板	市販土器
36	台舟席	土 鉢	口縁～脚部				手白痕	ナテ	8mm以下の褐色板 黒艶な灰白・白色板	良好	板	板	市販土器

第5節 まとめ

山崎上ノ原第2遺跡は日向灘から内陸へ約1.4km、標高9~12mの砂丘上に立地している。宮崎市の海岸付近には日向灘に沿って4列の砂丘列(海岸から内陸へ第1~第4砂丘)が走行している。これらの砂丘列は縄文時代早期の海進現象以来の海退現象と大淀川の流路変化に伴う海岸の堆積作用によって形成されたものと考えられ、本遺跡は第2砂丘上に位置している。この砂丘列には前述した石神遺跡・猿野遺跡が所在するほか、いくつかの古墳も確認されている。本遺跡の隣接地にも2基の円墳が存在し、北から「橿5号墳」・「橿6号墳」と呼称されている。

今回の山崎上ノ原第2遺跡(平成13年度実施 第1次調査)の調査では、古墳時代の堅穴住居跡16軒・土壙墓3基・古代の堅穴住居跡2軒・土坑1基・中世の土壙墓4基が検出されている。古墳時代の堅穴住居跡についてはA区4軒、C区3軒、D区9軒が確認されている。A区南側に接するB区(平成14年度実施 第3次調査)においても古墳時代の堅穴住居跡が9軒検出されていることから、D区から北側に延びる微高地には大規模な集落が形成されていたものと考えられる。また、F区から南側に位置する山崎下ノ原第1遺跡では古墳(橿5・6号墳の周濠の一部・滅失古墳3基)及び土壙墓(5基)等が検出されている。本調査によってE区とF区の間は谷地形であることが確認されており、自然地形を利用して北側は生活域、南側は墓域としていたと考えられる。

以下、調査で確認された遺構と遺物について各時代毎にまとめてみたい。

【古墳時代】

A区の遺構・遺物

SA1 遺構内からは土師器の壺・瓶・高杯、壺(身・蓋)、須恵器の甕・ハソウ・壺(身・蓋)、金属製品、石製品等が出土している。1~30は甕である。28~30は底部片で平底を呈し、裾部が広がり木葉痕がある。31~37はいずれもつづぬけタイプ把手無大型甕である。31は鉢型を呈し、口縁部が内溝しており口唇部はややシャープである。36は31と同タイプと思われる。32は鉢型を呈しており、底部から口縁に向かってやや丸みを帯びながら立ち上がり、底部の裾部が広がる。33・37は孔部内面が「く」の字状を呈している。35は胴部から口縁部にかけて真っ直ぐに立ち上がる鉢形であり、口縁端部が外反し、底部の裾部が広がる。38~46は高杯である。47~58は模倣杯であり、47~49、52~54には内外器面に赤色顔料が施されている。59~65は須恵器の壺(身・蓋)である。59は天井部が平坦で上面はヘラ切り後、未調整である。II形式5段階(TK209)頃で6世紀末から7世紀前半に比定される。62は立ち上がりが内傾し、口縁端部に内傾する明瞭な段が見受けられる。II形式1段階(MT15)、6世紀前半に比定される。63は底部はヘラ切り後、未調整である。II形式4段階(TK43)頃で、6世紀後半に比定される。64は底部はヘラ切り後、未調整である。立ち上がり部に消滅化傾向がみられる。II形式5段階(TK209)頃で、6世紀末から7世紀前半に比定される。65は小型であり、立ち上がり低く強く内傾している。II形式5段階(TK209)~6段階(TK217)、6世紀後半~7世紀前半と思われる。67はハソウであり、II形式1段階(MT15)頃で6世紀末から7世紀前半頃に比定されると思われる。70は方頭縁の鎌身部で6世紀中~7世紀前半頃と思われる。遺構の年代は出土遺物より6世紀から7世紀と考えられる。

また、遺構の性格付けとして、遺物の出土状況おいて①管状・ガラス小玉・滑石製小玉・勾玉の滑石

製模造品がまとめて出土していること。②遺構内と遺構外の特定の場所での土器片の接合関係が多々みられること(第6・7図)。③鉄滓及び粒状滓・鍛造剥片多层次に確認されたこと。の3点が挙げられる。①・②の事実より住居廃絶時に何らかの祭祀儀礼行為が行われていたと思われる。また③の事実は粒状滓及び鍛造剥片が鍛冶段階を証明する有力な遺物であることから、鍛冶関連施設の存在が考えられたが、調査区内では炉跡及び焼土何れも確認できなかった。しかしながら、周辺で鍛冶が行われていたことは間違いないであろう。

SA2 遺構内からは土師器の壺・甌・高坏、坏(身・蓋)、須恵器の坏(身・蓋)等が出土している。83は須恵器の坏蓋であり、II形式5段階(T K209)、6世紀末から7世紀前半に比定される。84は須恵器の坏身であり、口径11.2cmと小径で、口縁端部に内傾する明瞭な段が見受けられる。I形式5段階(T K47)、6世紀初頭である。85は須恵器の坏身であり、口径11.3cmと小径であり、立ち上がり部が消滅化傾向である。II形式6段階(T K217)頃で、7世紀前半と思われる。92は多孔タイプ甌の底部片である。遺構の年代としてはSA1と同じように6世紀から7世紀と考えられる。

SA3 遺構内からは土師器の壺・甌・高坏等が出土している。98はつつぬけタイプ把手無大型甌である。

SA4 遺構内からは土師器の壺、鉢、須恵器の坏身、土錐等が出土している。102は口径12.1cmと小径であり、器高も3cmと低く、立ち上がり部も短く内傾している。105は土錐であり穿孔が2つみられる。

SA1~3の年代観は切り合い関係より古い順に3→2→1であるが、本遺跡が砂丘上に立地していること、調査中にも遺構の壁面が崩壊することが度々あったこと、などから推察して、当時の住居の耐用期間はかなり短かったと思われ、頻繁に建て替えが行なわれていたものと考えられる。

包含層 包含層からは土師器の壺・坏(身・蓋)、ミニチュア土器、須恵器の壺・坏(身・蓋)等が出土している。112は須恵器の坏蓋であり、天井端部に沈線が巡り、口縁端部内面に段を有する。II形式2段階(T K10)、6世紀前半である。115は須恵器の坏身である。I形式5段階(T K47)、6世紀初頭である。123~127は壺の底部片で平底を呈し、裾部が広がり木葉痕がのこる。

C区の遺構・遺物

SA1 遺構内からは土師器の壺・坏身等が出土している。

SA2 遺構内からは土師器の坏身・高坏等が出土している。8は模倣坏である。

SA3 遺構内からは土師器の壺・坏等が出土している。9は土師器の壺であり、遺構内のほぼ中央に正立した状態で埋められていた。13は土師器の皿で底部の切り離し技法はヘラ切りによるものである。

SA1~3は出土遺物等から構築時期は古墳時代と思われる。

D区の遺構・遺物

SA1 遺構内より土師器の坏、須恵器の壺・壺等が出土している。

SA2・3 出土遺物はない。

SA4 遺構内より土師器の壺・瓶・壺、刀子等が出土している。15は刀子(第11表)で14の中に納められた状態で出土した。刃闇がなく刃と茎が一体化している特異なタイプである。22はつつぬけタイプ把手無大型壺である。

SA5 遺構内より土師器の壺、須恵器の壺身等が出土している。26はつつぬけタイプ把手無大型壺である。27・28はいずれも須恵器の壺身であり、口径11.3cmと小径で、立ち上がり部が消滅化傾向である。II形式-6段階(TK217)、7世紀前半と思われる。

SA6~8 出土遺物はない。

SA9 遺構内より須恵器の壺等が出土している。切り合い関係から遺構の年代は7世紀前半以前と思われる。

SD1 SA9の床面と西壁をきるかたちで掘りこまれており、遺構内からは土師器の壺、須恵器の壺身、刀子1点が出土している。31は須恵器の壺身であり、口径11.3cmと小径で、立ち上がり部が消滅化傾向である。II形式-6段階(TK217)、7世紀前半と思われる。33の刀子(第11表)は副葬品であろう。

SD2 遺構内からは土師器の壺・高壺・壺、須恵器の壺蓋・壺・高壺・ハソウ等が出土している。1は須恵器の壺蓋であり、II形式-5段階(TK209)、6世紀末から7世紀前半と思われる。13は須恵器のハソウでII形式-6段階(TK217)、7世紀前半と思われる。

本遺構はSA4の南東隅で確認されており、現存で長軸約1.7m、短軸約0.6m、深さ約20cmの楕円形プランである。床面を砂で平らにし、その上に主軸から左右10cm程空け土師器の壺の口縁部と胸部のみを使い、外器面を上にした状態で約1mの平行に並べられた土器列を形成しており、一部の土器片についてはSA4内床面で出土した土器片との接合関係(第39図)が確認された。また、北側には須恵器の壺蓋(1)と土師器の杯身(2)が伏せて置かれ、両脇は土師器の片口鉢(4)の一部を使って押さえがしてある。埋葬者の頭を乗せる「枕」として用いられたのではないかと推察される。さらに、枕の上に伏せて置かれている土師器の壺身(3)とハソウ(13)は、当初は頭の横に置かれていたが、横転したものと思われる。足元にあたる南側には、副葬品として土師器の高壺(10)と須恵器の高壺(12)と壺(11)が置かれていた。遺構の規模から成人が埋葬されていたと推測される。このような古墳時代の埋葬事例は県内では初例であろう。

なお、この土壙墓の土壤については自然科学分析を実施している。土器床内の床面でリン酸・カルシウム含量が比較的高い値が観測され、生物遺体が存在していた可能性が考えられたが、地表面から比較的浅いことや、遺構埋土の上位層についての分析が行われていないことから、後世の農耕に伴う施肥などの影響が否定できないという結果であった。

SD2とSA4との関係については、①竪穴住居(SA4)の埋没後、土壙墓(SD2)が掘り込まれた可能性。②竪穴住居(SA4)の廃絶時に土壙墓(SD2)を掘り込んだ可能性。③竪穴住居(SA4)は土壙墓(SD2)の埋葬儀式・儀礼に伴う遺構である可能性。以上3点が考えられる。

上記に述べた両遺構内出土遺物の接合関係が確認されたことより①の可能性はない。②ないし③については、SA4内から煮炊き具である壺(外器面にススの付着がみられる)及び壺が床面直上から出土していることから②の可能性が高いと考えられる。しかし、③の可能性もまったく否定はできない。今回の調査では他に事例がなく結論を導き出すには至らなかったが、今後、同様の事例が増えることを期待したい。

E区の遺構・遺物

SD 1 長軸約 $2.4 + \alpha$ m、短軸約1.5m、検出面からの深さ約50cmを測り、橢円形プランを呈する。底面を僅かに粘質土を混ぜた砂で平坦化した後、中央にスペースを空けた状態で周辺を砂を混ぜた黄褐色粘土で囲んでいた。構築時には、中に木棺を納めその上は粘土で被覆されていたのであろう。この粘土は山崎下ノ原第1遺跡G・H区に隣接する雄5・6号墳周縁内でも確認しており、本遺跡周辺が砂丘地形であることから他所で採取され搬入されたものであろう。遺構内からは、土師器の長頸壺と刀子1点が出上している。15は外器面に赤色顔料が塗布されていた。16は刀子(第11表)であり、胸部あたりから出土しており副葬品として埋納されたものであろう。

【古代】

遺構としてはE区で堅穴住居跡2軒(S A 1・2)、土坑1基(SC 1)が確認されている。出土遺物は、土師器の甕・壺・坏・塊・鉢・墨書き土器・布痕土器等である。

E区の遺構・遺物

SA 1 遺構内からの出土遺物としては土師器の甕・坏・墨書き土器等である。1~5は坏であり、底部の切り離し技法はすべてヘラ切りによるものである。2~4は口径13.3~13.6cm、底径7.2~8.1cm、器高3.6~4.2cmの範疇に収まる。6は墨書き土器であり、「匂」の一部と思われる墨書きが施されている。7は甕であり、外器面にススの付着が認められ、内器面には上方向へのヘラ削り痕跡を明瞭にのこす。遺構年代は不詳である。

SA 2 遺構内からの出土遺物としては土師器の甕・坏等である。8~13は坏であり、底部の切り離し技法はすべてヘラ切りによるものであり、12は底部の立ち上がり部をヘラ削りによって仕上げられている。8・9・11・13は口径13.0~14.0cm、底径7.5~8.9cm、器高4.0~4.3cmの範疇に収まる。14は甕であり、外器面にススの付着が認められ、内器面には上方向へのヘラ削りの痕跡を明瞭にのこす。遺構年代は不詳である。

SC 1 遺構内からの出土遺物としては土師器の甕・坏(墨書き土器)等である。17は甕であり、外器面にススの付着が認められ、内器面にはヘラ削りの痕跡をのこす。18・19は墨書き土器であり、いずれも坏の底部外面に「匂」の墨書きが施されている。遺構年代は不詳である。

SE 1 遺構内からの主な出土遺物に土師器の坏があるが、これは流れ込みによるものと思われるため、構築時期については不明である。

SE 2 遺構内からの主な出土遺物に土師器の坏があるが、SE 1と同様に流れ込みによるものと思われ、構築時期については不明である。

包含層 包含層内からは、土師器の鉢・坏・塊・羽釜、墨書き土器・布痕土器等が出土している。25・27は高台付塊であり、底部の切り離し技法はヘラ切りによるものである。26は高台付坏であり器高が低いのが特徴である。33・34は羽釜であるがいずれも極小であり実用品とは考えにくい。31・32は墨書き土器であり、31は坏の底部外面に墨書きが施されており、「匂」の一部と思われる。32も同様に「匂」の一部と思われる墨書きが施されている。35・36は布痕土器であり、Ⅲd類(?)に属するものと思われる。

【中世】

遺構としてはC区で土壙墓4基(SD 1～4)が確認されている。出土遺物は洪武通宝、玉である。

C区の遺構・遺物

SD1 遺構内より頭蓋骨と足の骨の一部、洪武通宝6枚(第6表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD2 遺構内より玉1点(第8表・第30図)と洪武通宝7枚(第6表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD3 遺構内より人間の歯数本と洪武通宝5枚(第6表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD4 人骨の一部と洪武通宝6～8枚(第6表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD 1～4については遺構内より出土の洪武通宝は何れも同規格であることから、同時期に構築されたものと考える。

〈参考文献〉

- 大阪府教育委員会「陶邑」I～IV 1976・1977・1978・1979
- 宮崎県宮崎市教育委員会「浄土江遺跡」宮崎市文化財報告書第6集 1981
- 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集」1985
- 保育社「日本の古代遺跡」25 宮崎県 1985
- 宮崎県新富町教育委員会「上園遺跡F地区・瀬水第2遺跡」1995
- 宮崎県宮崎市教育委員会「猿野遺跡」宮崎市文化財報告書第23集 1996
- 九州歴史資料館 研究論集21「製塙土器からみた律令期集落の様相」九州歴史資料館 1996
- 宮崎県教育委員会「祇園原地区遺跡」宮崎県教育委員会 1996
- 宮崎県史「通史編 原始・古代Ⅰ」1997
- 雄山閣「古墳時代の研究 10地域の古墳! 西日本」1998
- 雄山閣「古墳時代の研究 6土師器と須恵器」1998
- 宮崎県宮崎市教育委員会「東宮遺跡」宮崎市文化財報告書第39集 1999
- 鹿児島県知覧町教育委員会「摩地松山製鉄遺跡」鹿児島県知覧町埋蔵文化財報告書第9集 2000
- 松井和幸「日本古代の鉄文化」雄山閣 2001

第Ⅲ章 山崎下ノ原第1遺跡の調査

第1節 調査の概要

前述したようにF～I区は山崎下ノ原第1遺跡と呼称する。本遺跡は宮崎市山崎町大字下ノ原に所在し、隣接して橿古墳群下原地区の円墳(橿5・6号墳)の2基が存在している。古墳時代になると生目古墳群やド北方古墳群といった台地上に築造された古墳が一般的であるのに対し、橿古墳群は最も海岸線に近い平野部に下りてきた古墳群として注目されている。調査は都合上、F～I区に区切って実施したが、位置関係や築造時期などが重要と考え、一括して山崎下ノ原第1遺跡として報告する。そのため、今回調査で確認できた構造は北から構造番号をつけ、滅失古墳についても北から山崎下ノ原第1遺跡第1号墳、第2号墳、第3号墳とした。(図57・58参照)

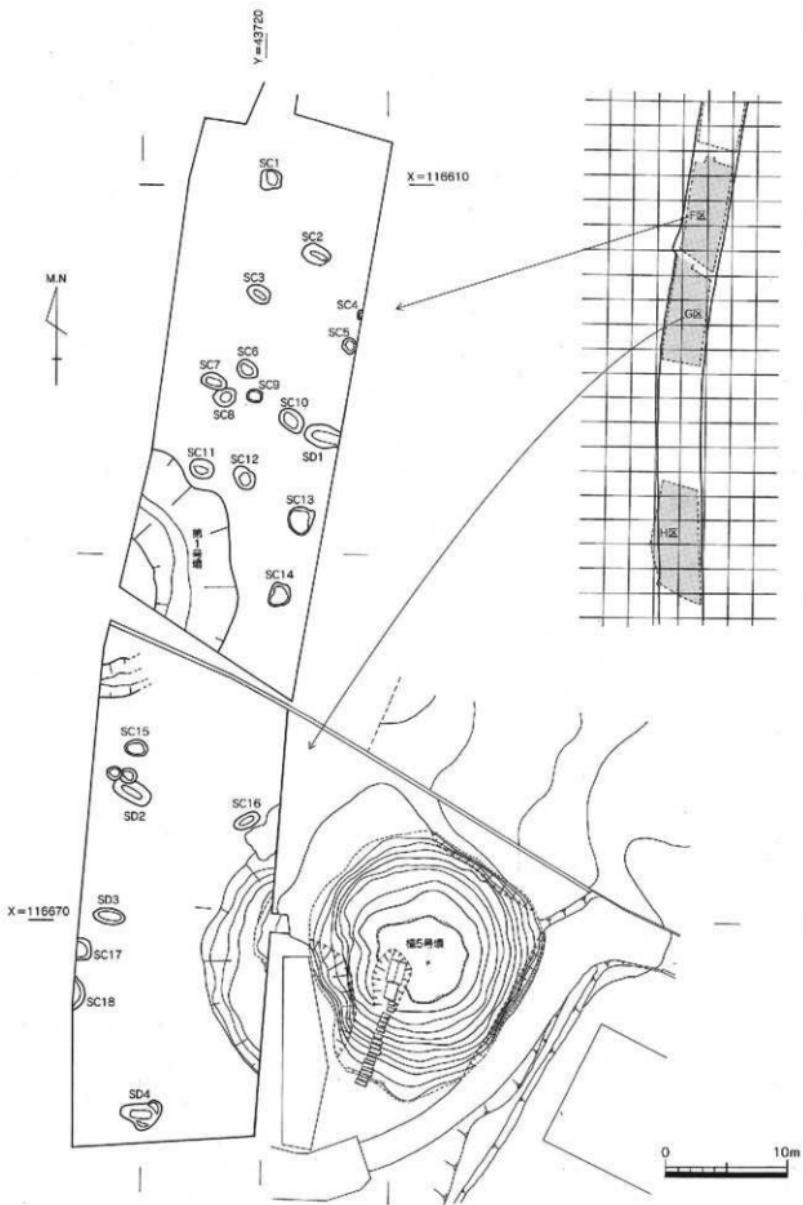
調査の結果、橿5・6号墳の周濠の一部、滅失古墳の周濠(3基)、土壙墓(5基)、馬埋葬土坑(6基)を確認することができた。出土遺物は土師器、須恵器、鐵鏃、大刀、馬具、銅鏡などが出土している。住居址などの居住空間が確認できなかったことからいわゆる墓域と考えられる。本遺跡の立地条件や墓域内での位置関係、殉葬馬の観点からも好例な遺跡である。

第2節 遺構と遺物

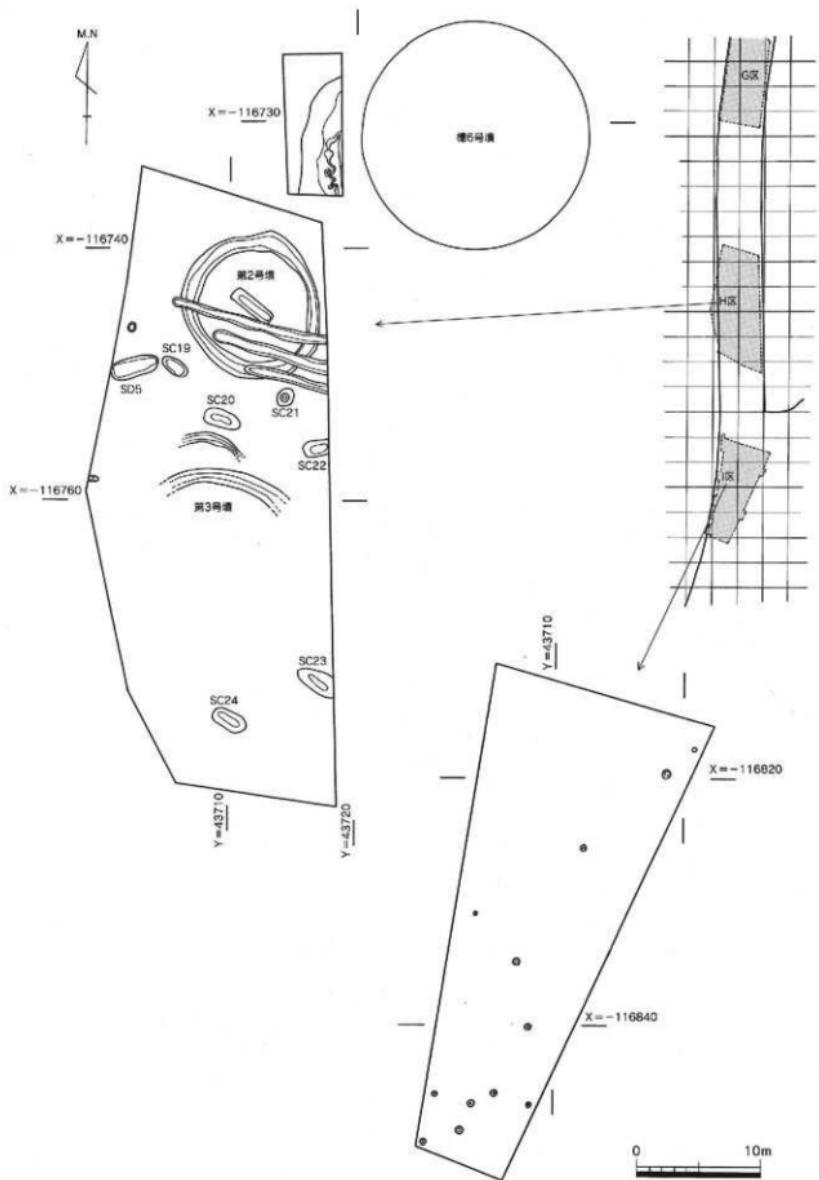
1 周濠の調査

■ 橿5号墳周濠 (第59～60図)

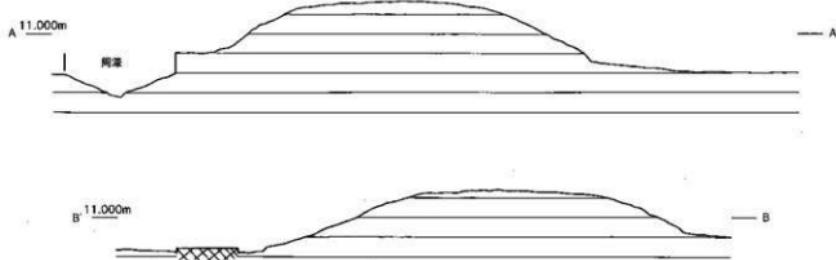
周濠の一部分のみが調査対象となり、調査を実施したが出土遺物ではなく築造時期など詳細は不明である。そのため橿5号墳の地主である井野範男氏の許可を得て墳丘測量を実施した。墳丘測量と調査で確認できた周濠から墳丘の復元を試みると直徑が約23m、周濠を含めた直徑は約35m、周濠の幅は約6mと推測する円墳と考えられる。調査により周濠の幅の約5mは確認できたが、墳丘側は調査区外ということもあり確認できず、復元から考えるとあと1mは墳丘側ということになる。深さは1.14mと確認できたが、周濠を検出できたところから上層は攪乱を受けていた。周濠の周間に存在する土壙墓が現地表面から約0.6mのところで遺構が検出でき、SD2の粘土が検出面で見えていたこと、その検出面からさらに約0.8m下がったところで周濠を確認することができた。これらのことなどから考えると周濠の深さは確認できた深さよりも1～2mほど深くなり、周濠の深さは2～3mになると推測する。周濠の底から墳丘頂までの高さは約4.5mとなる。これほどの墳丘を築くのに周濠や周囲の砂ではすぐに崩落しないのか、なぜ墳丘を築けたのかなどが疑問であったが、調査が進むにつれ解明された。周濠の墳丘側からは厚さが約0.4mで乾燥すると非常にしまり、硬くなる明黄褐色粘土が周濠の墳丘側に流れ落ちた様子ではなく、墳丘側にきちんと貼り付けているのが確認できた。そして墳丘の西側の一部が崩落しているところを観察してみると乾燥して硬くなり白くなっていたが、同じ明黄褐色粘土が存在することが確認できた。墳丘は調査範囲外であり断定はできないが、これらのことから考えると砂丘上という特異な立地に墳丘を築くことができ、今日までなぜ崩落しないのかは墳丘を明黄褐色粘土で固めながら墳丘を築き、墳丘全体を被覆していたからと考え、周濠の外側の立ち上がりが緩やかになっているのは粘土を貼りつけていないために埋没と同時に崩落が進んだから緩やかになっていると推測する。



第57図 山崎下ノ原第1遺跡遺構分布図 I (S = 1/400)



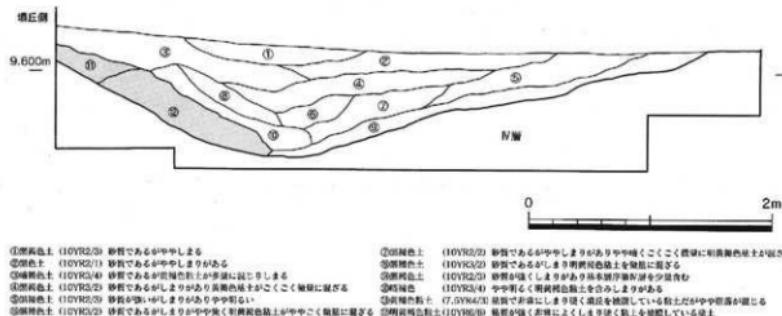
第58図 山崎下ノ原第1遺跡遺構分布図Ⅱ (S = 1/400)



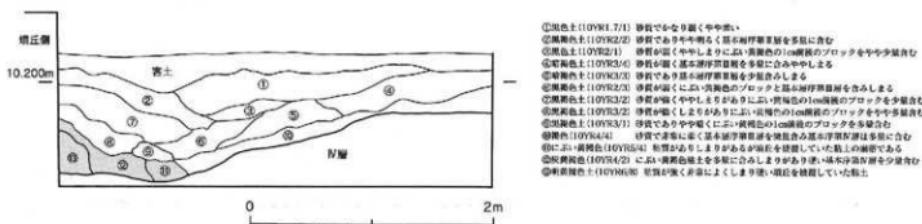
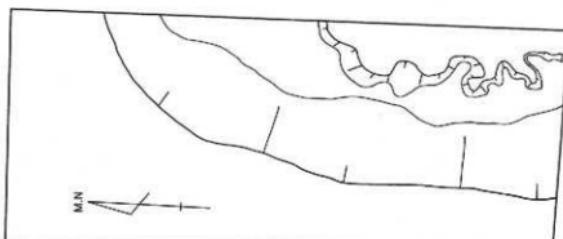
第59図 標5号墳墳丘測量図 ($S = 1/250$)

■ 構6号墳圖鑑（第61図）

櫛6号墳の周濠の一部を確認することができた。周濠の墳丘側は調査区外ということもあり、周濠の明確な幅を確認することはできなかったが、約4mと考えられる。出土遺物がなく築造時期など詳細は不明である。6号墳でも5号墳と同じ乾燥すると硬くしまる明黄褐色粘土が墳丘側で確認できた。流れ落ちた様子ではなく綺麗な明黄褐色粘土であるため、この粘土も墳丘を被覆し固めていたものと考えられることから、櫛5・6号墳は同じ構築方法と考えることができる。のことから櫛5・6号墳は同じ工人集団により墳丘を造営され、ほぼ同時期の墳丘と考えられ、墳丘の規模も櫛5号墳と同じぐらいになるか一回り小さい円墳ではないかと考えられる。



第60図 構5号構間渣土層断面図 (S=1/40)

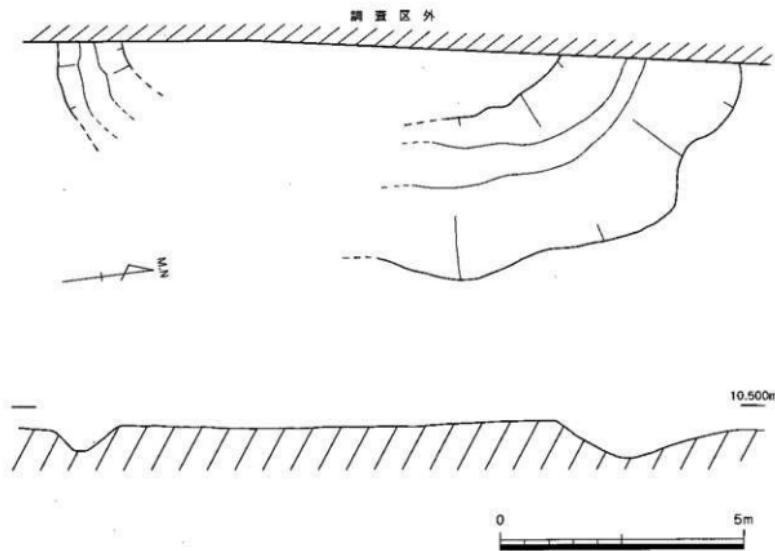


第61図 標6号墳周溝平面図・土層断面図 (S = 1/40)

2 減失古墳の調査

■ 第1号墳 (第62図)

今回の調査で本遺跡周辺では初めて減失古墳を確認した。周濠が円を描くように確認でき、墳丘側からは櫛5・6号墳と同じ乾燥すると非常にしまり、固くなる明黄褐色粘土が貼り付けてあるために、第1号墳も同じ構築方法だったと考えられることから減失古墳の周濠と考えられる。周濠の約1/2が確認できたが出土遺物がないために、築造時期など詳細は不明である。同じ構築方法であるため櫛5・6号墳とほぼ同時期ぐらいではないかと推測する。しかし墳丘が残存していないのは、後世による削平ではないかと考えられる。周濠の土層から明黄褐色粘土が流れ込む前に若干ではあるが堆積した砂を確認できたが、少ししか堆積していないことから周濠を掘削し粘土を貼るまでもに崩落が進んでいたのか、時間が空いたのではないかと推測できるが、砂丘上という立地から考えると時間を空けて墳丘を築くというのは考えにくく、掘削し粘土を貼るまでもに崩落が進んでいたのではないかと考える。しかし崩落といつても砂丘上であり風が吹けば砂は動き、掘削時にやや崩れ堆積することから、そのような堆積ではないかと考えられる。北側の周濠の外側の立ち上がりが緩やかなのは埋没とともに崩落し、緩やかになったと考えられる。検出面からの深さは約0.6mである。墳丘の復元径は約20mぐらいの円墳になるのではないかと推測する。



第62図 第1号墳周濠平面図・断面図 (S = 1/100)

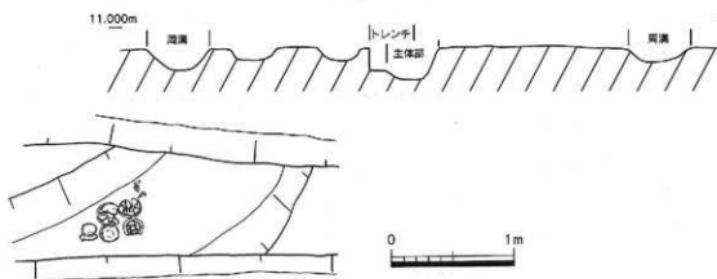
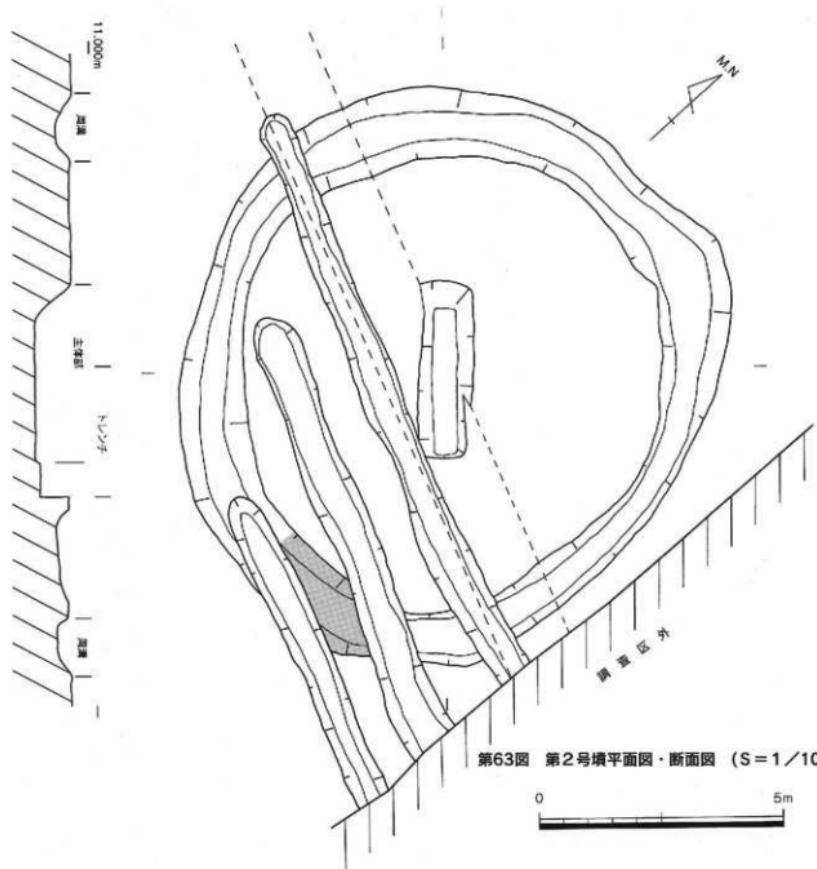
■ 第2号墳（第63～68図）

墳丘の有無は確認できなかつたが周溝と主体部を検出できたために滅失古墳と考えられる。直径約10mの小形の円墳で、検出面からの周溝の深さは西側が約0.3m、東側は約0.15mと非常に浅く、主体部の床面の深さは検出面から0.7mで周溝よりも深い位置に存在した。そのために主体部が残存していたと考えられる。主体部の主軸はS-53°-E方向で頭の位置は南東側と考えられる。主体部は砂丘という立地から検出にかなり困難を極めたためトレンチをいれて主体部の存在が確認できた。墳丘の有無は確認できなかつたが、低墳丘が存在したのではないかと推測する。墳丘に主体部を造らず、地山を掘り下げるて主体部を築いていることから、主体部を造ったのち墳丘を築いたのではないかと考えられる。

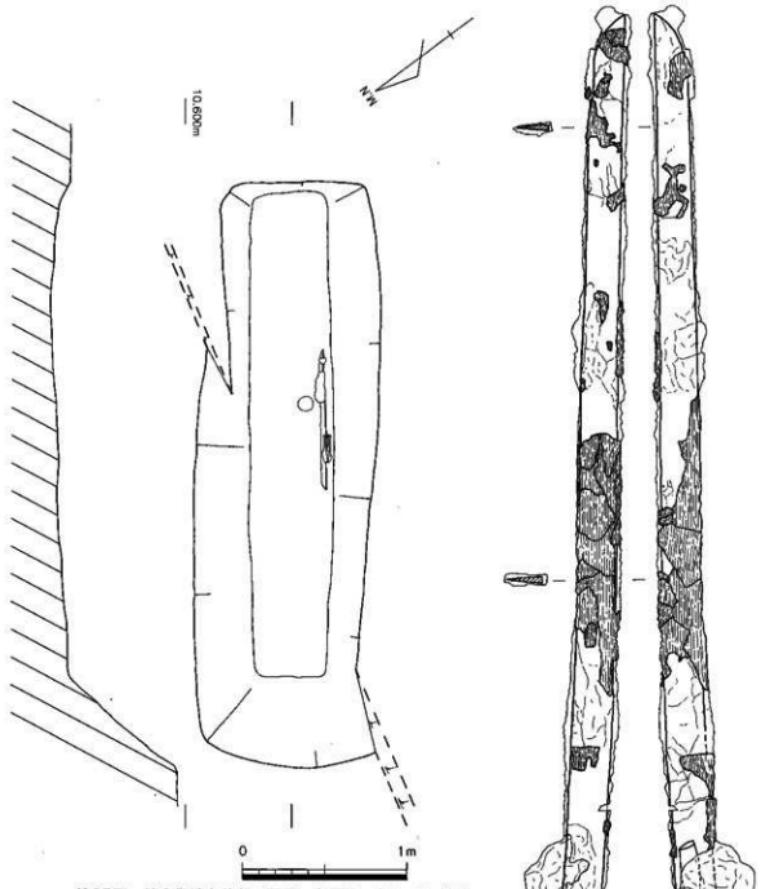
主体部は検出面で長軸4.08m、短軸1.5m、深さ0.7mの隅丸長方形プランを呈している土壙墓状で、埋葬方法は木棺直葬と考えられる。木棺の推定の長さは約3.08m、幅は約0.5mで、釘などは出土していない。主体部からは乳文鏡(1点)・大刀(1振)・鉄鎌(7点)・ガラス小玉(161点)が出土している。乳文鏡(1)は裏面を下、表面を上にした状態で出土し、直径は8.7cmで、紐部分に有機質物質が付着しており、独立行政法人奈良文化財研究所の高妻洋成氏に分析を依頼し、布織維であること、その布織維は平織りで原料は苧麻(ちょま)であることが判明し、表面にも織維らしきものがあるが規則性が無いので布織維ではないことが判明した。大刀(2)は全長1m、刃部長83cm、幅3.7cm、厚さ0.6cm、茎部長17cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、茎尻幅1.4cmの直刀である。刃部と茎部分には木質が残存し、刃部は鞘、茎部分は柄の残存と考えられる。茎の背部分には紐で巻いたような痕跡が確認できた。これはU字型の木の柄に大刀の茎部をはめこみ、紐で巻いて固定した痕跡ではないかと考えられる。直径0.3cmの目釘孔が3つあけられている。鉄鎌は7本出土し、長頸鎌の系統をひく半頭鎌(5～9)と三角形鎌(3)で、7本とも残存長は8cm前後で、茎部には木質が良好な状態で残存し、7本すべてに樹皮で巻いている痕跡が残存している。きちんとまとめて鋒を足元側(北西側)に向けて置いてあり、それが鎌で7本ともかたまり、くつついで、大刀の背部分の鎌とともにかたまりはずれない状態で出土した。ガラス小玉は大きく分けると青・紺・緑・黄色で、主体部の南東側に散らばって出土している。大刀、鉄鎌とともに鋒は北西方向に向けて置かれていること、ガラス小玉が南東側で出土していることから頭の位置は南東側と考えられる。

周溝の南南東の底から須恵器の坏蓋(1点)、土師器の壺(1点)・坏(5点)・鉄鎌(3点)が出土している。綺麗に土師器の坏と須恵器の坏蓋の7点を二組ずつ重ね並べ、破碎しているが東側に壺を立て、西側に鉄鎌を置いた状態で出土しており、埋葬時に周溝内で祭祀を行ったと考えられる。土師器の壺(11)は胴部が球胴でもそろばん玉状でもない扁球胴で、口縁部と体部の長さが近似している。胴部には破碎行為を行った痕跡が見受けれる。その場で破碎行為を行ったようで、完形に復元できている。土師器の坏は口径が大きく深さがあり器高が高く、口縁部は内凹するもの(12～15)と、外反するもの(16)があり、底部はいずれも丸底である。土師器の壺と坏の6点すべてには赤色顔料が塗布されている。須恵器の坏蓋は口径11.8cmと小さく、受け部がないことからTK47型式(5世紀期末)に相当すると考えられる。鉄鎌は長頸鎌の系統を引く三角形鎌(19)と半頭鎌(17)、木で鉄鎌を挟み込んでいる無茎鎌(18)が出土している。

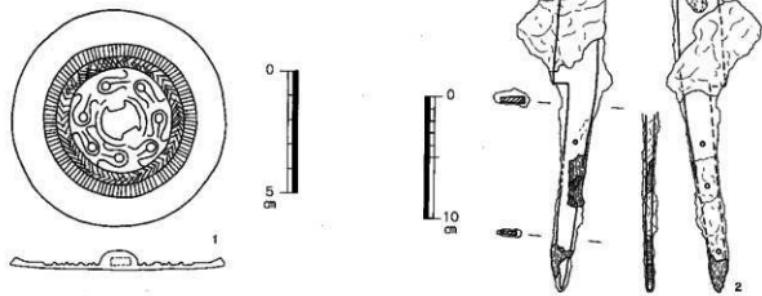
これらのことから第2号墳の築造時期を考えると、主体部から出土している鉄鎌は長頸鎌の系統を引いていること、周溝の底から出土した須恵器の坏蓋がTK47型式に相当すると考えられること、土師器の壺や坏は今堀屋毅行氏(今堀屋2002)の編年によると5期の初め頃に相当すると考えられることなどから、第2号墳の築造時期は5世紀末頃と考えられる。



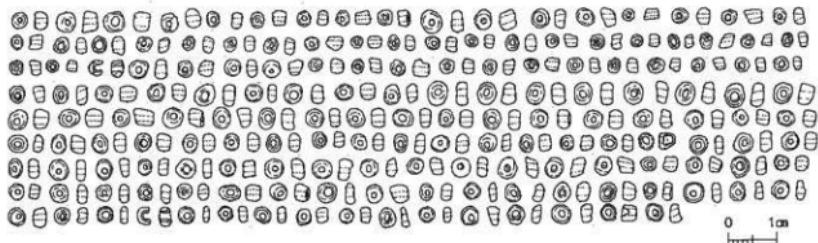
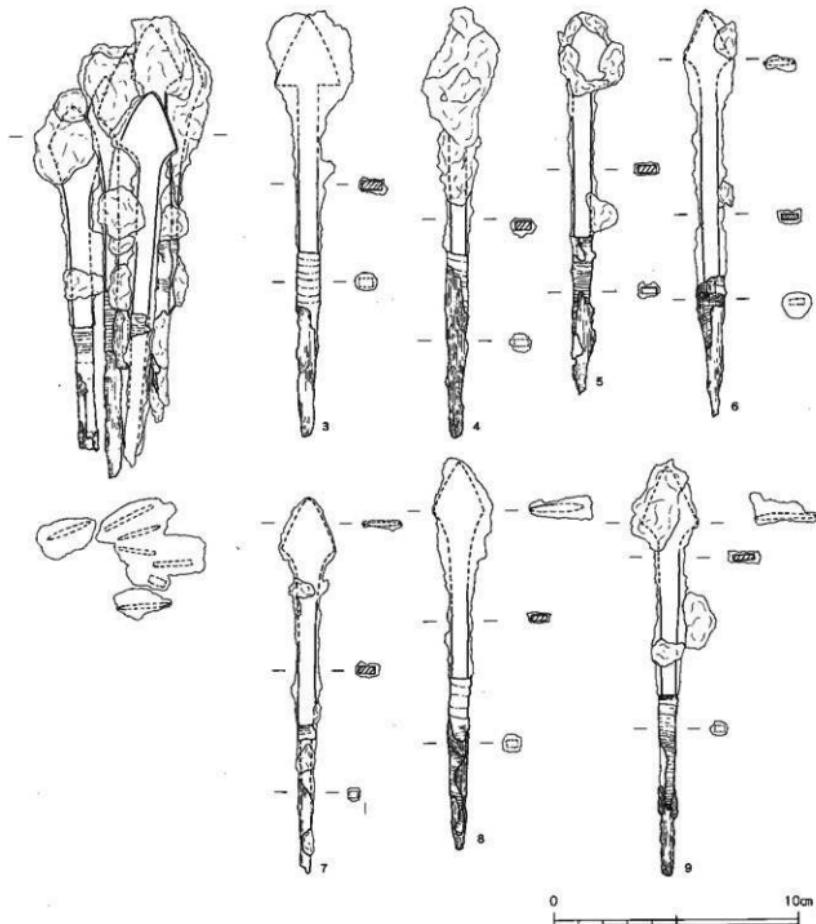
第64図 第2号墳周溝内遺物出土状況 ($S = 1/40$)



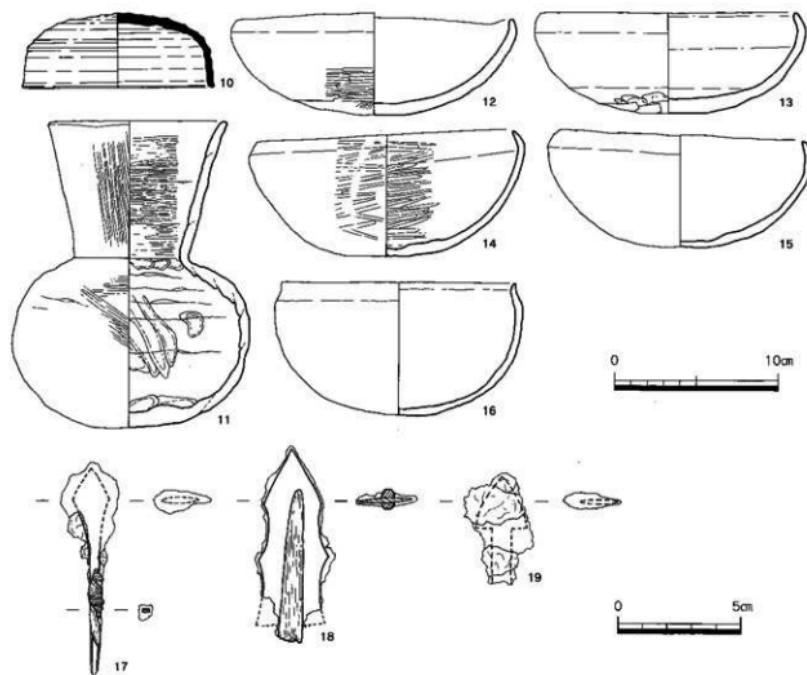
第65図 第2号墳主体部平面図・断面図 (S=1/30)



第66図 第2号墳主体部出土遺物実測図 I (1.S=1/2 2.S=1/4)



第67図 第2号墳主体部出土遺物測量図Ⅱ (3~9.S=1/2 ガラス小玉S=1/1)



第68図 第2号墳周溝出土遺物実測図 (10~16.S = 1/3 17~19.S = 1/2)

■ 第3号墳

家屋建設などにより約2/3以上が搅乱を受けていたが、溝の幅が1～1.3m、深さが約0.3mで「」を描くように確認できたことから、滅失古墳の周溝と考えられる。復元径は10m前後で、第2号墳と同様のものではないかと考えられることから、周溝よりも低い位置で主体部が残存している可能性があるためにトレンチをいれたが、遺構や遺物を確認できなかった。第3号墳の周溝の外側にも溝がめぐっており、2重目の周溝ではないかと考えられる。確認できた2重目の周溝の幅は0.7～0.9m、深さは約0.15mである。2重目を含めると復元径は15m前後になると推測する。第2・3号墳の周辺に5基の土坑が確認できたが出土遺物もなく不明であるが、馬埋葬土坑や土塚墓の可能性もあるのではないかと推測する。第3号墳の周溝の南西方向は遺構が確認できなかつたが須恵器のハソウ、土師器の壺が出土しており、祭祀が行われていたのではないかと考えられるが搅乱を受けており不明である。祭祀を行ったと考えられるが第3号墳に対しての祭祀か、それとも周囲に別の滅失古墳が存在し、その古墳に対してのものなのかなど詳細は不明である。

	径	幅	孔径	色彩	重量				
1	3.47	2.02	0.77	黄色	0.05	49	3.26	2.47	0.92
2	4	3.12	1.18	黄色	0.06	50	2.83	2.81	0.96
3	4.5	3.22	1.57	黄色	0.08	51	3.21	2.05	1.05
4	4.05	2.96	1.29	黄色	0.06	52	3.3	2.14	0.85
5	3.19	2.08	0.88	黄色	0.03	53	3.1	2.22	1.02
6	3.12	2.91	0.66	黄色	0.03	54	3.06	2.37	0.93
7	3.2	2.14	0.85	黄色	0.03	55	3.18	1.89	1.18
8	3.52	2.96	0.75	黄色	0.04	56	3.21	1.67	0.94
9	3.15	3.34	1.21	青色	0.05	57	3.41	2.35	0.96
10	4.61	2.36	1.24	青色	0.07	58	4.01	2.09	1.05
11	3.85	3.48	1.12	青色	0.07	59	3.84	3.22	1.1
12	3.69	2.38	1.08	青色	0.04	60	3.58	2.58	1.09
13	3.78	2.61	1.1	青色	0.05	61	4.21	2.11	1.84
14	2.75	3.03	0.59	青色	0.03	62	3.64	1.45	1.05
15	3.57	2.68	0.89	青色	0.03	63	3.83	2.55	1.44
16	3.36	3.24	1.2	青色	0.05	64	3.67	2.8	1.2
17	3.22	1.94	1.02	青色	0.04	65	4	2.14	1.14
18	2.72	2.69	0.95	青色	0.03	66	4.83	2.53	1.49
19	3.43	2.25	1.05	青色	0.03	67	4.46	2.89	1.57
20	3.47	2.22	1.64	青色	0.03	68	4.38	2.58	1.28
21	3.12	2.4	0.93	青色	0.03	69	4.37	2.27	1.29
22	3.14	2.22	0.88	青色	0.02	70	4.42	2.34	1.36
23	3.11	2.14	0.74	青色	0.04	71	4.44	2.22	1.35
24	3.21	2.35	0.92	青色	0.03	72	4.5	2.52	1.41
25	2.78	2.95	0.68	青色	0.03	73	4.24	2.73	1.33
26	2.82	2.72	0.63	青色	0.02	74	4.12	2.92	1.19
27	3.03	2.09	0.83	青色	0.02	75	3.86	3.42	1.49
28	3.28	2.09	1	青色	0.02	76	3.36	3.85	0.86
29	2.9	1.97	0.94	青色	0.03	77	3.86	3	1.1
30	3.14	2.1	1.34	青色	0.03	78	3.99	2.8	1.38
31	2.94	2.51	0.77	青色	0.03	79	4.11	2.53	1.28
32	3.04	1.97	0.91	青色	0.02	80	4.13	2.19	1.47
33	2.77	2.03	0.81	青色	0.02	81	3.71	2.49	1.21
34	2.65	1.82	1.1	青色	0.02	82	3.91	1.96	1.22
35	3.12	3.09	0.94	青色	0.03	83	3.54	2.74	0.92
36	2.78	2.25	0.88	青色	0.02	84	3.95	3.21	1.29
37	2.91	1.83	1.1	青色	0.01	85	3.68	2.39	1.06
38	2.79	2.36	0.71	青色	0.02	86	3.79	2.41	1.23
39	0.58	2.04	0.99	青色	0.01	87	3.82	2.1	1.18
40	3.73	2.54	1.14	青色	0.02	88	3.72	2.23	0.97
41	4.14	2.24	1.29	蔚色	0.06	89	3.03	2.67	0.87
42	3.46	3.9	0.94	蔚色	0.05	90	3.57	2.24	1.04
43	3.62	2.39	1	蔚色	0.03	91	3.75	1.97	1.18
44	3.25	3.01	0.76	绿色	0.04	92	3.45	2.92	1.74
45	3.03	2.83	0.83	绿色	0.03	93	3.83	2.4	1.13
46	3.13	2.52	1.09	绿色	0.02	94	3.54	2.49	1.35
47	3.51	3.06	1.2	绿色	0.05	95	3.47	2.45	1.18
48	3.3	2.29	1.03	绿色	0.02	96	3.41	2.07	1.05

第17表 第2号墳主体部出土ガラス小玉計測表 I

(単位mm、重量g)

97	3.72	2.09	1.25	青色 半透明	0.03
98	3.24	2.17	0.68	青色 半透明	0.03
99	3.53	2.1	1.05	青色 半透明	0.03
100	3.72	1.84	1.2	青色 半透明	0.03
101	3.65	2.08	0.86	青色 半透明	0.04
102	3.56	2.02	0.9	青色 半透明	0.04
103	3.59	2.06	0.91	青色 半透明	0.03
104	3.1	2.47	0.97	青色 半透明	0.04
105	3.31	2.21	1.17	青色 半透明	0.02
106	3.33	3.1	1.29	青色 半透明	0.03
107	3.78	1.68	1.15	青色 半透明	0.03
108	4.31	3.39	1.01	青色 半透明	0.06
109	3.71	2.74	0.85	青色 半透明	0.05
110	3.94	2.27	1.23	青色 半透明	0.06
111	4.14	2.1	1.02	青色 半透明	0.03
112	3.89	1.85	1.2	青色 半透明	0.03
113	3.21	2.21	1.05	青色 半透明	0.05
114	4.01	1.52	1.51	青色 半透明	0.04
115	3.38	3.12	0.96	青色 乳白	0.05
116	4.18	2.28	0.9	青色 乳白	0.05
117	3.96	2.58	1.32	青色 乳白	0.05
118	3.47	2.21	1.03	青色 乳白	0.03
119	3.33	2.38	0.99	青色 乳白	0.03
120	3.92	3.29	1.19	青色 乳白	0.05
121	4.07	2.64	1.09	青色 乳白	0.05
122	4	2.61	1.06	青色 乳白	0.05
123	3.58	3.35	0.86	青色 乳白	0.05
124	3.11	2.73	0.78	青色 乳白	0.03
125	3.16	2.64	0.84	青色 乳白	0.04
126	4.06	2.05	1.24	青色 乳白	0.04
127	3.31	2.49	1.12	淡い青色 半透明	0.03
128	3.12	2.28	1.02	淡い青色 半透明	0.03
129	3.97	1.92	1	淡い青色 半透明	0.04
130	3.49	1.94	0.94	淡い青色 半透明	0.03
131	3.27	2.06	0.82	淡い青色 半透明	0.04
132	3.47	2.02	0.79	淡い青色 半透明	0.03
133	3.81	3.17	0.13	淡い青色 半透明	0.06
134	3.34	2.79	0.96	淡い青色 半透明	0.04
135	4.16	1.81	1.34	淡い青色 半透明	0.04
136	3.52	3.38	0.96	淡い青色 半透明	0.04
137	3.43	2.1	0.94	淡い青色 半透明	0.03
138	3.48	1.71	1.17	淡い青色 半透明	0.02
139	3.53	1.81	0.99	淡い青色 半透明	0.03
140	3.97	2.58	1.22	淡い青色 半透明	0.05
141	3.9	2.4	1.22	淡い青色 半透明	0.04
142	3.37	1.79	1.1	淡い青色 半透明	0.02
143	3.88	1.77	0.96	淡い青色 半透明	0.04
144	3.64	1.62	0.72	淡い青色 半透明	0.02

145	4.02	1.89	1.12	淡い青色 半透明	0.03
146	3.85	2.87	0.95	淡い青色 半透明	0.06
147	3.35	1.93	1.14	淡い青色 半透明	0.03
148	2.23	1.41	0.31	淡い青色 半透明	0.02
149	3.65	2.13	1.08	淡い青色 半透明	0.02
150	3.64	1.48	1.04	青緑色 半透明	0.03
151	3.13	1.75	0.97	青緑色 半透明	0.03
152	3.4	1.53	1.02	青緑色 半透明	0.02
153	3.06	2.48	0.84	青緑色 半透明	0.03
154	3.23	1.86	1.03	青緑色 半透明	0.02
155	3.92	1.74	1.29	青緑色 半透明	0.03
156	2.96	1.41	0.82	青緑色 半透明	0.02
157	3.79	1.96	0.98	青緑色 半透明	0.03
158	3.64	1.75	1.22	青緑色 半透明	0.03
159	4.03	2.31	1.17	青緑色 半透明	0.05
160	3.15	2.94	1.16	青緑色 半透明	0.04
161	3.61	2.01	1	青緑色 半透明	0.03

* 図66のガラス小玉は左上から右に番号をついている

第18表 第2号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅱ

(単位mm、重量g)

3 土壙墓の調査(S D)

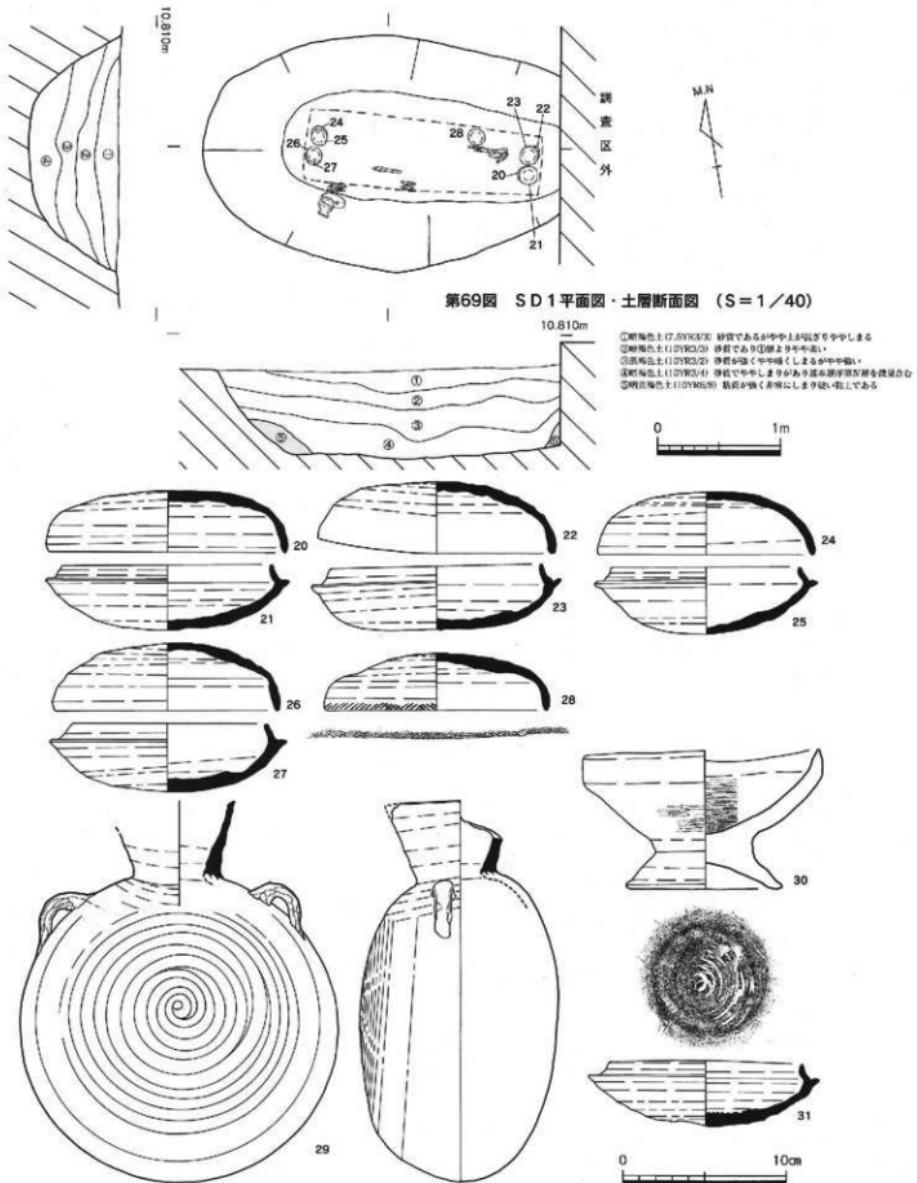
■ SD 1 (第69~71回)

長軸が約3m、短軸1.9m、深さ約1mの梢円形ないし隅丸長方形プランを呈し、主軸はN-75°-W方向の土壙墓である。東側の立ち上がりは調査区外となるために確認することはできなかったが、土層観察により明黄褐色粘土が存在していることが確認でき、反対側でも同じ粘土が存在していたことから、棺の長軸の両端の押さえに使われた粘土であると考えられる。これらのことから木棺墓であると考えられる。この明黄褐色粘土は、穂5・6号墳の周濠で確認できた粘土と同じ粘土と推測する。

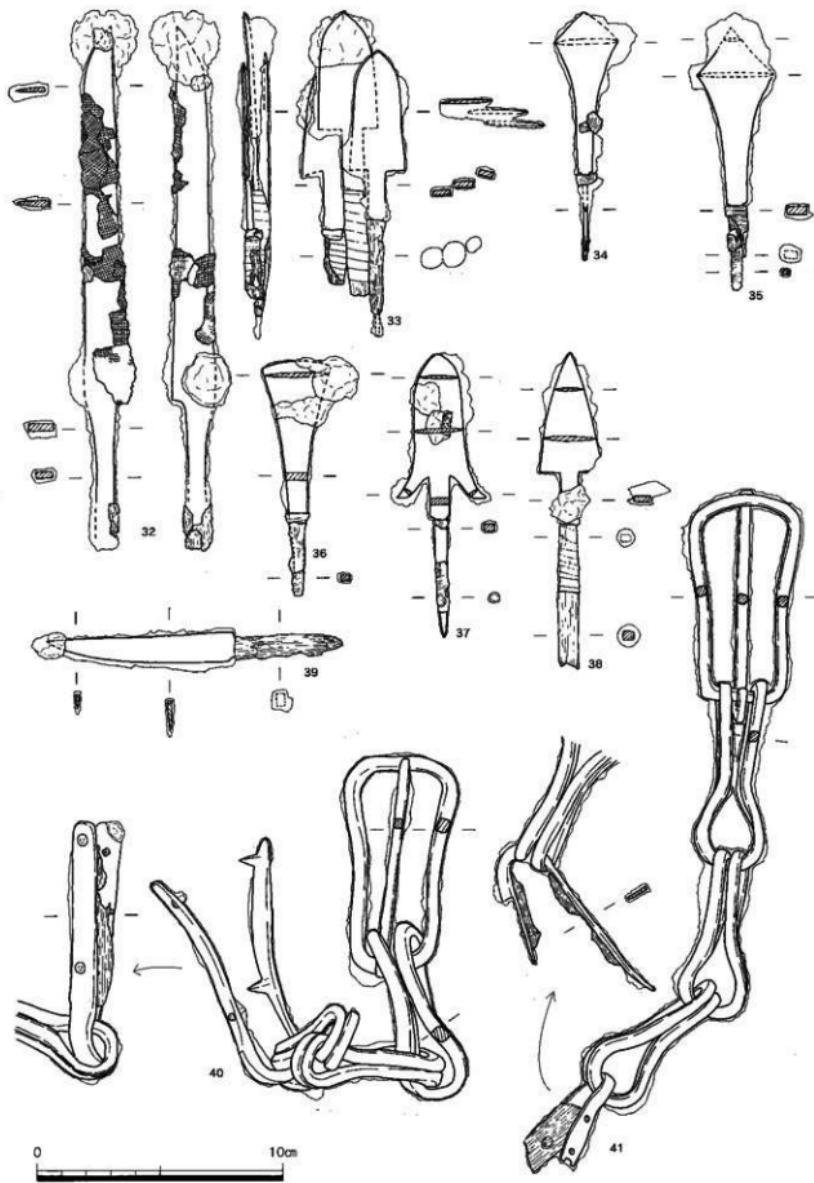
出土遺物は須恵器の环のセットをなすものが4組(8点)・提瓶(1点)・十輪器の高环(1点)・須恵器の环身(1点)・鉄鎌(8点)・鉄刀(1点)・刀子(1点)・鎧(2点)である。須恵器の环のセットの3組(20~25)は环身を反対にして伏せその上に环蓋を伏せて重ね、1組(26、27)は环蓋を伏せてその上に环身を反対にして伏せて重ねてあり、床面の両端付近に二組ずつ並べて置いてあり、ちょうど頭と足元付近である。これらのことから須恵器の环身と环蓋のセットは枕など台の役割をしていたと考えられる。中央の南側で元位置を保っていると考えられる鉄刀(32)・鉄鎌(34~37)・刀子(39)は棺内の副葬品と考えられる。鉄鎌は方頭鎌(36)・半頭鎌(34~35)・三角形鎌(37)で、茎部分には良好な状態で木質が残存し、樹皮で巻いている痕跡が残存している。鉄刀は残存長21.4cm、刃部長15.4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、茎部長6cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmである。刃部全体に布織維が付着し、2枚は重なっていると観察できることから2重に布織維を巻いていたと考えられる。茎部には木質が残存しているか、布織維が付着していないことから柄を装着した状態で鞘のない刃部にのみ布織維を巻きつけたのではないかと推測する。

土師器の高环(30)・須恵器の提瓶(29)・环身(31)が南西側で出土しているが、提瓶は立った状態で出土し、その外側で倒れた高环と环蓋が、内側で鉄鎌4本(33、38)が置かれ、床面よりやや高い位置で出土していることから棺外の副葬品と考えられる。須恵器の提瓶は口縁部内側にヘラ記号があり、环身は内面の底に、渦状の縄目文様が見られる。これは外面に削りを施す際に乗せた台に繩が巻きつけられていたのではないかと考えられるが不明である。鉄鎌は4本とも三角形鎌で、茎部分には良好な状態で木質が残存し、樹皮で巻いている痕跡が残存する。馬具である鎧(40~41)も出土しているが、床面より40cmほど高い位置で出土しているために、棺の上に置いて埋葬されたものが棺の腐敗により落ちた状態ではないかと考えられる。鎧の鎖は3連の兵庫鎖で、下部の鎖ほど小さくなる。鎧吊金具は断面が長方形の棒状を兵庫鎖の輪と連結させ、真ん中でU字に曲げ、下部はその棒状の断面が長方形の厚みを叩いて薄く延ばし、厚さ0.2cmで1×8cmの板状の吊金具を造っている。鎧は片方に2個ずつ打ち、合計4個である。この板状の吊金具で木製の鎧を挟み込んで鎧で留めていたと考える。鎧具は中央部分から上部はやや幅が広くなり、刺金は断面が方形の棒状で、巻きつけて固定し、反対側は叩いて薄く平らにしている。検出面からやや下で土師器の环蓋(28)が出土しており、埋葬して埋めた後に納めたものではないかと考えられる。口縁部にはヘラ工具による圧痕が施されている。棺内外の鉄鎌の鋒は西向き、鉄刀の鋒は東に向いているが、若干ではあるが西側のほうの幅が広いことから頭の位置は西側と考えられる。

SD 1 の時期は出土したセット関係をなす4組の須恵器の环身の口径が12cm前後、环蓋の口径が14cm前後で、頭の位置にあると考えられる二組の須恵器の口径はやや小さいが、TK209型式の古段階の6世紀末頃に相当すると考えられる。



第70図 SD1出土遺物実測図Ⅰ



第71図 SD 1出土遺物実測図Ⅱ (S = 1/2)

■ SD2 (第72~73図)

検出面で長軸3.12m、短軸1.64m、深さ0.46mの隅丸長方形プランを呈し、主軸はS-60°-W方向の上墳墓で、主軸方向は櫛5号墳の墳丘の中心を向いている。出土遺物は須恵器の坏蓋(1点)・坏身(4点)・鉄鎌(3点)・刀子(1点)である。土墳墓の北西の隅に楕円形の土坑が2基、存在しているが遺物などは出土していない詳細は不明である。しかし埋土状況などから比較的新しい時期の擾乱と考えられる。

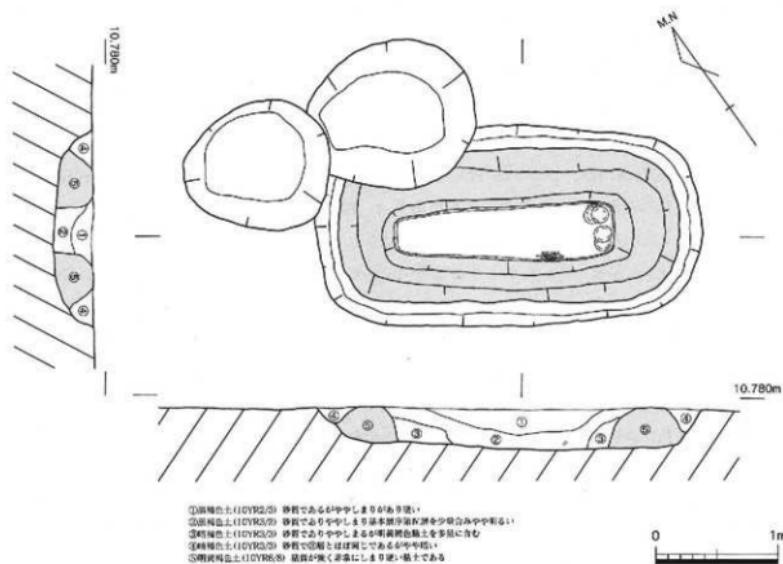
SD2は明黄褐色粘土が四周を覆い、棺を押さええる役割をしていると考えられる。SD1は長軸の両端だけであったが、SD2は四周、つまり長方形の木棺の4辺とも厚さ約0.4mの粘土で覆い、棺を押さえているのである。四周を覆っているこの明黄褐色粘土は、櫛5・6号墳の周縁の墳丘側で確認できた粘土と同じものと考えられる。上層は家屋建設などで攪乱されており、検出面ですでに粘土が見えていたことから棺の上を粘土で被覆していたかどうかは不明である。そのため粘土層と考えることも可能であるが、内側には棺の上を被覆していた粘土が落ちていた痕跡はない。若干ではあるが長軸の両端に崩れ落ちている粘土が確認できたが、これは棺が腐敗して倒れたときに長軸の両端の粘土が崩落したものであると考えられることから、棺の上には被覆していないと推測する。土壙を掘り、木棺を置いて明黄褐色粘土を四周に被覆し埋葬していたと考えられる。四周を覆っている粘土の長軸が約2.6m、短軸が約1.24mである。木棺が腐敗して崩れ、埋没した部分のみを掘削した結果、木棺の部分は全長1.76m、最大幅0.48m、最小幅0.3m、残存高0.3mであることが判明した。やや幅が狭く、木棺の板の厚さも考えると、大人一人が入るかどうかという感じである。釘などが出土していないことや、木棺が存在した粘土の部分の側板の部分が垂直に近いことなどから箱式の組合せ木棺と推測する。

土壙の東側には須恵器の坏身と坏蓋が伏せて重ねた状態で北側に3点(上43、中42、下44)、南側に2点(上45、下46)出土し、北側と南側で重ねている須恵器の点数が違うが、高さはほぼ同じであり意図的に揃えていると考えられることから、枕など台の役割を果たしていたのではないかと考えられる。須恵器の坏身の口径が11.5~12.1cmで、坏蓋の口径が13.3cmとやや大きい。

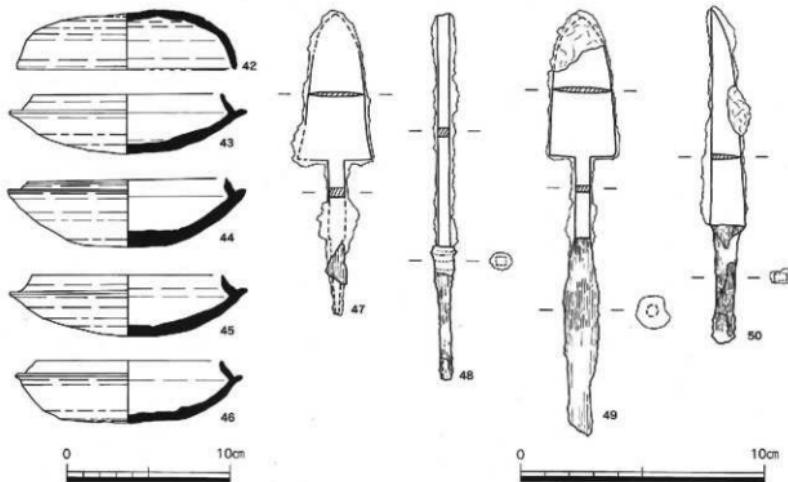
主軸から考えると、木棺の存在していた部分の南側の側板付近のやや東よりに刀子(50)、鉄鎌(47~49)が出土し、刀子の鋒は西側、鉄鎌の鋒は東側を向いていた。刀子は、莖部に柄と思われる木質が良好な状態で残存している。残存長は13.8cmで、刃部長8.8cm、刃部幅1.2~1.5cm、刃部厚0.2cmである。鉄鎌は三角形鎌(47、49)で莖部分には木質が残存し、48は鉄鎌の頭部から莖部分のみが残存しているが、長頸鎌と考えられる。少しではあるが莖部の上部に樹皮で巻いている痕跡が残存する。残存長は13.0cmである。47、49の鉄鎌の莖部分には木質が良好な状態で残存しているが樹皮で巻いてある痕跡は残存していない。49の鉄鎌は莖部分の鋒により木質はふくらんでいる。鉄鎌は3本とも頭部は角闘で、頭部の断面は方形、莖部の断面は折れた部分での観察によりU形と判明した。

重ねられて出土している須恵器が枕の役割をしていると考えられること、鉄鎌の鋒は東側を向いていることや木棺の幅が東側の方はやや広いことなどから、頭の位置は東側(櫛5号墳側)と考えられる。

時期については出土した須恵器の坏身の口径が11.5~12.1cm、坏蓋の口径が13.3cmであることからTK209型式の古段階の6世紀末頃に相当すると考えられる。



第72図 SD 2平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

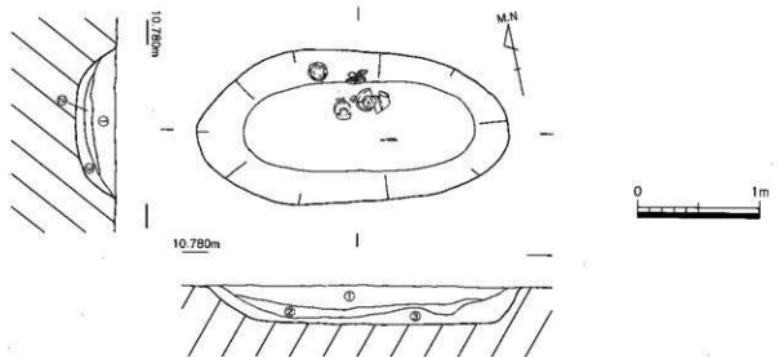


第73図 SD 2出土遺物実測図 (42~46.S = 1 / 3 47~50.S = 1 / 2)

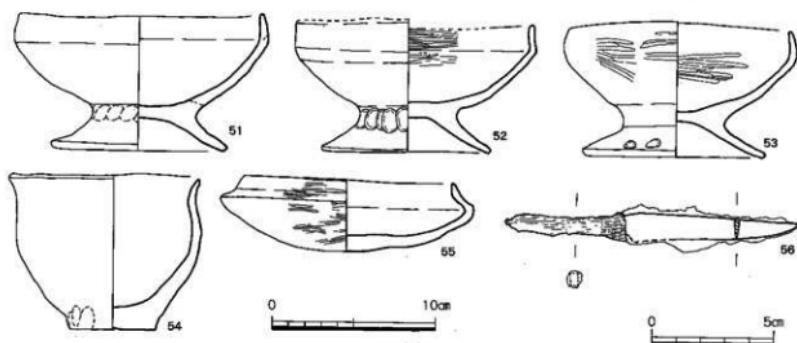
■ SD 3 (第74~75図)

長軸2.54m、短軸1.26m、深さ0.4mの横円形を呈し、主軸はS-81°-E方向の土壙墓で、主軸方向は櫛5号墳の墳丘の中心を向いている。頭位は輻が東側のほうが広いこと、刀子の鋒が西側を向いていることから東側(櫛5号墳側)が頭の位置と考えられる。土師器の高坏(51~53)・甕(54)・模倣坏(55)が出土し、床面で刀子(56)が1点出土した。土師器は床面ではなくやや浮いた状態で、中央の北側で出土していることから棺外に斎葬されたものではないかと考えられる。甕はミニチュアである。高坏、甕、模倣坏すべてに赤色顔料が塗布されている。棺内の遺物に関しては刀子1点と考えられる。

時期については高坏が3点とも今堀屋編年によると高坏は7期終わりから8期初めの6世紀末から7世紀初頭と考えられる。



第74図 SD 3平面図・土層断面図 (S = 1/40)



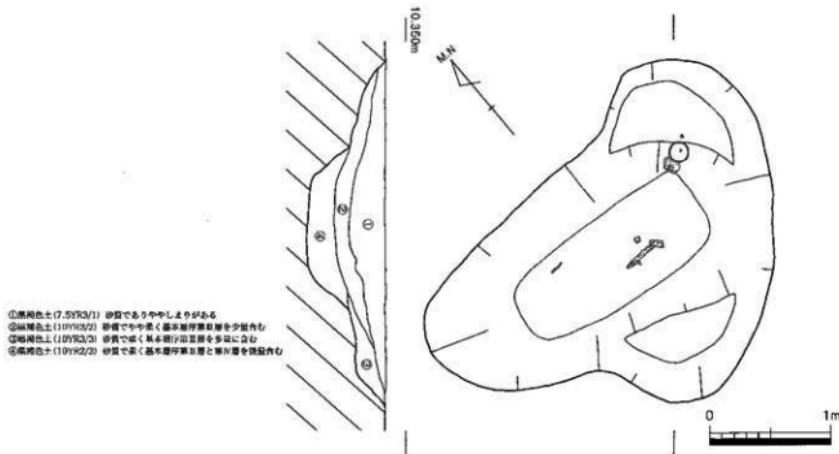
第75図 SD 3出土遺物実測図 (51~54.S = 1/3 56.S = 1/2)

■ SD 4 (第76~77図)

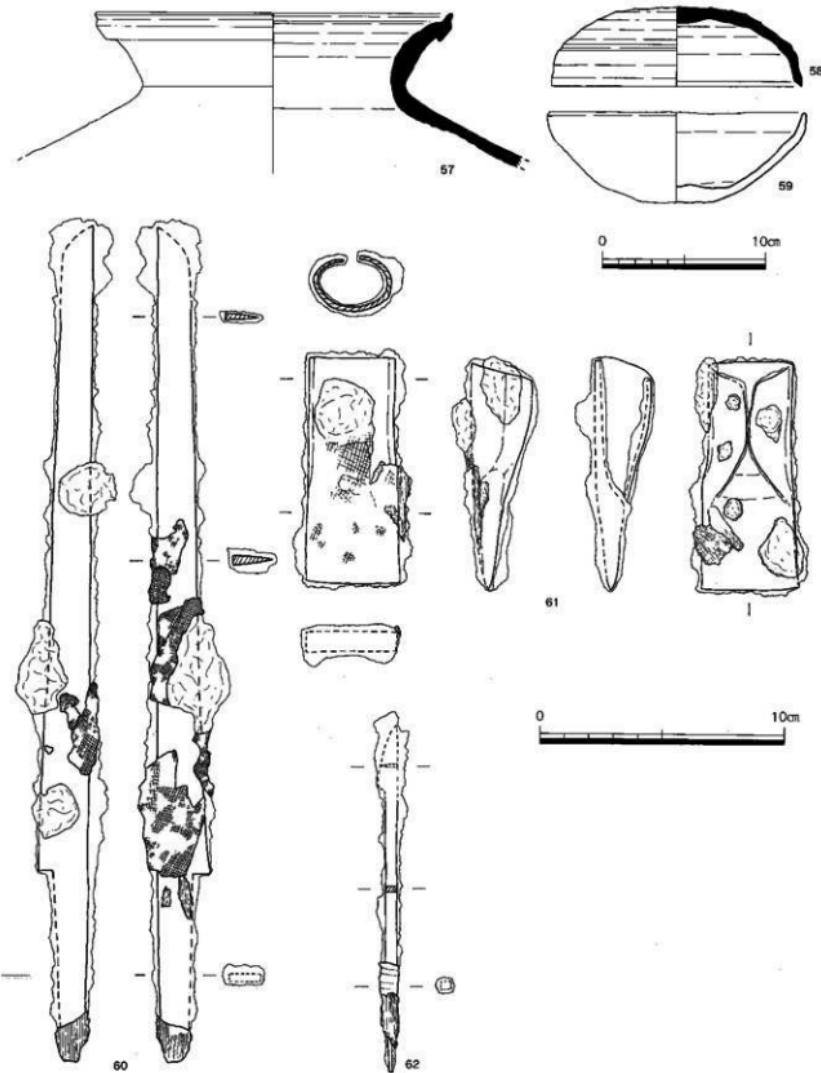
長軸3.12m、短軸1.44m、深さ0.7mの梢円形プランを呈し、主軸はS-85°-W方向の土壌墓で、主軸方向を櫛5号墳の墳丘の中心に向いていると考えられる。頭の位置は幅が東側のほうがやや広いこと、鋒はそれぞれ西側を向いていることから東側(櫛5号墳側)と考えられる。頭の位置付近の南に長さ約0.8m、幅約1.24m、北に約0.61m、幅約1.24mの突出している部分があるが、この部分は作業場的なものではないかと考えられる。

SD 4の検出面付近から土師器の坏・須恵器の甕(57)・坏蓋などが出土し、床面からは鉄刀・鉄斧・鉄鎌が出土している。土師器の坏(59)は底部が丸底で、口縁部はやや内湾し、器高が高い。須恵器の坏蓋(58)は口径が15.3cmと大きく、器高は4.9cmである。鉄刀(60)は全長34.6cm、刃部長26.9cm、幅2.0cm、厚さは背部0.5cm、茎部長7.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmで直刀である。両面に布纖維が付着し2枚は重なっていると考えられることから布を2回は巻いていると考えられる。関部は直角で、脣部は茎尻に向けて幅がやや狭くなる。茎尻部分の形状は不明である。茎部分には木質が残存していることから柄の残存と考えられる。鉄斧(61)は袋状鉄斧で、全長9.3cm、基部幅3.5cm、刃部幅3.8cm、折り返し部の長さ1.8cm、基部の厚み0.2cm、最大厚1.0cmである。木質や布纖維が付着している。平面形態は基部から刃部へほぼ直線的にのびる長方形を呈し、片方にわずかに肩が存在する。基部から刃部に至る際に明瞭な段を持つ袋部は一部が接するのみで完全には閉じていない。断面は梢円形を呈する。袋部の折り返しの下方や側面は叩打によって面を持つ。付着している木質は鉄刀と密着した状態で出土していることから、鉄刀の鞘が鉄斧に付着している可能性がある。鉄鎌(62)は鍔がひどく不鮮明ではあるが、長頸鎌で鎌身部は片刃で、全長14.4cm、鎌身部長2.8cm、頭部長7.2cm、茎長4.4cmである。茎部には木質が残存し、茎の上部には樹皮で巻いている痕跡が残存している。

時期については須恵器の甕や坏から、TK43型式の古段階に相当すると考えられること、土師器の坏は今塩屋編年の坏Bの7期の前半段階に相当すると考えられることから6世紀後半と考えられる。



第76図 SD 4平面図・土層断面図 (S=1/40)

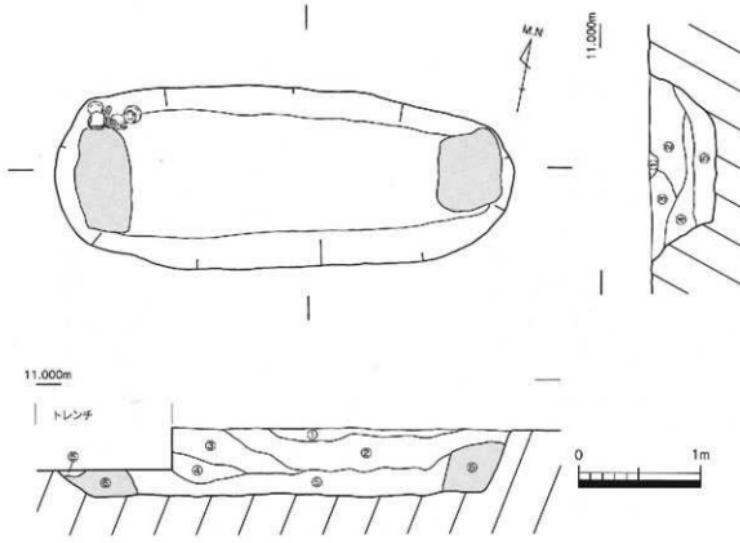


第77図 SD 4出土遺物実測図 (57~59.S = 1/3 60~62.S = 1/2)

■ SD5 (第78~79図)

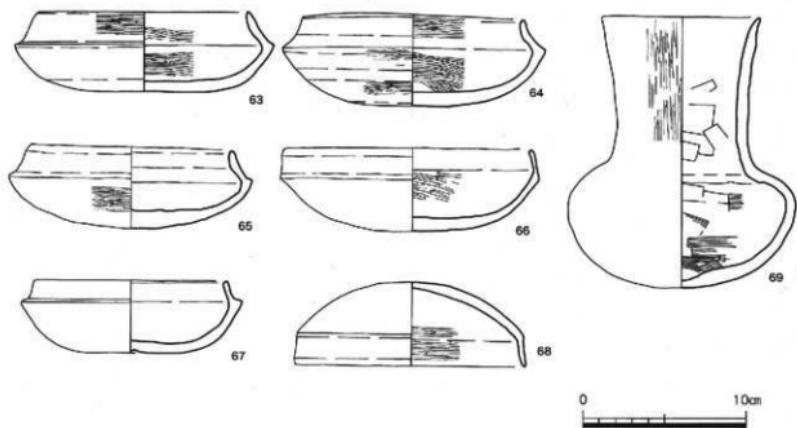
長軸3.74m、短軸1.46m、深さ0.5mの楕円形プランを呈し、主軸はS-73°-E方向の土壌墓である。出土遺物は土師器の模倣坏(6点)・小形壺(1点)である。長軸の両端に明黄褐色粘土が存在しており、棺の押さえに使用していた粘土と考えられることから木棺墓であると考えられる。棺の押さえに使用していた明黄褐色粘土は櫛5・6号墳の周濠の埴堀側で確認できた粘土と同じと考えられる。木棺の規模は推定で長さ2.5m、最大幅0.8m、最小幅0.5mと考えられる。土壌墓の形態が西側の方の幅が広いために、頭の位置は西側と考えられる。出土した土器はその西側の頭の北側にあり、模倣坏や小形壺が立ってやや傾いた状態で、棺の押さえに使用していた明黄褐色粘土に立てかけるような状態で出土していることから、棺外に立てかけていた葬品と考えられる。釘などは確認できなかった。模倣坏の身は口縁部の立ち上がりが内傾するもの(63~65, 68)、立ち上がりが直立するもの(66)があり、小形壺(69)はやや口縁部が外反し、体部はソロバン球状で胴部高に比して口縁部高がやや長くなっている。模倣坏と小形壺すべてに赤色顔料が塗布されている。

時期については模倣坏が今塩屋編年の7期の前半段階に相当すると考えられることから6世紀後半と考えられる。



① 深褐色土 (10YR3/2) 砂質でやや重くしまりがない
 ② 深褐色土 (10YR3/2) 沙質であるがしまりがあり基本層厚壁を多部に含む
 ③ 深褐色土 (10YR3/2)
 ④ 沙質であり基本層厚壁を少部分含むしまりがある
 ⑤ 深褐色土 (10YR2/2) 沙質でありしまりがあるが堅い板状堅膜を表面に含む
 ⑥ 深褐色土 (10YR2/2) 沙質でありしまりがあるが堅い板状堅膜を表面に含む
 ⑦ 深褐色土 (10YR4/2)
 ⑧ 深褐色土 (10YR4/2) 沙質であり基本層厚壁を多部に含む
 ⑨ 明黄褐色土 (10YR6/6) 砂質でやや重くしまりがない板子である

第78図 SD5平面図・土層断面図 (S=1/40)



第79図 SD 5出土遺物実測図 (S = 1/3)



図版1 山崎下ノ原第1遺跡遺景

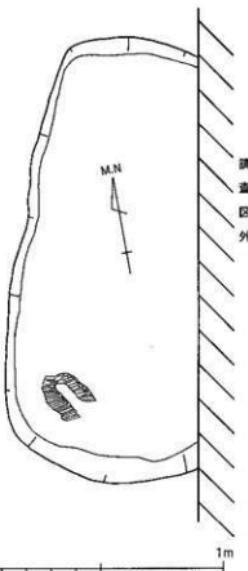
4 馬埋葬土坑の調査(SC)

■ SC4 (第80図)

馬齒が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。馬具類は出土せず、馬齒のみであることから装着していた馬具をはずして埋葬したものと考えられる。大きさから考えると、馬が一頭分は入る大きさと考えられる。馬の頭の位置は馬齒の出土位置から南側である。

■ SC5 (第81~82図)

馬齒・轡(1点)・銛(10点)・貴金具(2点)・鉄具(2点)が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。轡(85)は立聞が別造りの素環状鏡板付轡で、片方の立聞は消失している。引手と鏡板、鏡板と衡は連結し、引手と衡は連結していない。馬齒のすぐ近くで轡・銛(71~80)・貴金具(81~82)・鉄具(83~84)が出土していることから装着したまま埋葬されたと考えられる。81~82の貴金具は消失している立聞についていた1つの貴金具の可能性もある。鏡板は直径5.2cmの円形で鋼と考えられる有機質物質が付着している。引手は長さ14cmで棒状の引手を直径が約2cmの引手壺を曲げて造り、反対側は180°逆方向に環を造っている。引手壺にも鋼と考えられる有機質物質が残存している。衡は1つが同方向に環を造り、もう1つは90°捻り環を造っている2連の衡である。銛は0.8×1.1cmの長方形の薄い板状のものに直徑約0.4cmの鉄を1つ打っている。長さは1cmである。立聞は別造りで薄い板状のものを鏡板に向して貴金具で固定し、面繋を挟みこみ固定するために鉄を1つ打ってある。須恵器(70)の坏身は検出面付近から出土し、口径は12cmとやや大きいことからTK209型式の古段階と考えられる。このことからSC5の時期は6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。



第80図 SC4平面図 (S=1/20)

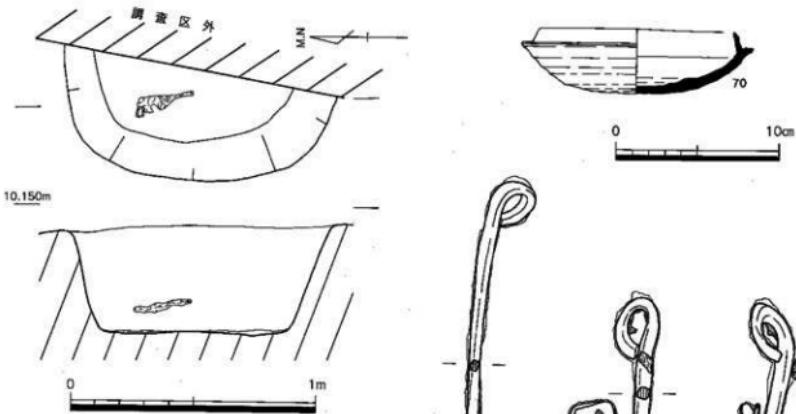
第19表 馬埋葬土坑計測表

(単位 m)

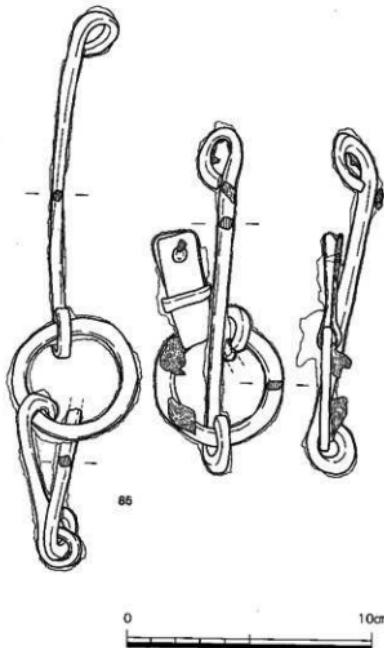
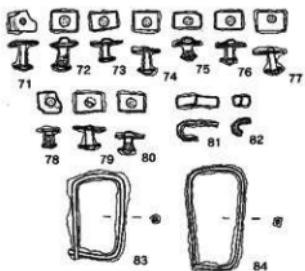
造構番号	長軸	短軸	深さ	造構形態	出土遺物	備考
SC4	(1.8)	(0.76)	0.65	隅丸長方形	馬齒(1)	F区
SC5	(1.12)	(0.46)	0.33	楕円形	馬齒(1)・轡(1)・銛具(2)・紙(10)・貴金具(2)	F区
SC8	1.86	1.54	0.89	楕円形	馬齒(1)・轡(1)・銛(2)	F区
SC15	1.92	1.4	0.67	楕円形	轡(1)	G区
SC16	2.18	1.12	0.4	隅丸長方形	馬齒(1)・轡(1)・杏葉(7)・裏兜(1)・ 辻金具(14)・紙(7)・鉄具(1)	G区 鉄地金網張製
SC19	2.14	1.12	0.86	隅丸長方形	馬齒(1)・轡(1)	H区

*カッコ表記については調査区外に延びるため、調査区内で検出した値である。

*計測値は検出面からの値である。



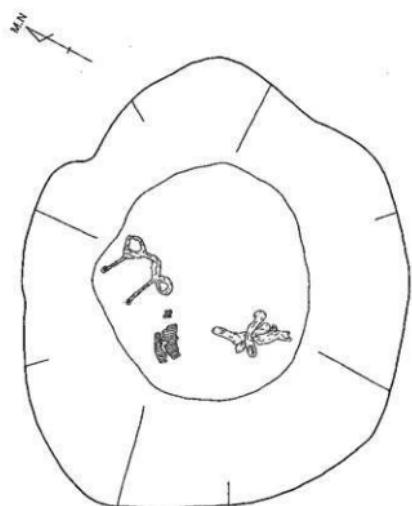
第81図 SC 5平面図・断面図 (S=1/20)



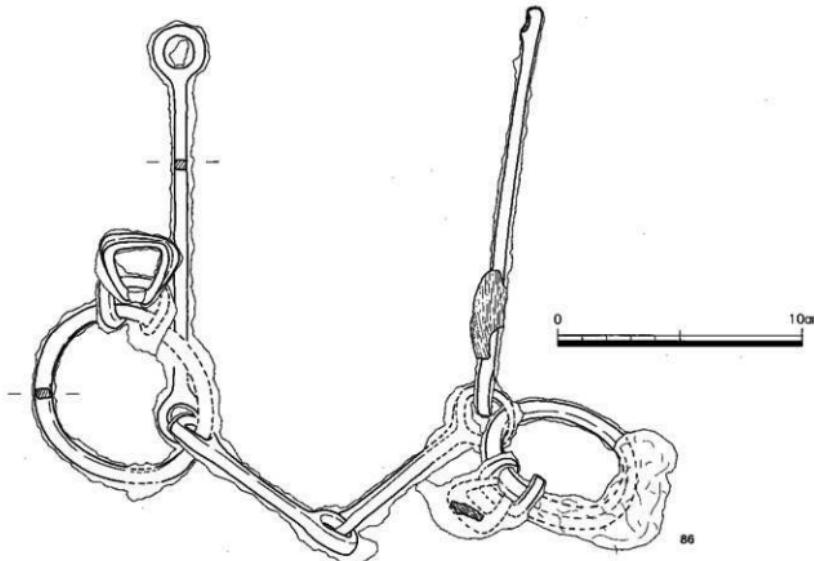
第82図 SC 5出土遺物実測図 (70.S=1/3 71~85.S=1/2)

■ SC 8 (第83~85図)

馬齒・轡(1点)・鏡(2点)が出土しているために馬埋葬土坑と考えられる。轡・馬齒と鏡がかなり隣接して出土していることや、土坑の規模などから頭部を切断して入れられたのではないかと推測する。轡(83)は立間が別造りの素環状鏡板付轡である。やや鋒がひどく不鮮明な部分もあるが鏡板は直径7.4cmの円形で、立間は別造りの連続式で2連の兵庫鎖系立間である。引手は長さ17.2cmで歯の付け根を屈曲させていない柄に強い捻りを施さない。引手の一部には有機質物質が付着している。2連の街の1つは同方向に環を造り、もう1つは90°捻って環を造っている。引手と街はともに棒状の先端を割り開いて環を成形している。引手と街が連結し、街と鏡板が連結している。鏡(87)は3連の兵庫鎖で鉤具がある方から一連目とすると1・2連目はほぼ同様の大きさであるが、やや2連目が小さく3連目はさらに小さくなる。鏡吊金具は長さ9.3cmで、断面が長方形の棒状を真ん中でU字に曲げ兵庫鎖の輪と連結させ、



第83図 SC 8平面図・断面図 ($S = 1/20$)

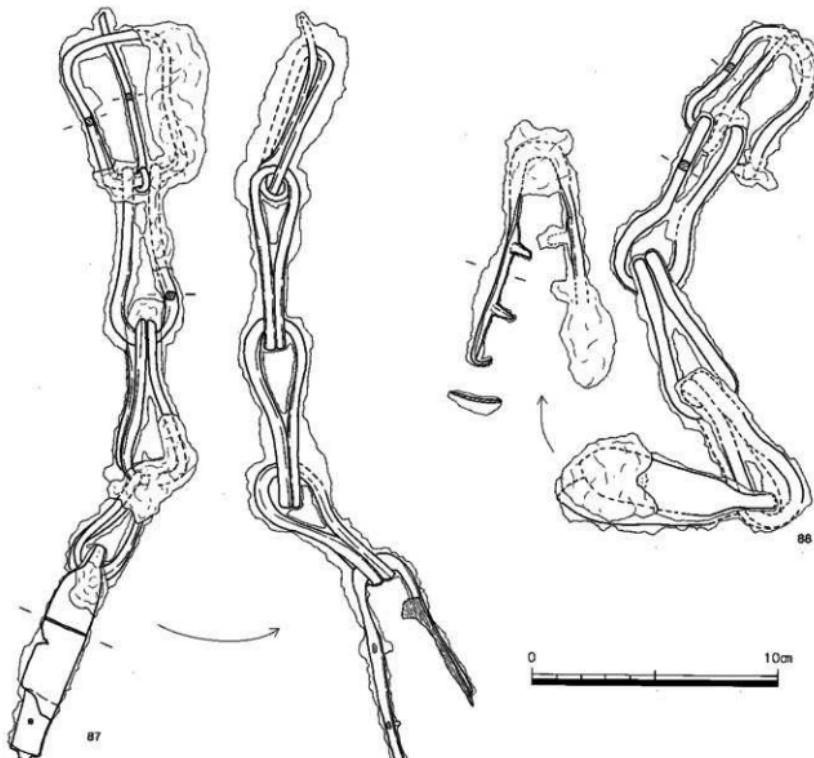


第84図 SC 8出土遺物実測図 I ($S = 1/2$)

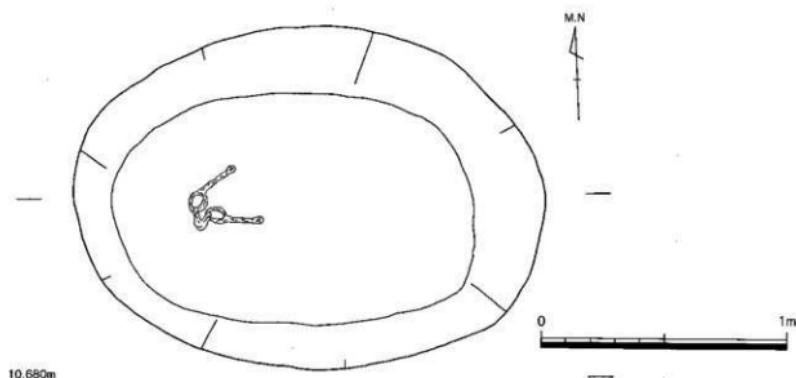
下部はその棒状の厚みを叩いて薄く延ばしている。鏡を留めるためのトゲ状の金具が2つ存在する。鏡吊金具には木質が残存していることから、木製と推測できる鏡を挟み込んでいたと考えられる。叩き延ばして薄くしているために先の厚みは1mmとかなり薄く、幅が狭くなる。銕具は中央よりややはずれた位置で幅が狭くなり、刺金は鏡で挟み込んで巻きつけ、巻き込んだ先端を叩いて同定している。反対の端部は叩いて薄くしている。鏡(88)は87とはほぼ同様であるが鏡吊金具の先端が三角形を呈している。

■ SC 15 (第86~87図)

床面からやや浮いた状態で立闇を造りつけている環状鏡板付轡(89)が出土しているために馬埋葬土坑と考えられる。主軸方向はS-80°-Eで梢円形を呈し、鏡の出土位置から頭位は東側と考える。環状鏡板付轡以外は出土していない。鏡板は直径が約8cmの梢円形を呈し、引手は引手壺をくの字に曲げ、鏡板と連結している環は曲げてなく、立闇は矩形で鏡板に造りつけている。2連の街の1つは同方向に環を造り、もう1つは90°捻って環を造っている。引手と鏡板が連結し、鏡板と街が連結しており引手と街は連結していない。引手と街はとともに棒状の先端を割り開いて環を成形している。

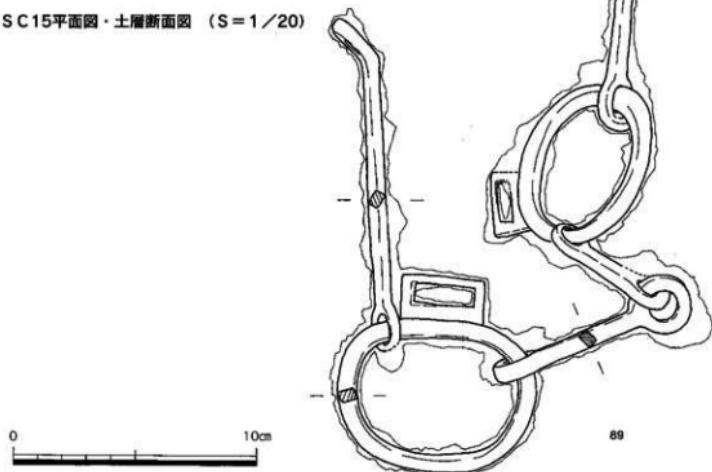


第85図 SC 8出土遺物実測図Ⅱ (S=1/2)



第86図 SC 15平面図・土層断面図 ($S = 1/20$)

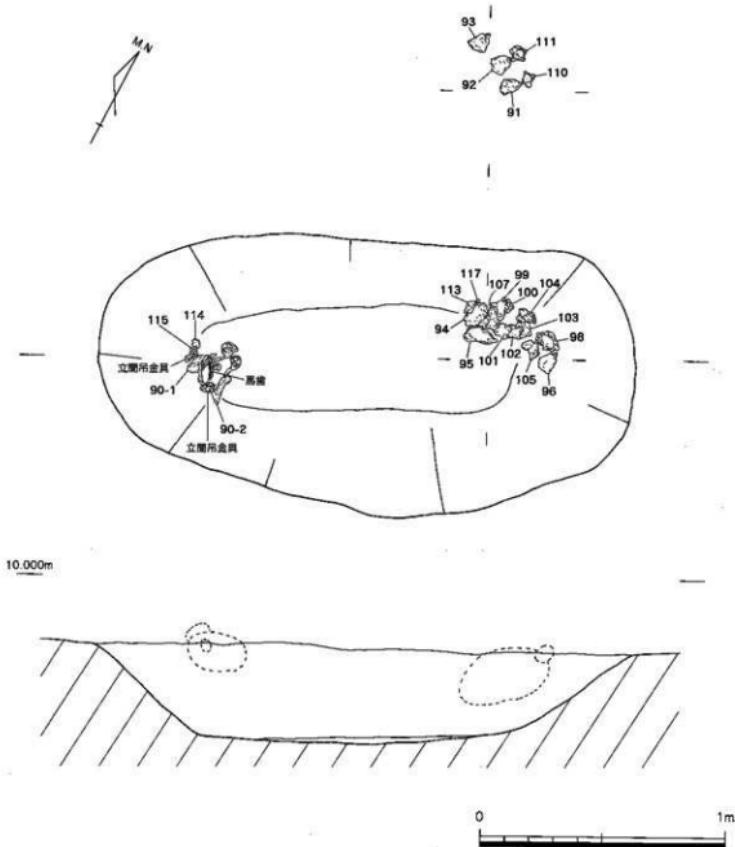
- ①耕作地土 (D2VR2/2) 砂質で多少土壌構造を有するが砂質で多くある
- ②耕作地土 (D2VR2/3) 砂質でより細かい土壌構造を有するが砂質で多くある
- ③耕作地土 (D2VR2/4) 砂質でより細かい土壌構造を有するが砂質で多くある
- ④耕作地土 (D2VR2/5) 砂質でより少く細かい土壌構造を有するが砂質で多くある
- ⑤堆積地土 (D2VR3/4) 砂質でしまさなく多く基本地盤を多く含む



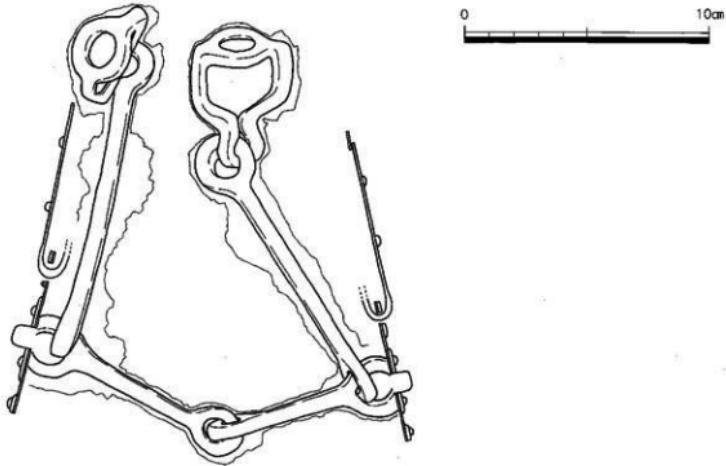
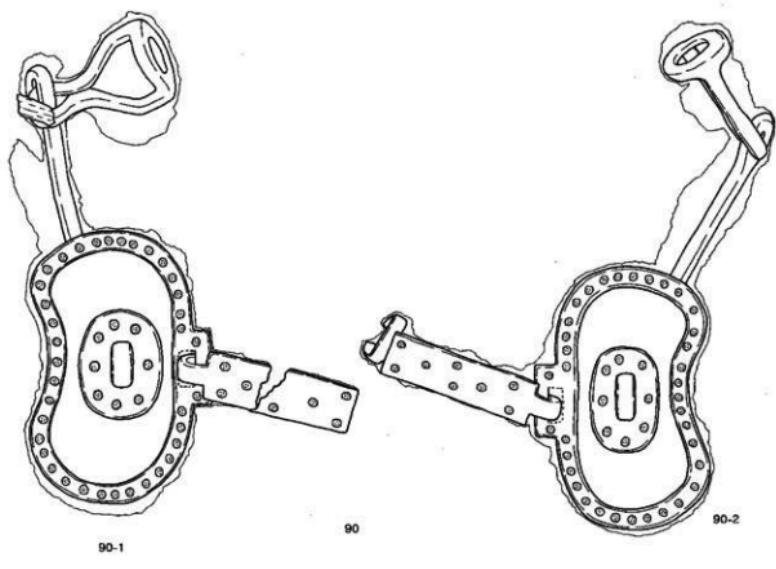
第87図 SC 15出土遺物実測図 ($S = 1/2$)

■ SC 16 (第88~93図)

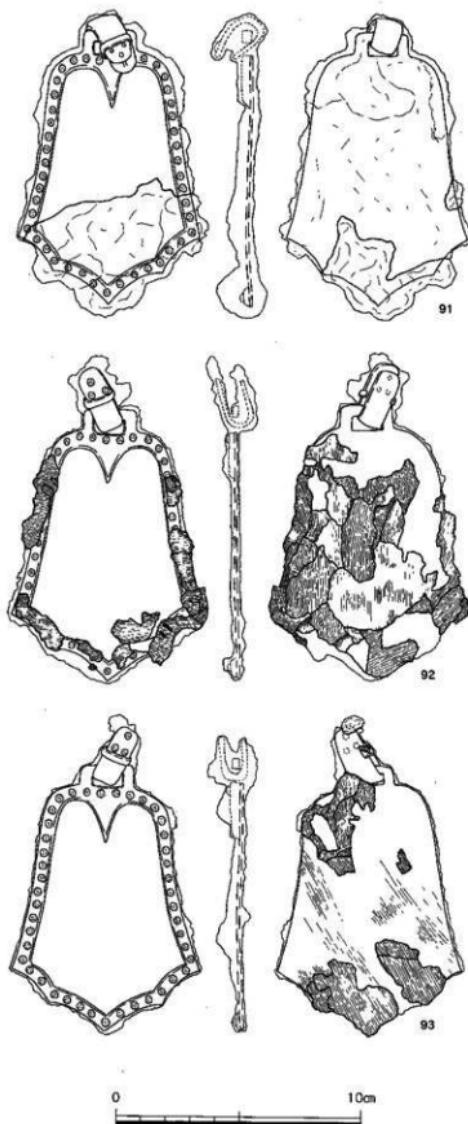
轡(1点)・杏葉(7点)・雲珠(1点)・辻金具(14点)・鉢具(1点)・銚(7点)・馬齒の一部が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。櫛5号墳の周濠に接する位置で、周濠の円に沿うように造られ營まれた馬埋葬土坑で、金銅装馬具装着の殉葬馬である。現地表面より約1.4m掘り下げた位置で検出できた。櫛5号墳の周濠を検出した面と同じである。検出面より上層は擾乱を受けており不明であるが、掘り方はかなり大きくなると推測できることから、馬一頭が入る大きさであると考えられる。詳細は後述するが馬具の出土状態や分析結果などから、装着したまま埋葬し、元位置をとどめていると考えられる。鞍や鐙などは出土していないことから鞍と鐙ははずされ、受け継がれたのではないかと推測する。主軸方向はS-60°-Eで、馬具や馬齒の出土位置から考えると馬の頭の位置は西側で、足は南側、背は北側、



第88図 SC 16平面図・断面図 (S = 1/20)



第89图 SC16出土遗物实测图 I (S = 1/2)



第90図 SC 16出土遺物実測図Ⅱ (S = 1/2)

尻は東側と考えられる。出土した馬具は鍍金・鍍銀部分なども良好な状態で出土し、鉄地金銅張製である。

図(90)は内湾橢円形鏡板付替で、左右の鏡板に打たれている鉢の数が違い、形態もやや相違する。内湾橢円形鏡板は縁を伴う空豆形で90-1は鉢が35個で鏡板白体もやや大きく、90-2は鉢が34個で鏡板はやや小さい。鉢の数などはX線による観察でも何回も確認したが、同じ結果であった。鉢は鉄製で銀被せである。全体的には形態は同じで、90-1の鏡板は最大長11.1cm、最大幅が6.5cm、90-2の鏡板は最大長10.8cm、最大幅6.2cmであり、それほど変わりはないが、下部の凹みの屈曲の仕方が90-1はややきつく、90-2はやや緩やかという差が、鏡板の縦側が相違し、覆い部になるからは鉢がひどく不明であるが、この部分の形態の相違にもつながったのであろう。覆い部は90-1が 4.5×3.4 cmの橢円形で、90-2は 4.3×2.8 cmの橢円形である。長さは変わらないが幅が0.6cmも違う全体的に90-1のほうが大きく見えると考えられる。90-1・2ともに矩形の立開を造り、立開には断面が長方形の棒状を通して曲げ、薄く叩き延ばし 6×2 cmの薄い板状の立開吊金具が伴っている。立開吊金具には2個、1個と規則正しく、合計8個の鉢を交差で打っている。引手と銜は連結しており、鏡板の内側で銜外環に直接連結している。引手壺は別造りの瓢形引手壺を伴っている。引手と銜はともに棒状

の先端を割り開いて環を成形している。

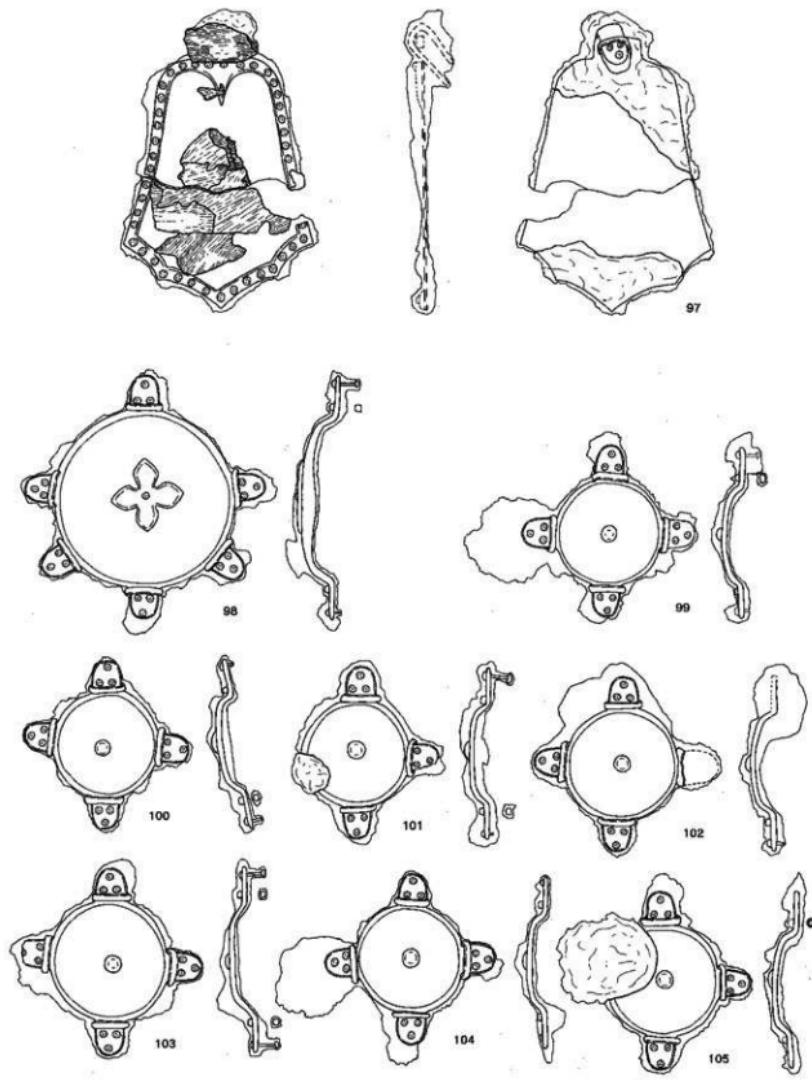
90-2には立開吊金具の上部端に責金具が残存し、付着していることから、立開吊金具の上部で責金具によって固定していたと考える。轡には有機質物質と馬歯の一部が付着している。

杏葉(91~97)は棘葉形杏葉で7点が出土し、5棘形で鉄製の縁金を伴っている。縁金内部には文様はない。鋳はほぼ等間隔に44個を打っている。鉄製で銀被せである。ほぼすべてが最大長11.2cm、最大幅7.7cmである。吊金具の垂下方式は、長さ5cm、幅1cm、厚さ0.2cmの細い舌状で、立間に通して長さがほぼ真ん中のところでU字に曲げて連結させ、3鋸を3角に打ち、責金具を作う。杏葉(94~96)と辻金具(110~111)は表面を下にして並んだ状態で出土している。杏葉(92~97)の裏面には有機質物質が付着していることから独立行政法人奈良文化財研究所の高妻洋成氏に分析を依頼し、動物性もしくは植物性の有機質物質が付着しており、獸毛が付着していた可能性が高いが、錯の進行に伴いそれらが解けて中が空洞化した管状の錯のみが残存していること、95の表面には木材(針葉樹木)が付着しているということが判明した。

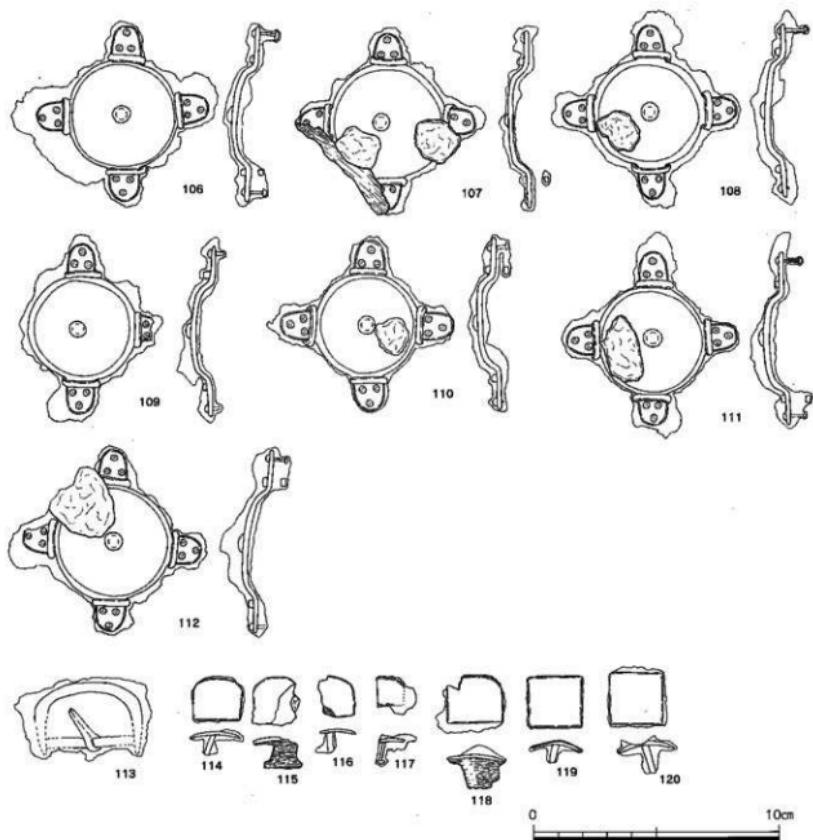
雲珠(98)は全長10cmの鉄製で、低い鉢形を呈し、前方に1脚、後方に5脚を配する偏在配置六脚鉢状雲珠である。細い半円形の脚部に3鋸を3角に打ち、責金具を作う。本体の鍛造は脚部分を切り出してから鍛造して折り曲げたのでは無く、半球形の開口部円周状を全ての脚部分を一体として麦藁帽子状に折り返し、その後1脚ずつ切り出した



第91図 SC 16出土遺物実測図Ⅲ (S=1/2)



第92図 SC 16出土遺物実測図IV (S=1/2)



第93図 SC 16出土遺物実測図V (S=1/2)

のではないかと推測する。この方法だと脚の角度も、接続する革帶や杏葉などの位置に合わせて設定することが可能と考えられる。頂部には四葉の飾りがついている。脚部の鉢、責金具、頂部の四葉は鉄製で銀被せである。

辻金具(99~112)は14点が出土し、すべてが尻繋に用いられたものである。低い鉢形を呈し、4脚を均等間隔に配置している鉢状辻金具で、細い半円形の脚部に3鉢を打ち、責金具を伴う。頂部には半円球状の飾りを施す。脚部の鉢・責金具・頂部の半円球状の飾りは鉄製で銀被せである。

鉗具(113)は鉛がひどく不明な部分が多いが、刺金は棒状の先端を削り開いて環を成形して連結させ、反対の先端は叩いて薄くしている。鉄地金銅装である。鉗具は尻側から出土している。

鉢は爪形(114~118)、方形(119~120)が出土し、鉄地金銅装で115と118には有機質物質が付着している。すべての鉢は中心がややへこみ緩やかなくの字状の断面になる。鉢は114~117、119~120は頭の轍が出土している周辺から出土し、117、118は尻側から出土している。

馬具の一部や動物性もしくは植物性の有機質物質が轍や杏葉に付着し、その分析結果や馬具の出土状態などから面巻・尻巻を装着したまま埋葬されたと考える。

時期については、棘葉の形態や鉢の多さなどから考えると6世紀前半頃のものと考えられるが検討の余地は残る。

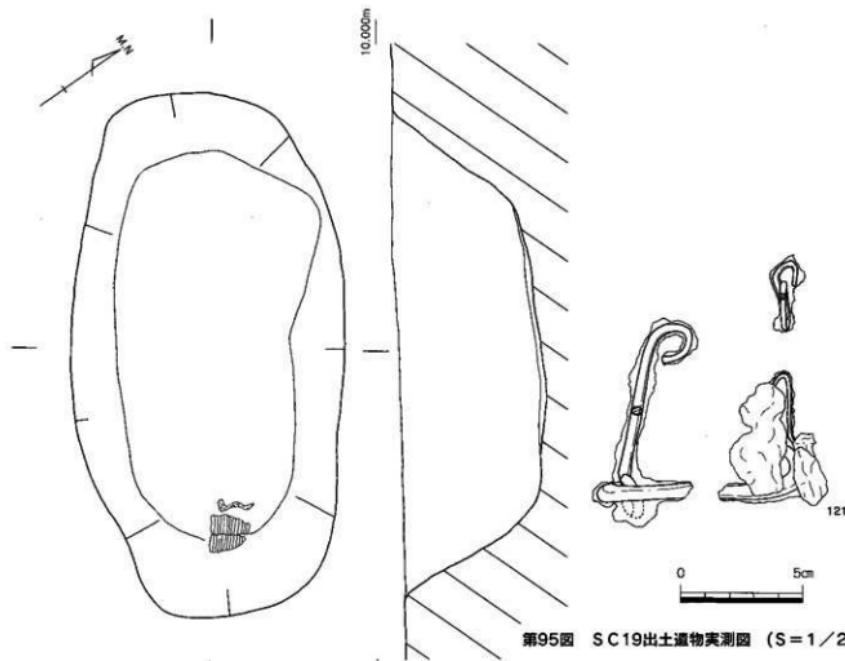
第20表 SC16出土遺物計測表 (単位cm 重量g)

番号	種別	器種	長さ	幅	重量	備考
90	馬具	轍(90-1)	19.8	14	—	287.5 銀金製、馬齒が付着
		轍(90-2)	20.8	15	—	308.8 動物性or植物性の有機質物質が付着
91	馬具	杏葉	12.9	7.7	—	65.1 銀金製、新・貴金属は銀鉄製
92	馬具	杏葉	12.2	7.7	—	74.8 動物性or植物性の有機質物質が付着
93	馬具	杏葉	12.4	7.4	—	82.2 銀金製、新・貴金属は鐵鉄製
94	馬具	杏葉	11.8	7.4	—	107.6 動物性or植物性の有機質物質が付着
95	馬具	杏葉	12.7	7.7	—	78.5 銀金製、表面に針葉樹木が付着
96	馬具	杏葉	12.4	7.7	—	82.0 動物性or植物性の有機質物質が付着
97	馬具	杏葉	11.8	7.7	—	82.0 銀金製、新・貴金属は鐵鉄製
98	馬具	蓋珠	10	9.8	直徑7.4	95.8 新・貴金属部分は銀銀製
99	馬具	辻金具	7.1	7	直徑4.4	59.7 新・貴金属部分は銀銀製
100	馬具	辻金具	6.8	6.8	直徑4.4	52.2 新・貴金属部分は銀銀製
101	馬具	辻金具	7.1	(5.6)	直徑4.4	52.8 新・貴金属部分は銀銀製
102	馬具	辻金具	7.2	(6.1)	直徑4.7	75.9 新・貴金属部分は銀銀製
103	馬具	辻金具	7.6	(7.4)	直徑4.8	61.9 新・貴金属部分は銀銀製
104	馬具	辻金具	7	7	直徑4.5	48.2 新・貴金属部分は銀銀製
105	馬具	辻金具	7.2	(5.8)	直徑4.7	55.6 新・貴金属部分は銀銀製
106	馬具	辻金具	7.1	7	直徑4.5	62.4 新・貴金属部分は銀銀製
107	馬具	辻金具	7.2	7.1	直徑4.8	57.6 新・貴金属部分は銀銀製
108	馬具	辻金具	7.2	7.2	直徑4.5	47.9 新・貴金属部分は銀銀製
109	馬具	辻金具	7	(5)	直徑4.4	41.7 新・貴金属部分は銀銀製
110	馬具	辻金具	7	7	直徑4.5	50.0 新・貴金属部分は銀銀製
111	馬具	辻金具	7.1	7	直徑4.5	43.6 新・貴金属部分は銀銀製
112	馬具	辻金具	7.5	7.3	直徑4.8	64.2 新・貴金属部分は銀銀製
113	馬具	銀具	4.4	2.9	—	26.0 銀金製
114	馬具	銀	1.8	2×1.2	—	3.0 銀金製
115	馬具	銀	1.9	(1.6×1.4)	—	3.0 銀金製、有機質物質が付着
116	馬具	銀	1	(1.5×1.7)	—	0.99 銀金製
117	馬具	銀	1.2	(1.1×1.2)	—	1.7 銀金製
118	馬具	銀	1.9	2.3×2	—	6.7 銀金製、有機質物質が付着
119	馬具	銀	1	2.1×2.1	—	2.9 銀金製
120	馬具	銀	1.3	2.1×2.2	—	5.5 銀金製

*カッコ表記は欠損しているために残存値である

■ SC19 (第94~95図)

馬齒と轡と考えられる鉄器が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。主軸方向は S-55° -W である。121は轡と考えられるが、銷がひどく不明な部分が多く、非常に雑な造りで引手壺なども曲げて造つただけであり、しかも非常に細く轡として機能していたのか、本当に轡なのか判断しがたいが、馬齒の横で出土していること、形状的に轡としか考えることができないことから素環轡と考えられる。

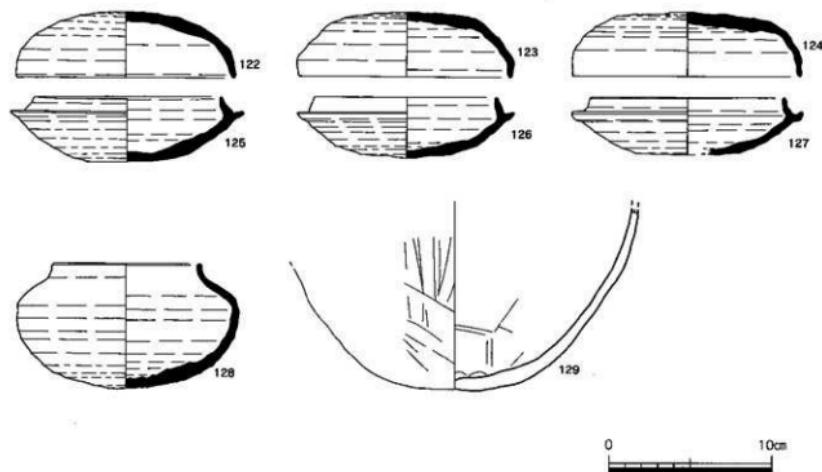


第94図 SC19平面図・断面図 (S = 1/20)

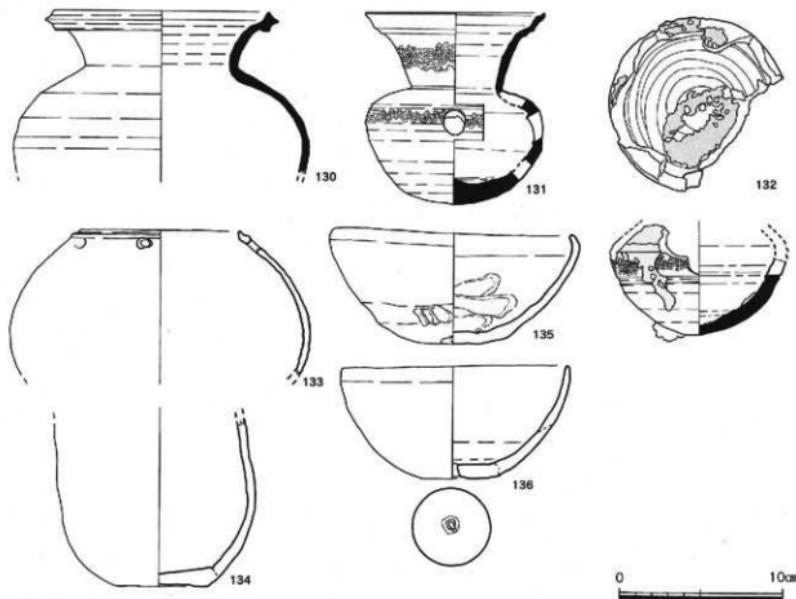
■ 一括遺物 (第96~97図)

調査区の一括遺物である。122~129の須恵器や土師器はF区で出土している。須恵器の坏身(126~127)はそれぞれ口径が約11.5cm前後で、坏蓋(122~124)はそれぞれの口径が約14cm前後でTK209型式の古段階と考えられる。128は須恵器の無頸壺である。129は土師器の甕の体部から底部である。130~136の須恵器や土師器はH区で出土している。130は須恵器の甕である。131は須恵器のハソウである。頸部と肩部に柳描波状紋を施す。外面には部分的に自然釉が付着し、内面は同心円の叩きである。132は須恵器のハソウの胴部から底部である。内外面のアミ掛け部分は鉄分が付着していることから転用されたものと推測する。133は土師器の無頸壺で口縁部付近に焼成前に穿孔を施している。1/3しか残存していないが2カ所の穿孔を確認できた。その穿孔の上には突帯がみられる。134は土師器の深鉢で胴部から底部のみが残存している。底部はやや上げ底気味である。135、136は土師器の坏である。135は全体的に指頭痕が顯著である。口縁部は内湾し、器高が高い136の口縁部はやや内傾しながら直立気味に立ち上がり、器高が高い。底部は外面から穿孔している。

F区の一括遺物は須恵器がTK209型式の古段階の6世紀末頃に相当すると考えられる。SD1と時期的に同じであり、遺構に関しても全体的にこの時期に相当していると考えられる。一方、H区の一括の出土遺物は須恵器や坏から考えると5世紀末から6世紀初頭と考えられる。ほとんどの遺物が第3号墳の周辺の生きている層から出土していることから考えると第3号墳も第2号墳とはほぼ同時期といえるのではないかと考えられる。



第96図 山崎下ノ原第1遺跡出土遺物実測図 I (S=1/3)



第97図 山崎下ノ原第1遺跡出土遺物実測図Ⅱ (S = 1/3)

第21表 山崎下ノ原第1遺跡土坑計測表 (単位cm)

遺構番号	長軸	短軸	深さ	遺構形態	出土遺物
SC1	1.92	1.74	0.59	楕円形	無
SC2	2.4	1.68	0.47	楕円形	無
SC3	1.86	1.39	0.37	楕円形	無
SC6	1.89	1.42	0.6	楕円形	無
SC7	20.8	1.28	0.48	楕円形	無
SC9	1.3	1.04	0.35	楕円形	無
SC10	2.24	1.68	0.37	楕円形	無
SC11	2.0	1.56	0.53	楕円形	無
SC12	2.01	1.52	0.62	楕円形	無
SC13	2.36	2.06	0.37	楕円形	無
SC14	2.2	1.84	0.58	楕円形	無
SC17	—	—	0.27	楕円形	無
SC18	—	—	0.26	楕円形	無
SC20	2.86	1.2	0.44	楕円形	無
SC21	1.5	1.3	0.81	楕円形	無
SC22	—	—	0.45	楕円形	無
SC23	—	—	0.46	楕円形	無
SC24	2.54	1.35	0.7	楕円形	無

*SC17、18、22、23については調査区外に延びるため計測不能である。

*計測値は検出面からの値である。

第22表 山崎下ノ原第1遺跡出土鉄器計測表

(単位cm)

番号	遺構	種別	器種	最大長		厚さ		備考
1	2号墳主体部	鋼鏡	乳文鏡	8.7		0.2		裏・布織縫(芋麻) 不明な縫を残す
<hr/>								
番号	遺構	種別	器種	最大長		厚さ		備考
2	2号墳主体部		大刀	100		0.6		木質残存
32	SD1		鉄刀	21.4		0.3		布織縫付蓋
39	SD1		刀子	12.1		0.2		木質残存
50	SD2		刀子	13.8		0.2		木質残存
56	SD3		刀子	11.9		0.2		木質残存
60	SD4		鉄刀	34.6		0.5		木質残存・布織縫付蓋
<hr/>								
番号	遺構	種別	器種	最大長				備考
61	SD4	鉄斧	袋状鉄斧	9.3	3.8	1		木質・織縫付蓋
<hr/>								
番号	遺構	種別	器種	最大長	総身長	頭部長	茎部長	備考
3	2号墳主体部	鉄鏡	三角形鏡	17.5			7.6	木質・樹皮残存
4	2号墳主体部	鉄鏡	半頭鏡	18.1			7.7	木質・樹皮残存
5	2号墳主体部	鉄鏡	半頭鏡	15.7			6.6	木質・樹皮残存
6	2号墳主体部	鉄鏡	三角形鏡	17.1	2.0	6.7	7.8	木質・樹皮残存
7	2号墳主体部	鉄鏡	三角形鏡	15.3	2.1	7.2	6.1	木質・樹皮残存
8	2号墳主体部	鉄鏡	半頭鏡	16.0	2.0	6.7	7.1	木質・樹皮残存
9	2号墳主体部	鉄鏡	三角形鏡	17.1		7.0	7.4	木質・樹皮残存
17	2号墳周溝内	鉄鏡	半頭鏡	8.5	2.8		5.7	一部木質残存
18	2号墳周溝内	鉄鏡	無蓋三角形鏡	(8.0)				木質残存
19	2号墳周溝内	鉄鏡	長頭鏡	(4.6)				木質残存
33	SD1	鉄鏡	三角形鏡	11.7	6.8		4.8	3本とも木質・樹皮残存
	SD1	鉄鏡	三角形鏡	(11.6)	7.2		(4.4)	
	SD1	鉄鏡	三角形鏡	(9.6)	6.8		(2.4)	
34	SD1	鉄鏡	半頭鏡	10.1	6.6		3.6	木質・樹皮残存
35	SD1	鉄鏡	半頭鏡	10.6	7.2		3.3	木質・樹皮残存
36	SD1	鉄鏡	方頭鏡	(9.7)	6.2		3.5	木質・樹皮残存
37	SD1	鉄鏡	柳葉鏡	11.6	6.0	1.7	4.8	木質・樹皮残存
38	SD1	鉄鏡	三角形鏡	(12.9)	4.4	2.1	(6.0)	木質・樹皮残存
47	SD2	鉄鏡		(12.3)	6.1			木質残存
48	SD2	鉄鏡	三角形鏡	(15.1)				木質木質・樹皮残存
49	SD2	鉄鏡	三角形鏡	(17.2)	5.7		(8.1)	木質残存
62	SD4	鉄鏡	長頭鏡	14.8			4.5	木質木質・樹皮残存

* カッコ表記は欠損しているために残存値である

第3節 まとめ

山崎下ノ原第1遺跡では直線距離にして約100mの範囲内の道路幅の調査で滅失古墳を3基、土壙墓5基、馬埋葬土坑6基を確認することができた。しかも現存している櫛4・5・6号墳を含めると古墳は6基ということになる。一つの古墳に対して数基の上壙墓や馬埋葬土坑が存在していると考えられると、周辺地形や確認できた遺構の位置や時期関係などからも本遺跡周辺には他に多数の滅失古墳、土壙墓、馬埋葬土坑が存在する可能性がかなり高いのではないかと考えられる。

櫛5号墳は周濠に隣接して確認できたSC16の鉄地金銅張製の馬具から6世紀前半頃ではないかと考えられる。県内でも珍しい鉄地金銅張製の馬具がほぼ一式で出土していることからかなりの有力者と考えられ、この地域を治めていた首長が埋葬されているのではないかと考えられる。その墳丘を中心とし、周濠から一定の間隔をあけて從者などの土壙墓が周濠の円と同じ円を描くように配置、展開され、主軸や頭の位置も櫛5号墳の中心を向いていると考えられる。SD2~4の3基の土壙墓は出土遺物などからSD2が6世紀末頃、SD3が6世紀末から7世紀初頭、SD4が6世紀後半に造られたと考えられるところから、SD4→SD2→SD3の順に造られたと考えられる。第1号墳にはSD1とSC8・15の土壙墓と馬埋葬土坑が付随すると考えることが可能であるが、SD1は主軸が墳丘を向いていないこと、頭の位置が東側と考えられることなどから考えると、他の滅失古墳が存在し、その滅失古墳に付隨する可能性が高い。時期的には出土遺物などからSD3よりやや古い時期に造られたと考えられる。SC8・15は位置関係から第1号墳に付隨する馬埋葬土坑と考えられる。ほかにSC1・2が存在するが、やや離れておりことなどや付隨する馬埋葬土坑は古墳の近くに造られていると考えると、他の滅失古墳が存在し、その滅失古墳に付隨する可能性が高い。これらのことから調査区(F区)のすぐ東側にSD1とSC1・2が付隨する滅失古墳が存在する可能性が高いのではないかと推測する。SD5とSC19は位置からみると第2号墳に付隨するものと考えられるが、SD5とSC19は6世紀後半、第2号墳は5世紀末と時期が違うことから櫛6号墳に付隨すると考えられるが、やや離れていることから第2号墳や櫛6号墳に付隨する可能性は低く、調査区(H区)の西側に他の滅失古墳が存在するのではないかと推測する。SD5の時期はSD3よりやや古く、SD1よりはやや新しい時期に造られたと考えられる。

本遺跡で確認できた遺構や遺物から考えると、第2・3号墳は5世紀末から6世紀初頭で、初期群集墳的な様相を呈しており、この地域の古墳群で古墳が築造された最初ではないかと考えられる。そのあと6世紀前半頃に櫛5号墳が築造され、調査で確定な時期が判明しなかつたが、構築方法や規模が櫛5号墳とほぼ同じであることから櫛6号墳も同時期ぐらいではないかと考えられる。第1号墳からは遺物などが出土していないが、周辺で出土した須恵器や付隨すると考えられるSC8・15から出土した馬具からは6世紀後半に築造されたのではないかと考えられる。これらのことから第2・3号墳→櫛5号墳→櫛6号墳→第1号墳の順に築造されたと考えられる。6世紀後半頃になると土壙墓にも墳丘を築造するのに使用していた明黄褐色粘土が使用されていることから、この時期はある程度容易に粘土が入手できた時期になり、6世紀末から7世紀初頭頃の時期には衰退期になっていくのではないかと考えられる。

これらのことから、山崎下ノ原第1遺跡は5世紀末から6世紀末までの約100年間、墓域として存続した古墳群で、櫛4・5・6号墳と第1~3号墳の6基がかなり隣接して造られていること、土壙墓、馬埋葬土坑が切り合うことなく数多く存在することから、本遺跡周辺一帯に古墳群が形成されていた可能

性が高く、官道の近くであることが推測されていることや、昔の大淀川の入り江付近であったという立地条件から考えると、政治的、軍事的様相ではなく、むしろ商業的な様相を呈し、この地域を治め繁栄していた一族の墓域ではないかと推測する。現在は穂古墳群下原地区とされた円墳の3基のみであるが、今回の調査で滅失古墳が3基も確認でき合計6基となり、さらに周辺に滅失古墳が存在する可能性が高いこと、穂古墳群とは江田原・麓地区(穂の地名が存在する所)、村角・大島地区、下原地区的総称であり、距離的に下原地区だけでなく、3地区はいずれもかなり離れていることなどからそれぞれ別々の古墳群として認識したほうが良いのではないかと考えられる。そして、県内で確実に金銅張製の馬具が出土したことが分かっているのは西都原古墳群内、百塚原古墳群内、持田49-56号墳、新田原45号墳、一本木横穴の6遺跡にしか過ぎず、今回のように鉄地金銅張製の馬具がほぼ一式、比較的良好な状態で馬埋葬土坑から出土し、記録保存が確実にできているのは県内で唯一といってよい。しかも分析により、獸毛が付着していた可能性が高いが、鍔の進行に伴いそれらが解けて中が空洞化した管状の鞘のみが残存していることが判明し、装着したまま埋葬されたと考えられ、その他にも馬埋葬土坑が5基も確認できることから、馬埋葬土坑の観点からみても、好例な遺跡である。近年、県内では馬埋葬土坑や馬具の出土例が増加していることから今後、更なる検討が必要であろう。

砂丘上という特異な立地で調査はかなり困難を極めたが、これだけの遺構や遺物を検出することができた。遺構は想像していたよりも深く、細心の注意は必要だが簡単には崩れないという事がわかり、遺物も立地から考えると塙分が強く鉄器などは残存していないのではないかと考えられていたが、比較的良好な状態で出土した。これは、耕作をするには砂を新たに盛っているために遺構や遺物の破壊が最小限にとどまり、埋まつたあと外気に触れることなく何も影響を受けず、一定条件のままで保存されていた状態であったからと考えられ、鉄器や銅鏡・有機質物質などの残存状態が比較的良好であったと推測する。のことから、今後、砂丘上だからなのではという先入観を捨て、あるという認識をし、嫌忌せぬ発掘調査を実施することを提示しておきたい。

<引用・参考文献>

- ・ 1966 田辺昭二「陶邑古墳群」平安学園クラブ
- ・ 1976 「陶邑I」大阪府文化財調査報告書第28報 大阪府教育委員会
- ・ 1978 中村浩「和泉陶邑の出土遺物の時期編年」「陶邑III」大阪府文化財調査報告書第30報 大阪府教育委員会
- ・ 1978 「陶邑IV」大阪府文化財調査報告書第30報 大阪府教育委員会
- ・ 1984 関安光彦「いわゆる素面の骨について」「日本古代文化研究」古墳文化研究会-PHALANX-
- ・ 1985 坂本義夫「馬具」考古学ライブラリー-34 ニュー・サイエンス社
- ・ 1987 千賀久「古墳時代の初期馬具」「櫛原考古学研究所論集」第四 櫛原考古学研究所編 古川弘文館
- ・ 1988 杉山秀宏「古墳時代の鐵鏡について」「櫛原考古学研究所論集」第八 吉川弘文館
- ・ 1988 千賀久「日本出土の初期馬具の系譜」「櫛原考古学研究所論集」第九 吉川弘文館
- ・ 1990 財团法人千葉県埋蔵文化財センター「佐倉市大作遺跡」千葉県文化財センター調査報告第172集 千葉県土地開発公社
- ・ 1991 「古墳時代の研究」第8巻副題是 雄山出版株式会社

- ・1992 小野山節「古墳時代の馬具」『日本馬具大綱』第1巻古代上 日本中央競馬会 吉川弘文館
- ・1992 日本馬具大綱編集委員会「日本馬具大綱」第1巻古代上 日本中央競馬会 吉川弘文館
- ・1993 桃崎裕輔「古墳に伴う牛馬供養の検討」「古文化講座」第31集 九州古文化研究会
- ・1988 「宮崎県史」資料編考古2 古崎県史刊行会
- ・1994 千賀久「日本出土の初期馬具の系譜2」「櫛原考古学研究所論集」第十二 吉川弘文館
- ・1994 松井章 神谷正弘「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の海戦について」「考古学雑誌」第80巻第1号 日本考古学会
- ・1995 「北原牧地区遺跡 上原遺跡下地」新富町文化財調査報告書第18集 新富町教育委員会
- ・1995 増田一格「飛鳥時代復原品の羅年にかかる追試作業」「土壤考古」第19号 上原考古学研究会
- ・1995 宮代栄一「宮崎無出土の馬具研究」「九州考古学」第70号九州考古学会
- ・1996 「特別展貢金に魅せられた倭人たち」島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- ・1996 宮代栄一「倭人たちの馬装・面葉を中心に~」「特別展貢金に魅せられた倭人たち」島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- ・1996 内山敏行「古墳時代の骨と青銅の変遷」「特別展貢金に魅せられた倭人たち」島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- ・1996 宮代栄一「鞍具と垂珠・辻金具の変遷」「特別展貢金に魅せられた倭人たち」島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- ・1996 宮代栄一「熊本県出土の馬具の研究」「肥後考古」第9号 肥後考古学会
- ・1996 「筑野遺跡・萩原第2遺跡」市道下北方遺跡改良工事に伴う発掘調査報告書 岩崎市教育委員会
- ・1997 宮代栄一「古墳時代の面葉製造の復元-X字脚辻金具はどこにつけられたのか~」THOMINIDS VOLOOI CRA
- ・1997 「宮崎県史」通史編原始・古代 宮崎県史刊行会
- ・1998 「大町遺跡」宮崎市文化財調査報告書第33集 宮崎市教育委員会
- ・1998 「古墳時代の研究」第6巻土師器と須恵器 雄山閣出版株式会社
- ・1998 宮代栄一「古墳文化における地域性—九州地方出土の環状鏡板村書を中心に~」「鞍台史学」第102号
- ・1999 舟川隆司「内輪物円形鏡板村書の馬装」「龍谷史談」第111号
- ・1999 「上塙治榮山古墳の研究」島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県教育委員会
- ・2001 松井和幸「日本古代の鉄文化」旗山閣
- ・2001 桃崎裕輔「舞葉形吉葉・鏡板の変遷とその意義」「筑波大学先史・考古学研究」第12号 筑波大学歴史・人類学系
- ・2001 「別荘遺跡」宮崎市文化財調査報告書第48集 宮崎市教育委員会
- ・2001 「島内地下式横穴墓群」えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集 えびの市教育委員会
- ・2002 今堀屋寅重・松永泰寿「日向における古墳時代中～後期の上解器」「第5回九州前方後円墳研究会発表資料」九州前方後円墳研究会実行委員会
- ・2002 和田理香「九州における古墳時代の鐵器」「考古学ジャーナル」No496 ニュー・サイエンス社
- ・2002 桃崎裕輔「九州地方における騎馬文化の特質と軍事的背景」「考古学ジャーナル」No496 ニュー・サイエンス社
- ・2002 「T田原第3遺跡」宮崎市文化財調査報告書第50集 宮崎市教育委員会
- ・2002 「北中遺跡II」宮崎市文化財調査報告書第51集 宮崎市教育委員会
- ・2002 甲斐聰光「古墳時代日向の馬運搬土壤集成」「平成14年度九州考古学総合研究発表資料」九州考古学会
- ・2003 宮代栄一「古墳時代における馬頭鏡構造の復元ー馬頭が示すものー」「HOMINIDS VOLOO3 CRA
- ・2003 桥本達也「南霧鉄器からみる南九州の古墳時代」「前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」第6回九州前方後円墳研究会大会事務局
- ・2003 勝井大祐「南九州鉄器集成」「前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」第6回九州前方後円墳研究会大会事務局

第23表 山崎下ノ原第1遺跡出土土器觀察表(1)

番号	出土地	性質	形態	部位	法面(ox)	内面	外側	調査分		色調	表面	
								施主	施成			
10 2号墳 周縁	土 壤	外壺	完形	口縁	11.7	4.6	同底ナデ	上位:底へラ剥り 下位:同底ナデ	織目な白色陶	良好	灰	灰
11 2号墳 周縁	土 壤	口縁～底部	11.2	18.8	側面内のミガキ ト位:斜め方角のミガキ 底:黒	4mm以上の米褐色 1.5mm以上の褐色	無色透明光沢・褐色光沢	良好	にふくらみ に長い痕跡	内外斑・風化著しい 赤色調を帯びる	灰	
12 2号墳 周縁	土 壺	口 縁	15.8	7.7	ミガキ	ミガキ(単位不明)	ミガキ(単位不明)	精良	良好	明赤陶	明赤陶	
13 2号墳 周縁	土 壺	口縁～底部	15.2	6.3	上位:側面ナデ 下位:底面ナデ	ミガキ(単位不明)	上位:底へラ剥り ミガキ 下位:側面へラ剥り ミガキ	1mm以下の米褐色 2mm以下の赤褐色	良好	灰	灰	
14 2号墳 周縁	土 壺	口 縁	16.8	7.7	ミガキ	ミガキ(単位不明)	無色透明光沢・褐色光沢	無色透明光沢・褐色光沢	良好	灰	灰	
15 2号墳 周縁	土 壺	口縁～底部	17.6	7.7	ヘラ剥り	ヘラ剥り ミガキ	側面・底面 側面・白色光沢	側面・白色光沢 底面・白色光沢	良好	灰	灰	
16 2号墳 周縁	土 壺	口縁～底部	14.5	8.2	単位不明	ミガキ(単位不明)	上位:底面 下位:同底ナデ	3mm以下の褐色 2mm以下の白色	良好	灰	灰	
20 SD1	須	外壺	完形	口 縁	14.6	3.8	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	4mm以下の乳白色	良好	灰	灰
21 SD1	須	坏身	完形	口 縁	12.9	4.0	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:ヘラ剥り	側面～6.5mmの乳白色	良好	灰	灰
22 SD1	須	外壺	完形	口 縁	14.6	4.4	同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	1mm以下の褐色 2mm以下の白色	良好	灰	灰
23 SD1	須	坏身	完形	口 縁	13.0	4.0	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	2mm以下の乳白色	良好	灰	灰
24 SD1	須	外壺	完形	口 縁	13.2	3.9	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	側面～1mmの白色	良好	灰	灰
25 SD1	須	坏身	完形	口 縁	11.5	4.2	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	6mm以下の白色	良好	灰	灰
26 SD1	須	外壺	完形	口 縁	13.7	4.2	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	4mm以下の乳白色 4mm以下の白色	良好	灰	灰
27 SD1	須	坏身	完形	口 縁	12.0	4.2	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	上位:同底ナデ 下位:同底ナデ	側面～2mmの灰白・乳白色	良好	灰	灰
28 SD1	須	外壺	口縁・大穴附	口 縁	13.4	3.5	同底ナデ	上位:ヘラ剥り 下位:同底ナデ	5mm以下の灰白・褐色	良好	灰	灰
29 SD1	須	提挽	口縁～底部	口 縁	14.3	—	ミガキ	割り カキ目 ミガキ	5mm以下の灰・米白色	良好	灰	灰
30 SD1	土	坏身	口 縁	口 縁	11.8	4.1	同底ナデ 底面	上位:同底ナデ 下位:ヘラ剥り	1mm以下の光沢	良好	赤褐	赤褐
31 SD1	須	坏身	完形	口 縁	13.3	3.7	同底ナデ	上位:ヘラ剥り 下位:同底ナデ	1～3mmの白色	良好	灰	灰
42 SD2	須	坏身	口縁～底部	口 縁	13.3	—	同底ナデ	2mm以下の白・灰・米褐色	2mm以下の白・灰・米褐色	良好	灰	灰

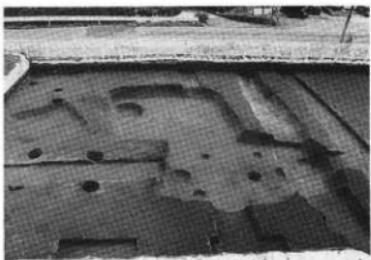
第24表 山崎下ノ原第1遺跡出土土器觀察表(2)

番号	出土地	遺物	形態	部位	口径	體高	調査等		施土	焼成	外觀	色調
							内面	外觀				
43	SD2	灰 灰陶	口縁~底盤	11.5	3.8	圓筒ナデ	上位:四面ナデ 下位:へラ削り	1~3mmの白色粒	良好	灰	オリーブ灰	オリーブ灰
44	SD2	須 灰陶	光形	12.1	4.3	上位:燒毛ナデ 下位:へラ削り	上位:燒毛ナデ 下位:へラ削り	3mm以下の白褐色粒 2mm以下の灰褐色粒	良好	灰	灰	オリーブ灰
45	SD2	須 灰陶	光形	11.7	3.6	上位:燒毛ナデ 下位:へラ削り	上位:燒毛ナデ 下位:へラ削り	2mm以下の灰褐色粒	良好	灰	外觀:自然釉	
46	SD2	須 灰陶	光形	11.8	3.8	上位:燒毛ナデ 下位:へラ削り	上位:燒毛ナデ 下位:へラ削り	1mm以下の黒・白色粒 3mm以下の黒	良好	灰	灰	灰
51	SD3	上 灰陶	口縁~底盤	15.0	10.6	ミガキ	ミガキ	極細な透明白色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
52	SD3	上 高环	「口縁~底盤	14.5	8.2	ミガキ	ミガキ	1mm以下の赤褐色	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
53	SD3	土 高环	「口縁~底盤	13.6	8.5	ミガキ	ミガキ	1mm以下の赤褐色	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
54	SD3	土 壺	光形	11.5	9.6	上位:焼毛ナデ 下位:へラ削り	ナデ	1mm程の乳白色 2~4mmの灰褐色	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
55	SD3	土 片	口縁~底盤	12.7	4.7	上位:燒毛ナデのミガキ 下位:へラ削り	上位:燒毛ナデのミガキ 下位:へラ削り	3mm以下の赤褐色	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
57	SD4	須 壺	「口縁~底盤	21.8	9.7	上位:焼毛ナデ 下位:へら削り	ナデ	3mm以下の白色粒	良好	灰	オリーブ	外觀:自然釉
58	SD4	須 壺	口縁~天井窓	15.3	4.9	圓筒ナデ	上位:へラ削り 下位:へラ削り	1~3mmの灰・白色粒	良好	灰	灰	
59	SD4	土 壺	光形	15.5	5.5	橢円形ナデ	橢円形ナデ	無機透明白色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
63	SD5	土 片	口縁~底盤	12.9	4.9	ミガキ	ミガキ	2mm以下の褐色粒 微細な透明白・灰色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
64	SD5	土 片	口縁~底盤	13.4	5.2	ミガキ	ミガキ	1mm以下の黒・褐色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
65	SD5	土 片	口縁~底盤	12.2	5	ナデ	ナデ	1mm以下の褐色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
66	SD5	土 片	口縁~底盤	15.0	5.1	ミガキ	ミガキ	2mm以下の黒・褐色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
67	SD5	土 片	口縁~底盤	11.9	4.6	ミガキ	ミガキ	3.5mm以下の赤褐色 4mm以下の褐色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
68	SD5	土 片	口縁~天井窓	14.1	5.2	ミガキ	ミガキ	1mm以下の褐色粒 1mm以下の透明白色	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む
69	SD5	土 壺	口縁~天井窓	9.6	16.7	工具によるナデ 擦れ跡の方向の 擦れ跡の方向の	上位:焼毛ナデ 下位:焼毛ナデ	1mm以下の黒・褐色粒 無機透明白色粒	良好	灰	灰	外觀:無色透明白色 赤色顔料を含む

第25表 山崎下ノ原第1遺跡出土器物調査表(3)

序号	出土地	遺物	層面	深度	部位	法面 (cm)	断面	調査等		焼成	内面	外面	色調	備考
								外因	内因					
70	SC5	須 砕	刃身	上縁～底部	12.0	4.0	上位:回転ナナ 下位:直輪ナナ	上位:圓弧ナナ 下位:へラ削り	上位:圓弧ナナ 下位:回転ナナ	7mm以下の灰白色 2.5mm以下の灰白色	良好	灰	灰	
122	一括	須 砕	刃面	口縁～矢井部	13.4	4.0	上位:回転ナナ 下位:直輪ナナ	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	上位:圓弧ナナ 下位:へラ削り	3.5mm以下の乳白色	良好	灰	灰	ヘラ削り
123	一括	須 砕	刃面	口縁～矢井部	13.2	4.0	上位:回転ナナ 下位:直輪ナナ	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	上位:圓弧ナナ 下位:へラ削り	1mm以下の乳白色	良好	灰	灰	
124	一括	須 砕	刃面	口縁～矢井部	14.0	3.9	回輪ナナ	ト位:回転ナナ	上位:回転ナナ 下位:圓弧ナナ	3mm以下の白・乳白色	良好	灰	灰	
125	一括	須 外身	口縁～底部	11.2	3.8	回輪ナナ	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	1mm以下の灰白色	良好	灰オーラブ	灰		
126	一括	須 外身	口縁～底部	11.9	3.5	上位:回輪ナナ 下位:直輪ナナ	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	1mm以下の灰白・灰白色	良好	灰灰	灰白		
127	一括	須 外身	口縁～底部	11.5	4.0	回輪ナナ	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	上位:回転ナナ 下位:へラ削り	3mm以下の灰白色	良好	灰	灰	灰オーラブ	外面:自然物
128	一括	須 竜	笠形	9.0	7.7	橢方向のナナ	上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	1mm以下の灰白色	良好	灰	灰	灰白	
129	一括	土 杖	周縁～底部	14.4		斜め前方の工具ナナ 上位:橢方向のナナ 下位:あて具類(筒心)	斜め前方の工具ナナ 上位:橢方向のナナ 下位:あて具類(筒心)	斜め前方のナナ 上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	2~4mmの灰・白色	良好	灰	灰		
130	一括	須 竜	笠形	11.1	11.9	橢方向のナナ	橢方向のナナ 上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	橢方向のナナ 上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	3mm以下の乳白色	良好	灰オーラブ	灰	内外面(部分的):自然物	
131	一括	須 ハソク	笠形	11.1	11.9	橢方向のナナ	橢方向のナナ 上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	橢方向のナナ 上位:橢方向のナナ 下位:へラ削り	1.5mm以下の黒色	良好	紫灰 黄褐色	紫灰 黄褐色	内外面:自然物	
132	一括	須 ハソク	底部	1.0		橢方向のナナ	橢方向のナナ ナナ	橢方向のナナ ナナ	2.5mm以下の黒色	良好	灰	灰	灰	内外面(部分的):然分骨
133	一括	土 甕	上縁～脚部下	9.6		ナナ	ナナ	ナナ	2mm以下の褐色	良好	鷺灰 淡黄褐	鷺灰 淡黄褐	鷺灰 淡黄褐	外面:自然物
134	一括	土 深鉢	裏沿～底部			ナナ	ナナ	ナナ	4mm以下の褐色	良好	鷺	鷺	鷺	にぶい色 青灰色(2カラ所)
135	一括	土 斧	口縁～底部	14.7	7.1	ナナ	ナナ	ナナ	5mm以下の海・白色	良好	鷺	鷺	鷺	内外面:風化泥炭味
136	一括	土 斧	口縁～底部	13.8	7.2	ナナ	黒變	ナナ	1mm以下の無色透明状	良好	灰	灰	灰	外圍:風化泥炭味 空孔(1カラ所)

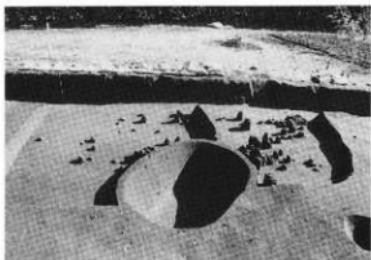
图版1



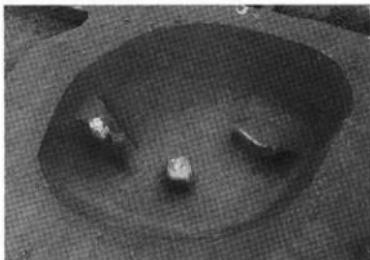
A区完掘状况



C区完掘状况



C区SA1·2及SC1完掘状况



C区SC1遺物出土状況



D区完掘状况



D区SA4(手前:SD2)



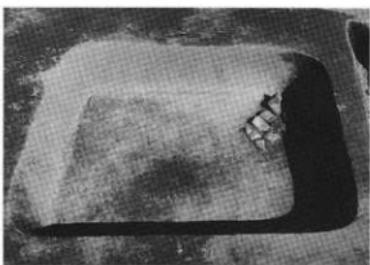
D区SD2検出状況



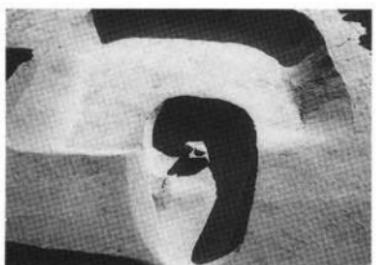
D区SD2検出状況



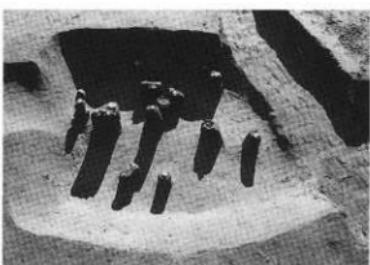
D区埋甕出土状況



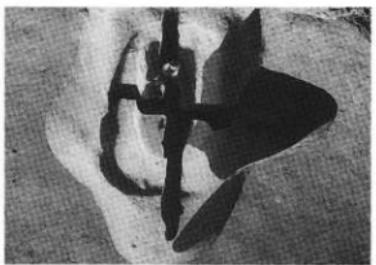
D区SA5遺物出土状況



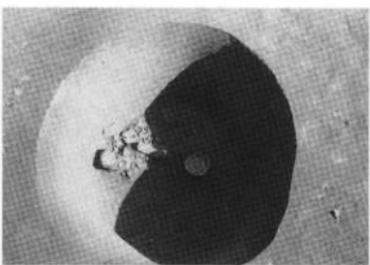
E区SA9完掘状況及びSD1遺物出土状況



E区SA2遺物出土状況



E区SD1遺物出土状況



E区SC1遺物出土状況



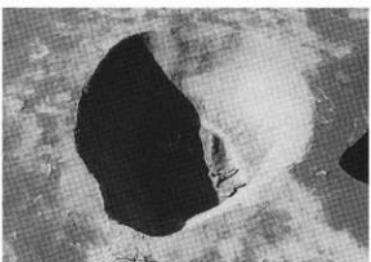
F区完掘状況



F区SD1遺物出土状況



F区SC5馬具出土状况



F区SC8馬具出土状况



F区SC8馬具出土状况



G区完掘状况



G区5号坑周濠完掘状况



G区SD2完掘状况



G区SD2遗物出土状况



G区SD3遗物出土状况



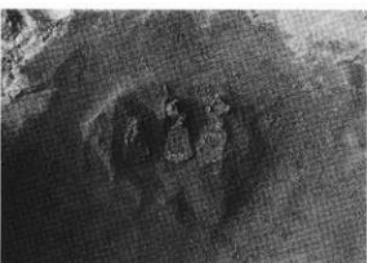
G区SD4遗物出土状况



G区SC15马具出土状况



G区SC16马具出土状况



G区SC16马具出土状况



H区6号填周灌完掘状况



H区完掘状况



H区第2号填完掘状况



H区第2号填主体部遗物出土状况